Historical Studies of Socialist System

ISSN 2432-8774

社会主義体制史研究

No.10（September 2019）

1973 年第 10 回世界青年学生祭典（東ベルリン）に見る自由化百景
ー東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について（1）ー

青木國彦（東北大学名誉教授）

Hundert Ansichten der X. Weltfestspiele der Jugend (Ostberlin, 1973)
Über Honeckers „Liberalisierung“ (1971-75) in der DDR (1)

Kunihiko AOKI (Professor emer., Dr., Tohoku University)

社会主義体制史研究会
The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System

『社会主義体制史研究』(Historical Studies of Socialist System)

ISSN 2432-8774

Website: http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm *new*

下記の**旧 URL からも自動切換(リダイレクト)**です。2019.08.22 午後までの約 2 週間はリダイレクトが機能せず、ご迷惑をおかけし、お詫び申し上げます。
旧 URL: http://www.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm (違いは数字「2」の有無のみ)

publisher: 社会主義体制史研究会
(The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System)

size: A4

mail to aoki_econ7tohoku8ac899 (7 --> @, 8 --> ., 99-->jp)

不定期刊(原稿があり次第発行)、文字数制限なし、無料のオンライン・ジャーナルです。

旧社会主義諸国(共産圏)の歴史(「革命」前・体制転換後を含む)と、社会主義や共産主義の思想・理論を対象に批判的検証を志しています。投稿歓迎。

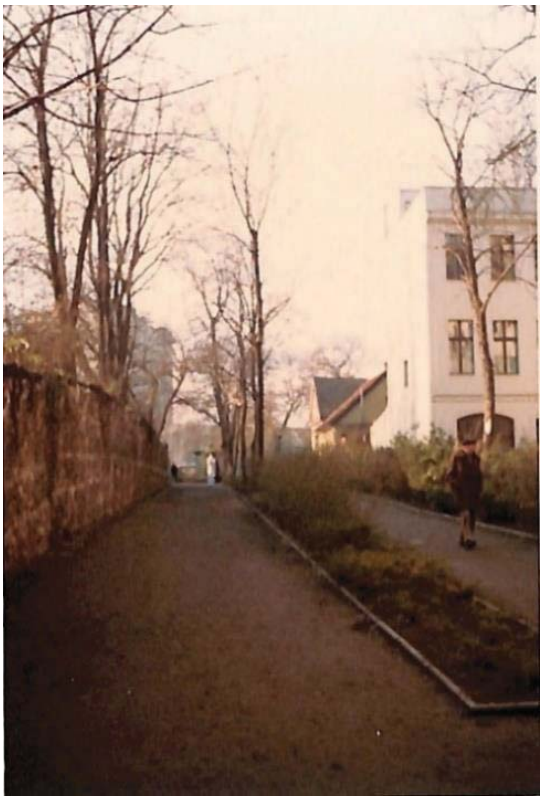
表紙の写真

私服のシュタジ(東独秘密警察) 1981 年 5 月 7 日撮影(© Kunihiko AOKI)

真ん中付近の 2 人ほかが、「いつもは制服を着ているとすぐ分かる」と言われる私服シュタジ。目つきと動作、横柄な態度で一目瞭然。彼らは 5 月 8 日の「解放」(東独ではソ連の対独戦勝=解放)記念行事舞台の準備を警備(東ベルリンのカール・マルクス・アレー)。顔つきや服装、カメラから撮影者を外国人(日本人)と識別したはず。撮影禁止表示はなく、彼らは何も言わなかったが、彼らの習性が発揮されている。(本号論文**図 12** にも掲載)

下の写真

ドロテーン墓地の塀(左側)とブレヒト・ハウス(右側) 1981 年 11 月 15 日撮影(© Kunihiko AOKI)



撮影前日に哲学者ヘーゲルの 150 年忌が、東ベルリン中央区のドロテーン墓地(Friedhof der Dorotheenstädtichen und Friedrichswerderschen Gemeinden)で催されたと知り、同墓地へ出かけて撮影した。

墓地の隣に劇作家・演出家**ブレヒト(Bertolt Brecht)**夫妻の家があり、その墓もヘーゲルの墓(本誌 8 号表紙の写真)の近くにある。

1973 年の第 10 回世界青年学生祭典開会式場であった世界青年スタジアムはこの墓地の近くにあった。

同祭典の一角でも歌ったと言われる人気のシンガーソングライターで、著名な反体制派ハーベマン(Robert Havemann)の盟友であった**ビアマン(Wolf Biermann)**が当時住んでいたアパートも近くにあった。ビアマンの「本領は、ブレヒトの衣鉢をつぐソングとバラードにある」と言われる(野村修『ビアマン詩集』1972:180)。

ビアマンは第 10 回世界祭典の 3 年後に西独公演からの帰国禁止となり、追放された。

社会主義体制史研究 10（2019 年 9 月）（ISSN 2432-8774）

1973 年第 10 回世界青年学生祭典（東ベルリン）に見る自由化百景

ー東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について（1）ー

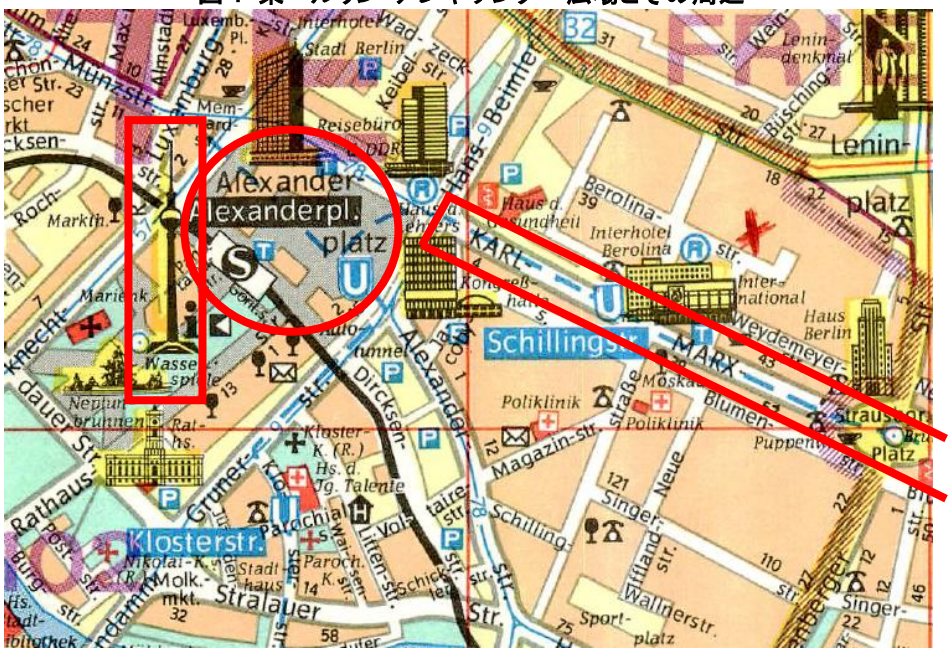
青木國彦（東北大学名誉教授）

Hundert Ansichten der X. Weltfestspiele der Jugend (Ostberlin, 1973)

Über Honeckers „Liberalisierung“ (1971-75) in der DDR (1)

Kunihiko AOKI
(Professor emer., Dr., Tohoku University)

図 1 東ベルリン・アレキサンダー広場とその周辺



（注）第 10 回世界青年学生祭典（1973 年）における「自由な議論」の主な場所は、東ベルリンの**アレキサンダー広場**（略称**アレックス**、赤い円内）と、その左隣の**テレビ塔**（赤四角、その左横に聖母マリア教会、真下に市役所）付近。東独青年団の大デモンストレーション会場は、**カール・マルクス・アレー**（赤い斜め四角、右下へ続く、旧スターリン・アレー）。

アレキサンダー広場は S バーン（都市内鉄道、白抜きの「S」）、地下鉄（同じく「U」）、市電、バスが多方向に結ぶ交通の要衝。テレビ塔上部の球体（展望レストラン）は日光が当たると十字に反射するので、俗称「ザンクト・ヴァルター」だった。ヴァルターは 1971 年までの権力者ウルブリヒトのファーストネームであり、この俗称はキリスト教冷遇の東独が大きな教会塔を建てたという揶揄であった。（出所）東独作製の地図 VEB Tourist Verlag(1980:17)に青木が一部加筆。

目次[1]

1. はじめに 2
2. 世界に開かれた祭典 2
3. 第 10 回世界青年学生祭典（7 月 28 日-8 月 5 日） 4
4. ホーネッカーによる評価と SED 中央委の終了報告 7
5. 東独製版工見習いライナーの現場回想 8
6. 西独からの参加者についてのレキシン報告 9
7. 「より広い人民戦線基盤」：1951 年祭典等との比較 12
8. 資金、労働力負担、住民の反応など 13
8.1 資金 13
8.2 労働力負担など 14
8.3 住民の反応 15
9. シュタジ・人民警察などの対策 15
9.1 ミールケの命令 13/73 16
9.2 祭典期間：「寛容」とひそかな対策、ビアマンの脅威 17
9.3 祭典前：大規模予防措置 20
10. 作家クンツェの「元素」と「残響」：予防措置と事後 22
10.1.「元素」（Element） 22
10.2.「残響」（Nachhall） 23
11. その後の評価 23
12. 両独・ソ連の関係者と東独記者の 31 年後の回想 24
13. 体制内少女メルケルの 30 年後の分析 27
a）論点：「2 つの思考の束」、b）外国からの参加者との関係,c）「左翼抗議文化、 d）祭典とロック音楽、e）商業化、f）カーニバル化、g）「何ものにも替え難い経験」
14. 東独中央青年研究所の調査結果と「2 つの民族」 32
15. おわりに 35
（補注 1）祭典への東独参加者「800 万人」とは 36
（補注 2）ライプチッヒのロックバンド「クラウス・レンフト・コンボ」と 1965 年「ビート騒乱」（「ロック騒乱」） 37
（補注 3）1951 年第 3 回世界青年学生祭典（東ベルリン）における西ベルリン警察との衝突事件 38
図 13・14、表 4・5・6・7、図 16 39（他の図表は本文中）
略語・引用文献 41

[1] 引用における〔〕内は青木の挿入。両独の国名は東独・西独と表記するが、引用では原文（DDR・BRD など）の表記に従う。

1. はじめに

東独ホーネッカー（Erich Honecker）政権初期（1971～1975 年）の「自由化」と世界への「開放」の評価は分かれる。

そこで、それが実体のない幻想だったのか、実体を伴う雪解け現象だったのかを、実情と当局の公式文言の推移などから探ろうと思う。

その第 1 回として本稿は、東独史上最大規模の国際イベントであり、かつ東独の若者が自由を謳歌したと言われる第 10 回世界青年学生祭典[2]（1973 年 7 月 28 日～8 月 5 日東ベルリン）を取り上げる。この第 10 回祭典を以下単に祭典と呼ぶ（引用文以外）。

祭典では開放と自由化の中身として大方が東独青年の、幅広い政治思想の西独青年との出会いを挙げるが、なかには「左翼抗議文化」、とりわけ第三世界とチリにおける革命と解放の熱気の伝播と、そこからの帰結として東独青年の民主的・人間的社会主義熱望を挙げる者もいる。

第 2 回は、検閲を打破しようとしたアンソロジー「ベルリン物語」事件（1974～1976 年）を取り上げる。その際に当局の公式発言の推移も検証する。アンソロジーの組織者は、ハイム（Stefan Heym）ら長老作家に支持されたプレンツドルフ（Ulrich Plenzdorf）、シュレジンガー（Klaus Schlesinger）、シュタデ（Martin Stade）の 3 人の作家であった。

祭典とアンソロジー事件は別々に扱われてきたが、1970 年前半の東独文化政策を論じるには、両者を統合的に見る必要がある。さもないと、一方は祭典のみの瞬間事象、他方は一部作家の孤立現象になってしまう。前者 1973 年、後者は 1974～76 年に、同じ時代背景のもとに同じ方向性で発生したので、両者に共通の底流を見るべきである。現に祭典は、「知識人や芸術家の間」にも、ホーネッカーによる自由化への期待をもたらしたという回想もある（**5 節**）。

祭典を主題とする**本稿の構成**は次のようであるが、長文になった。垣間見るには本節と 5・12・13 節を、次には 6・7・10 節を見ていただければと思う。できれば残りも。

祭典の背景と理念など（**2 節**）、祭典の総括的紹介（**3 節**）のあと、それが当時どう評価ないし報道されたかを、東独指導部（**4 節**）、非公式に参加した東独青年ライナー（**5 節**）、報道に当たった西ベルリンの記者レキシン（**6 節**）、西独国際放送編集者リップマン（**7 節**）について紹介する。**8 節**は祭典の費用面と、費用への住民の反応である。

9 節は祭典とその準備段階の裏面の詳細である。中心はシュタジ（東独秘密警察）の大規模作戦「旗」であり、警察と軍、関連民間組織も動員された。**10 節**は、取材の基づいて東独作家クンツェが描いた祭典の裏面=警備の様子である。

11～13 節は数十年後の回想や分析、評価である。そのうち **12 節**は 31 年後の多方面の関係者 22 人（両独と旧ソ連）に実施されたインタビューからの抜粋である。

東独青年にとっての祭典の最大のメリットを西独青年との自由な議論と文化催しに見る大同小異の評価が大方のである中で **13 節**のメルケルは、東独青年にとって西独人は周知であり、ほかの国々の「オータナティブの思考と生活の様式との生き生きとした出会い」という「取り消され得ない経験」、「何ものにも替え難い経験」をし、彼らとの「明確な左翼世界観」の共有や世界観の差異を越える「反帝国主義コンセンサス」が「最もすばらしい経験」であり、同時に祭典が青年固有の文化の展開を可能にする転換点になったと言う。

14 節では東独ライプチッヒ青年研究所の興味深い青年世論調査結果（1969～1989 年）を紹介する。祭典評価には当時の東独青年の意識を知る必要もあるからである。

15 節は終わりに当たっての付言である。最後に、関連事項の説明のため 3 つの**補注**を加えた。

現在では思いも掛けないことであろうが、ソ連のグラチョフ証言によれば、1970 年代初めの東独を含むソ連東欧指導者の世界情勢認識は、共産主義優勢であり、東独主導のドイツ統一も第三世界の抱き込み（反帝国主義統一戦線）も可能であって、だから対外開放を恐れる必要ないというものであった。彼はそれを「全般的近視眼」と呼ぶ（**12 節**）。

ホーネッカーの「自由化」策は現時点ではマヌーバーと見られるであろうけれども、一方での当時の彼らのこのような世界情勢認識や両独宥和（1972 年 12 月 21 日署名、翌年 6 月 21 日発効の両独基本条約ほかの諸条約・協定）、両独の国連加盟（1973 年 9 月）などによると東独の国際的地位確立と、他方での特に 1960 年代後半に鬱積した国内不満などの状況を考慮すると、必ずしもそうとは限らない。

「ペレストロイカ」への反発ゆえか、東独指導者であったホーネッカーは保守強硬派と見られている。確かに東独文化政策を厳しく引き締めた 1965 年のいわゆる「皆伐総会」の政治局報告を担ったのは彼であった。

他方で彼は SED（東独支配党）中央委員会第 4 回会議（1971 年 12 月 16-17 日）では、「芸術と文学の領域にはタブーは存在し得ない」と語り、国内でも西独でも注目された。

実はこの発言には前提条件がついていたが、それでも従来に比べた文化自由化への踏み込んだ発言と見られた。

それは、彼が 1971 年 5 月 3 日にウルブリヒト（Walter Ulbricht）から奪権し、第 1 書記に就任したばかりの時であった（1976 年から書記長）[3]。

以後ウルブリヒト時代、とりわけ 1960 年代後半に比べて明らかに規制が緩和され、自由化の空気が漂った。祭典はその大規模な象徴であった。

2. 世界に開かれた祭典

祭典はホーネッカーが政権に就いた直後に東ベルリン開催が決まり 1973 年 7 月 28 日～8 月 5 日に実施された。

それは東独の総力を挙げた一大イベントであるとともに、「東のウッドストック」と言われたように実際に大量の若者たちが自由な文化と議論を堪能したイベントでもあった。1969 年 8 月のウッドストックから 4 年後であった。

祭典は体験者や観察者の視点とその遭遇場面などによって様々に評価されたし、回想されているので、本稿表題を「百景」とした。

シュピーゲル誌のペッツル（Norbert Pötzl）は、「DDR

[2] ドイツ語 X. Weltfestspiele der Jugend und Studenten、英語 10th World Festival of Youth and Students。

[3] SED 中央委第 16 回会議（1971 年 5 月 3 日）のコミュニケによれば、ウルブリヒトが年令を理由に、「より若い人にこの職務を与えるために」自分の第 1 書記解任を願い出て、「全員一致」でそれが承認され、やはり「全員一致」でホーネッカーを後任第 1 書記に選び、またウルブリヒトを「全員一致」で SED 議長に選出するとともに東独国家評議会議長の職の継続を決めた（Dokumentation 1971:546）。実体は、よく知られているように、ホーネッカー・グループがブレジネフの支援を受けつつ奪権した。

〔=東独〕の歴史において 1973 年ほど多数の囚人が存在したことはなかった」と評し、祭典自体も「演出されたショー」に過ぎず、「その瞬間のための開放」であり、祭典終了とともに「再び隔離された」たと言う（bpb 2004）。

しかし当時は、日常において作家や芸術家も自由化を感じ、アンソロジー・グループが検閲排除を企画したほどであったのだから、自由化を祭典の場だけの瞬間ショーとして幻想視することはできない。

しかも祭典における自由化は、仮に「瞬間」であったとしても、「800 万人」参加と称される東独青年たちが実感した大衆体験であったのだから、その体験効果は深く広く根付いたはずである。一度吸った自由の空気は忘れられない。

後述のように色々な文献に祭典参加者 800 万人と出てくる。これが実数なら 1973 年の東独人口 1698 万人のほぼ半分である。これは延べ人数に違いないが、そうは記されていないし、どのような集計なのかも記していない。

色々な公式報告数字から、本稿では東独内参加者実数を五十数万人と推定した（詳細は**補注 1**）。

東独の若者五十数万人が、以下に見るように、従来あり得なかった驚異の体験をし、それを家族、友人知人、職場、FDJ〔東独の官製青年団〕基礎組織など東独内の隅々にまで伝えた。まさに大衆的な自由化体験とその伝播であった。

それは同時にホーネッカー時代の幕開けを飾る出来事の 1 つでもあった。そのことは、祭典直前に、祭典開会式会場の名称が「ヴァルター・ウルブリヒト・スタジアム」（Walter-Ulbricht-Stadion）から、「世界青年スタジアム」（Stadion der Weltjugend）に変更され[4]、祭典期間に前権力者ウルブリヒトが死去したにもかかわらず何ごともないかの如くに祭典が続行されたことにも現れていた[5]。

祭典は東独の国家としての承認ラッシュの中で開催された。東独を建国（1949 年 10 月 7 日）直後に承認したのはソ連、東欧 6 ヵ国、中国、北朝鮮、モンゴルのみ、その後北ベトナムとユーゴスラビアが続き、1963 年にキューバとも外交樹立となったが、共産圏に留まった。

ようやく 1969 年以後エジプトなど第三世界に外交関係が広がり、1972 年 10～11 月にインド・パキスタンが承認したあと、同年 12 月から承認ラッシュが始まった。同年中にスイス、オーストリアを含む 20 カ国以上が、1973 年には日本を含め、祭典開始までに 40 ヵ国近くが承認した。米国による承認は 1974 年であった[6]。

だから、後述の国家祭典委員会発足直後に SED 中央機関紙 ND は、「第 10 回祭典は平和、友好、連帯のための反帝国主義闘争における青年の団結の世界規模の宣言として記憶される。そしてそれは DDR 承認のデモンストレーションになる。というのは祭典の場所の選択は政治的支持表明を含んでいるからである」とコメントした（ND 1972.02.28、Wesenberg 2003:652 から再引用）。

この論理はあまり賢明ではない。1951 年東ベルリン開催は世界の殆どが東独を承認しない時であり、祭典開催と国際承認は別個であったからである。しかしコメントには承認ラッシュに大喜びの気持ちがよく出ている。

従って祭典は東独という国家およびその新指導者の世界デビュー記念式典でもあった。それゆえ「世界に開かれた」（weltoffen）という理念の演出が重視された。

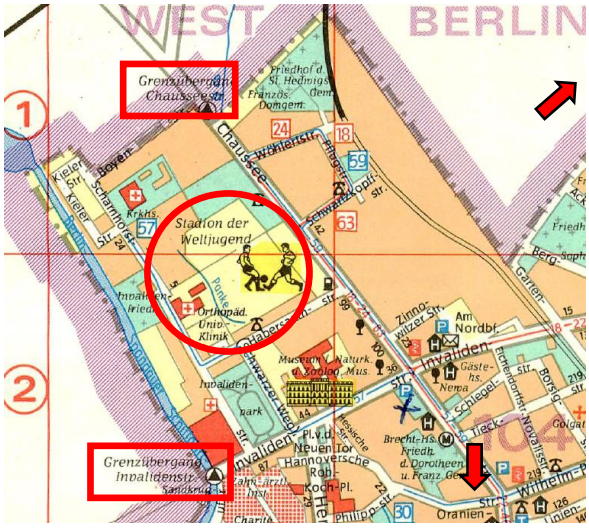
この祭典は、東独への国際世論の認知高揚のためのホーネッカー政権初期の大仕事であったと同時に、東独国民に権力者交代による文化の「自由化」到来の希望を抱かせたという意味で特筆に値する出来事でもあった。

「開放」と「自由化」がキーワードであった。

ブルガリアのソフィアにおける前回祭典（1968 年）は、ワルシャワ条約諸国のチェコスロバキア侵攻直前であり、「激しい論争に塗りつぶされた」（Rexin 1973:574）。従ってソ連にとっても今回の祭典の成功は重要であった。

しかし開閉会式のあるスタジアムはベルリンの壁が三方を囲む狭い区域の中にあり、ショッセー通り国境検問所（Grenzübergang Chausseestraße）とインバリデン通り国境検問所（Grenzübergang Invalidenstraße）も間近であった。近くにあるヤーン・スポーツ公園（Friedrich-Ludwig-Jahn-Sportpark）も祭典の大規模会場であった（Ohse 2003:350）。その西側面は壁であった（**図 2**）。

図 2「世界青年スタジアム」と周辺



（注）赤い円内がスタジアム。その三方を囲む太い網目線の端を巡る極太一点鎖線がベルリンの壁、周辺の白地は西ベルリン。赤い四角のうち上がショッセー通り検問所、下がインバリデン通り検問所。右上の赤矢印の先にヤーン・スポーツ公園、右下のそれにビアマンのアパート。（出所）VEB Tourist Verlag (1980: 16). 赤い円と四角、矢印は青木。

青年の集団が検問所や壁の突破を図りかねず、可能性があると見られる青年の事前排除を含む万全の警備が計画された。「開放」「と「自由化」を世界と国民に宣伝しつつ、同時に権力にとって遺漏なき祭典にすることは、東独指導部とシュタジや警察、国境守備隊にとって難題であった。

その対策を協議する場で、シュタジ大臣ミールケ（Erich Mielke）が、祭典期間は射撃を控えるが、「射撃命令は廃止されない」と言ったことが記録された。ドイツ統一後、ドイ

[4] このスタジアムは両独統一後解体され、今ではドイツの情報機関 BND（連邦情報局）本部が建っている。1951 年に東ベルリンで開催された第 3 回祭典もこのスタジアムで開会された。

[5] ウルブリヒトは祭典中の 1973 年 8 月 1 日に死去した。その葬儀は祭典終了後の 8 月 7 日であった。外交担当の東独政治局員アクセン（Hermann Axen）が祭典国際準備委員会常任委員会に、ウルブリヒト死去の報とともに、祭典が成功裏に終えるようにとのウルブリヒト自身の希望を伝えた（Dokumentation 1973:999）。

[6] 米国による承認が遅くなった事情については Wentker（2007: 452f.,訳:567）参照。またいわゆるベルリン問題関連で英米仏大使が東独側に信任状を提出したのはいずれも 1974 年であった（同:451,訳 565）。

ツ検察や BStU（シュタジ文書保管庁）、西独研究者などは、東独の「射撃命令」探しに躍起となったので、この記録が注目された（詳細別稿）。

ホーネッカー政権の手始めの大仕事は、東独では広範に残存していた私営中小企業（半官半民を含む）の国有化であった。それは彼の権力奪取を手助けしたブレジネフへの約束履行でもあった。但し彼はこの政策の副作用に気付き、5 年後には小規模私営振興に政策転換した[7]。

いま 1 つは生活水準向上に向けた「経済政策と社会政策の統一」であった（**14 節**で少しだけ触れる）。

3. 第 10 回世界青年学生祭典（7 月 28 日–8 月 5 日）[8]

当時現場を体験した Wolle（2008）[9]は、祭典の風景を次のように描写した：

> 「800 万人が歌い踊り議論した：1973 年東ベルリンでの世界青年祭典は DDR の青年にとって、空気の濁った社会主義を忘れさせる夏の夜の夢であった」。
>
> 「空は FDJ の制服シャツのように青く、太陽はその金色のエンブレムのように輝いていた〔**図 3**〕。
>
> 歓声、混雑、陽気〔、そしてデコレーション〕が DDR の首都ベルリンのすべての通りと広場を覆った。色とりどりの旗が夏の空にひるがえり、いたるところでラテンアメリカやアフリカ、アジアの音楽グループの激しいリズムが聞こえた」。〔東独ロックも。〕
>
> 「小さな自由の大きな祭典として世界祭典は世論の記憶に残った。奇跡が生じたのか。醜い灰色の小さなアヒル DDR がアンデルセンの童話のようにすてきな白鳥に変身した。それまでは厳しく禁じられていた多くのことが突然可能だと思われた」。
>
> 「人民警察官が親しげに笑いかけた。大動員されたシュタジ要員が配置につくことなしに、芝生を遮られることなく横切り、緑地帯に座り、ギターで歌うことができた」。だから祭典は、西側から見ると、「東のウッドストック」、「赤いウッドストック」、あるいは「東のサマー・オブ・ラブ」であった。
>
> 「しかしもっと良いことがあった：連邦共和国〔=西独〕と西ベルリンからのあらゆる傾向の諸青年組織がオープンに登場し、チラシを配り、いかなる妨害もなしに DDR 市民と議論した」。「アレキサンダー広場で議論する人の群れが世界青年祭典を特徴付け」た。
>
> 〔この「特徴付け」は、同じく参加者であるメルケル（**13 節**）とは大きく異なる。〕

Wolle（2008）は以上のように描写したあと、「DDR 指導部は本当に自発性と緩和に賭けたのか。舞台装置の後ろを見ると、このあまりにも美しい外観の多くは残らない」と続けた。そうなのかどうか、そこが問題である。

やはり当時の東独参加者で、のちに東独テレビのキャスターになったカーナイ（Jürgen Karney）は、「なんとなくホルモンが充満し、頭のてっぺんまでテストステロンだった。女の子はすてきで、スカートは短く、天気はすばらしく、雰囲気は熱かった」と振り返った（MDR 2018）。

図 3　FDJ の旗

（注）1946 年 2 月結成の FDJ の旗。中心にエンブレム。行事では団員はこの青色の Y シャツ・ブラウス（左上腕にエンブレム縫い付け）を着用し〔以下青シャツと呼ぶ〕。団歌は元文化相ベッヒャー（Johannes R. Becher）作詞の「青い旗の歌」である（楽譜とともに Jahnke 1983:197 所収）。1948 年 12 月 22 日公開の「FDJ の建設の歌」はブレヒト（Bertolt Brecht）作詞、デッサウ（Paul Dessau）作曲。FDJ の世界民主青年連盟加盟は 1948 年（Jahnke 1983:157,148）。

FDJ が祭典の表向きの主役であった。それは「自由ドイツ青年団」の略称であり、SED 配下のいわば官製組織であった。Wolle（2008）もそれを「国家の青年組織」（Staatsjugendorganisation）と呼んだ。FDJ の初代トップであったホーネッカーが「今や国の最高権力者になったので、以前よりもなお一層強く」、FDJ は党の「積極的な助力者かつ予備軍」たらんとした（Helmberger 2008:292）。

FDJ は〔祭典行事全般の実行役であるとともに〕、団員 190 万人のうち 170 万人が宿舎〔民泊〕獲得やポスター描きなどを引き受け、また西独からの参加者相手の理論武装の合宿や議論練習を実施した（bpb 2003）。

FDJ の団員数は 1972 年末 189 万人、1973 年末 197 万人であり、「積極的団員率」は前者 59.36%、後者 60.4%であった（Ohse 2003: 345）とすれば、上記の 170 万人は疑わしい。

世界青年学生祭典は世界民主青年連盟（World Federation of Democratic Youth）が国際学連（International Union of Students）とともに、当初は、1947 年第 1 回プラハ、1949 年ブダペスト、1951 年東ベルリン、1953 年ブカレスト、1955 年ワルシャワ、1957 年モスクワ、1959 年ウィーンと 2 年ごとに、その後は 1962 年ヘルシンキ、1968 年ソフィア、1973 年東ベルリン、1978 年ハバナ、1985 年モスクワ、1989 年平壌で不定期に開催された。その後も数年毎に開催されている。

祭典の東ベルリン開催は、世界民主青年連盟が 1971 年 9 月に仮決定し、東独がそれを受け入れ、1972 年 1 月に祭典の国際準備委員会（略称 IVK）が設立された。

東独では 1972 年 2 月 18 日にホーネッカーを委員長とし、118 人からなる国家祭典委員会（NFK）が設立された。

同日の同委員会呼びかけには、「すべての大陸の若い世代がわが企業と協同組合、学校と大学、通りと広場で、わが国の市民がいかに首尾良く社会主義の道の先頭を歩

---

[7] ホーネッカー政権の国有化資料集は Kaiser（1990）、私営復活策とその諸事例は青木（1985; 1985a）参照。

[8] 下記 wikipedia commons に、ドイツ連邦公文書館所蔵を中心とする同祭典の写真が 121 枚ある：https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:10th_World_Festival_of_Youth_and_Students?uselang=de

[9] Wolle は東独史の著作多数。1950 年生まれ、1971 年フンボルト大学入学、1972 年「政治的理由から放校」となった。しかし 1973 年に学業継続となった（Müller-Enbergs 2010:1451f.）。その後彼は東独科学アカデミーの中央歴史研究所や一般史研究所の研究者となった。彼と Mitter がまだ東独が存在した 1990 年 3 月に出版したシュタジの「命令や報告の初めての資料集」（Mitter 1990）は「わずかな日数」で 20 万部売れた（同前）。

んでいるかを納得するだろう」とあった。他方で西独への攻撃の言葉が全くなかった（Breßlein 2003）。

但し、FDJ 中央評議会書記局はすでに 1971 年 6 月 3 日に祭典に関する提案をした（Mählert 1996:195f., 原資料 SAPMO, DY 24/8422）。したがってすでに仮決定以前に東独側の準備が進められていたことになる。

ホーネッカーが FDJ 責任者であった 1951 年祭典では、運営に「重大な組織的欠陥」が露呈し、「宿舎が不足し、食事が滞り、〔入場券を持たない〕首相グローテヴォールが貴賓席に着くことができなかった」（Nawrocki 1973）。

そこで今回は「最高の完全さ」を目指した〔但し、後述のように、現場の「自己責任」を強め弾力性を持たせたと言われる〕。〔本来の宿泊施設では到底足りないから〕宿舎確保の一環として 2.5 万人の青年を 2 度動員して民宿を募って 8 万人分以上を確保し、近隣の集団・国有農業経営（LPG と VEG）施設〔や学生寮、教室転用など〕の利用、市内のピオネール公園に巨大なキャンプ場設置などにより 1.1 万人分を確保した（同前）。

食事については SED 東ベルリン第 1 書記の事前発表によると、「外国人のために 32 の祭典用飲食店、63 の商業施設、72 の食料袋供給所、11 の野外食堂〔**図 4**〕、190 の軽食供給所」と「690 の巡回販売、150 の飲み物販売車、30 の路上カフェ」が、「そして夜には 90〔実際には 95〕の広場でダンス」が予定された（同前）。

図 4 多くの臨時野外食堂設置。これは中央区

（注）Karl-Liebknecht-Straße.（出所）Wikimedia Commons: Bundesarchiv, Bild 183-M0801-403 / Junge, Peter Heinz / CC-BY-SA 3.0

bpb（2003）は「世界祭典の数字と事実」として、次のような数字を挙げた（抜粋）（そのうち抑圧の数字や資金集めの「計画超過達成」数字などは後述）：

- 期間中に国内から「800 万人のゲストが押し寄せた」。「9 日間に約 800 万人の訪問者」とも表現。
- 「4260 人のシュタジ常勤職員」が監視した。
- 「95 の舞台」で「歌声サークル」の登場や「ビート・ロックコンサート」があった。
- 「140 ヵ国から代表 25600 人」〔公式発表では 25646 人〕が参加した。
- 西ベルリンを含む西独から社会主義的団体のみではなく、労組青年部、ボーイスカウト、シュレーバー青年団など代表 800 人が参加した（詳細後述）。
- 「祭典期間、約 5000 人の混声大合唱」が、前年の懸賞募集で採用された祭典歌（「若い世界がベルリンに招かれ、彼らは敵の都合を気にかけない…」）を歌った。

上記にある舞台では音楽、とりわけ「ビート・ロック」が参加者を引きつけた。

Ohse（2003:350）によると、特に東独ライプチッヒの祭典委員会が、「トーマス教会少年合唱団から“合唱クラブ、音楽学校の生徒、DSF〔独ソ友好協会〕アンサンブルのメンバー”、さらにロックバンドまで」多くを派遣し、「その中でトップの地位を占めたのはレンフト（Renft）であった」。

リーダー・レンフトのロックバンド「クラウス・レンフト・コンボ」（Klaus Renft Combo、1967 年結成、前身は 1957 年結成）は、その LP が祭典当時ベストセラーになるほどの人気であり、祭典でも公演した。1975 年 9 月末に公演禁止となり解散した。ロック・ビートの扱いは青年文化政策の焦点であった（**補注 2** 参照）。

図 5 開会式：入場行進（先頭）

（注）先頭が祭典旗と国際準備委員、うしろの横断幕に祭典スローガン「反帝国主義連帯と平和、友好のために」。開会式カラー写真多数が Abt XII Di Nr. 9 にあるが入場行進先頭の写真はない。（出所）Wikimedia Commons: Bundesarchiv, Bild 183-M0728-719/CC-BY-SA 3.0）。

祭典を東独研究者から見ると（Jahnke 1983:492ff.）：

開会式における代表団入場の最初は、「国際的な民主的青年運動の様々な流れを代表する」国際準備委員会であり、祭典スローガン「反帝国主義連帯と平和、友好のために」と記した横断幕を掲げた〔**図 5**〕。

「大歓声」を浴びて 2 番目に入場したのは「勝利を収めたベトナムから」の代表団であった〔「勝利」は同年 1 月の和平協定による南ベトナムからの米軍撤退を指す〕。他の諸国代表団は国名アルファベット順であり、東独代表団が最後に入場した。

祭典の「1 つの頂点は 8 月 4 日の FDJ の大デモンストレーション」であった。「何十万人もの FDJ 団員」がカール・マルクス・アレーをパレードし、「国家・党指導部メンバー」やアラファト（PLO）を含む賓客、「何万人もの内外からの訪問者」が楽しんだ〔**図 1、6、7、8**〕。

図 6 FDJ 大デモンストレーション貴賓席（8 月 4 日）

（注）カール・マルクス・アレーにて。巨大看板には「ドイツ民主共和国の青年が世界の青年を歓迎する」とある。共産圏以外の来賓にはヤセル・アラファトやアンジェラ・デイヴィス[10]もいた。（出所）Wikimedia Commons: Bundesarchiv, Bild 183-M0804-0728 / CC-BY-SA 3.0

図 7 FDJ の大デモンストレーション（8 月 4 日、行進 1）

（出所）Wikimedia Commons: Bundesarchiv, Bild 183-M0804-0739 / CC-BY-SA 3.0

図 8 FDJ 大デモンストレーション（8 月 4 日、行進 2）

（出所）Wikimedia Commons: Bundesarchiv, Bild 183-M0804-0736 / CC-BY-SA 3.0

「祭典は政治上および世界観上の立場を議論する豊かな可能性を提供し」、アレキサンダー広場が「自由な意見交換の中心になった」。

その際、FDJ 団員と「兄弟的同盟諸国からの友人たち」とが「社会主義諸国の政策を主張し」、公式代表以外に入国した「反動勢力」の意図は成功しなかった。

祭典には、「1700 以上の各国組織と 18 の国際組織を代表する合計 25646 人の外国ゲストと、50 万人以上の DDR 青年男女が参加した。1542 の政治、文化、スポーツの催しに 730 万人以上が訪問した」。〔補注 1 のように、異なる数字がある。〕

「祭典は、DDR が世界の中で獲得した大きな権威を証明し」、「社会主義における生活」に初めて接した外国ゲストに、「彼らの正当な闘いのための新たな力」を与えた。

「祭典は DDR の若い世代の社会主義意識の成長を証明し」、「敵」の祭典妨害のための「意図的な政治的・イデオロギー的キャンペーン」は破綻した。

以上の記述に東独当局が期待した祭典イメージが鮮明に反映している。

Wesenberg（2003:653）によると、1542 の催しのうち文化関係が約 1000、政治的プログラムが約 210 であった。

しかし同じ原資料を使いながら Dietrich（2003）によれば、「22 ヵ国からの 174 人の有名芸術家が参加した約 1200 の文化催しには 520 万人の訪問者」とある。

Rauhut（1993：286）は催しを文化 1196、政治 210、スポーツ 137 とした。これでは合計が 1543 になるが、合計を記述する文献はどれも 1542 である。

Rauhut はこの記述の際に、文化催しは午後 10 万人、夜 15 万人の訪問を予定し、「わが国の青年の生きる喜びと楽観主義を告げる」ものであるとの、SED 書記局への FDJ 中央評議会提案（1973 年 2 月 6 日）を紹介した。

Dietrich（2003）は終了報告から「約 740 万人の訪問者の 1542 の催し」のうち次の数字を挙げた：

約 1200 の文化催しには 520 万人の訪問者
210 の政治的催しに参加者 180 万人、
36 の連帯ミーティングに 354800 人、
157 の会議とセミナーに 20200 人
国際連帯センター訪問者 38 万人
137 のスポーツ催しの観客 43.7 万人
8 つの国際人民スポーツセンター来訪 15 万人以上
外国代表のための約 1000 の「友好の集い」3 万人
追悼・記念場所への旅行参加者約 5000 人
東独国内エクスカーション参加者 8700 人

合わせると「約 740 万人」を大きく越え約 850 万人になる。Dietrich（2003）はまた、外国ゲスト 25646 人、うち祭典代表は 140 ヵ国の 1700 の国内・国際組織から 19136 人、国内代表 28.8 万人としつつも、「別の箇所では 50 万人の FDJ 団員とピオネールが参加したという数字が挙げられた（Honecker 1975a:332）」と続けた。この典拠は間違いで、Honecker（1980:332,訳 391）である（**補注 1** 参照）。

東独マスコミは「イベントの何ヵ月も前から」、華々しい開会式や催しの予定を伝えた。7 月 28 日の開会式における「1 時間半のノンストップショー」は文化相代理と、ベルリン国立歌劇場スタッフ（音楽総監督や演出主任など）が指揮し、ライプチッヒのトーマス教会合唱団も動員した。祭典期間には合計 1500 の催しが予告された（実際は 1542）。29

[10] 前年釈放された Angela Davis は、30 州から 300 人以上（半分近くが黒人）の米国代表団の名誉団長として祭典に参加した。彼女は、「米国政府に対するベトナム人民の見事な勝利」は「帝国主義の衰退」を証明し、「この祭典は、変化した世界の諸関係の雄弁な表現である」と語り、のちに、生涯で忘れられない 3 つの想い出として「共産党員としての経験と、国際連帯の力による釈放、ベルリンでの青年学生祭典」を挙げた（Rodden 2002:143）。

日の「ベトナム・ラオス・カンボジアの人民、青年、学生との連帯の日」をはじめ、中東やアジア、アフリカ、ラテンアメリカとの連帯の日が予定された。東ベルリン中心部のフンボルト大学構内には「青年と学生は帝国主義を告発する」という常設展示場が、テレビ塔下部の展示場には「国際連帯センター」が設けられることになった（Rexin 1973:573）。

「友よ、太陽輝く町（eine sonnige Stadt）が君らを歓迎する！友よ、ベルリンは平和を歓迎する！」云々という、世界からの代表たちを歓迎する歌はパウル・デッサウ（Paul Dessau）作曲、イェンス・ゲルラッハ（Jens Gerlach）作詞であった（Nawrocki 1973）。歌詞にある「sonnig」は、おめでたい、脳天気な、という意味にも使われる。

これらの準備の様子は、祭典が東独社会主義の「輝く」成果としての東ベルリンおよび第三世界との連帯を内外世論にアピールしようとしていることを示した。

また「自由」も事前にアピールした。東独の国家祭典委員会が、西独代表団を構成する JU〔西独野党キリスト教民主同盟系〕に送った事前の手紙には、「連邦共和国〔=西独〕の祭典代表団のすべての参加者が自由な意見表明の権利を持つことを確約する」とあった（Nawrocki 1973）。

Wolle（2008）によれば、ホーネッカーは「2 年前に国家と党のトップ・ウルブリヒトを失脚させ、当時自由化（Liberalisierung）への希望の担い手と見なされていた」し、両独基本条約署名以来「国際的に承認された国家」となり、「自国民の厳重な隔離はもはや時代に合わないと思われた」。彼は「DDR を世界全体に進歩的でオープンな国家として示すつもりであった」。

東独の国際舞台登場にとって、「承認の波」、発効したばかりの両独基本条約（東独を行政法上の承認）や目前の両独国連加盟（1973 年 9 月 18 日加盟）などに加えて、全欧安保協力会議（CSCE）への正式参加も重要であった。

CSCE は、1972 年 11 月 22 日から始まった準備会議の最終勧告（1973 年 6 月 8 日）に基づき、〔祭典直前〕1973 年 7 月 3 日から本会議が始まった（吉川 1994:第 2 章）。東独としては西独と肩を並べる大きな機会であった。

CSCE は東独当局にとって両刃の剣となった。すなわち一方における東独の国際的地位の向上と、他方における、想定外の事態である人権尊重義務の強化であった。後者はとりわけ出国権を主張して国家を揺さぶる人々の運動（出国運動）を発生、急発展させ、CSCE ウィーン会義最終文書（1989 年 1 月）では出国権遵守が義務づけられてしまった（青木 2009；2018b 参照）。

早くも祭典において、ある西独代表が CSCE 全参加国間の青年交流の容易化（ビザ免除等）を呼びかけた（後述）。出国を厳しく制限する東独当局にとっては脅威であった。

東独にとって祭典引き受けの意義は大きいとしても、その開催は、貧しい小国にとって「資金の負担とともに諸行事の技術的・物的保証および諸企画と結びついた多大な労働力需要も正真正銘の挑戦」（Wesenberg 2003: 655）であった。この問題を Nawrocki（1973）も取り上げ、農業生産組織（LPG と VEG）や国有企業（VEB）における募金の取り組み例を紹介しながら、祭典が国民にとって「非常に高くついている」ことを指摘した（詳細は **8 節**）。

4. ホーネッカーによる評価と SED 中央委の終了報告

ホーネッカーは国家祭典委員会設立会議（1972 年 2 月 18 日）で、少し前にブルガリアのソフィアから〔次回祭典の〕東ベルリン開催決定の知らせを受け、「我々は大変喜びかつ幸福であった」、その決定は「ドイツの最初の労働者・農民国家」への「信頼」とその「活動と業績への高い評価」の表明であると語った（Honecker 1975:446）。

1972 年 10 月 20 日には FDJ が祭典準備への全国動員のために各地の幹部を集め、中央幹部会議を開いた。そこでホーネッカーが「わが社会主義青年団のアクティブたち」に向け長い演説をし、最後に「ベルリンにおける第 10 回世界青年学生祭典へ進め！」と号令をかけた（Honecker 1975a:43; 80）。

祭典開幕 2 ヵ月前に開かれた SED 中央委員会第 9 回会議におけるホーネッカー報告（1973 年 5 月 28 日）は、「第 10 回世界祭典の準備が党大会決定実現のための青年の大きなイニシアチブに強い刺激を与えた」と評価した。

具体例として、「8000 戸の住宅の改築と整備」、「73 の消費財生産プロジェクト」、すでに「3100 万マルクの効果をもたらした資材節約運動」、「特に、100 万人以上の青年男女が参加している“明日のマイスター見本市”運動」を挙げ、「こうしてイニシアチブが呼び起こされ、促進され、青年が社会の共同形成と共同責任に組み込まれ」ていると、国内動員の成果を誇った（Honecker 1975a:280f.）。これらの運動については **8 節**冒頭でも言及する。

祭典開会式（7 月 28 日）における彼の長くはない演説は、「良きホストであること」を「心底からの」気持ちとし、「反帝国主義と平和、友好のための第 10 回世界青年学生祭典万歳」と叫んで、締めくくった（Honecker 1975a:345f.）。

祭典代表者・ゲストのレセプションが 8 月 4 日に東ベルリンのニーダーシェーンハウゼン城で開かれ、2000 人が出席した（Lippmann 1973:789）。その場で、ホーネッカーは実に誇らしげな歓迎の挨拶をした：

> 〔祭典最中の 8 月 1 日に〕「闘士としての生涯を終えた政治局員・国家評議会議長・同志ウルブリヒト」の死去に「あなた方が我々とともに」偲んでくれたことに感謝するとともに、彼が祭典の続行を望んだ。〔だから葬儀は祭典後の 8 月 7 日にした〕。
>
> 〔次いで成果として〕「昼も夜も何千回も通りや広場」が、「異なる社会秩序で生活している若い人々の情報と意見の率直な交換の場所」となり、「〔東〕ベルリンは世界に開かれた都市であり、社会主義の生命力と人間性、自由を伴う出会いの場であると誰もが感じている」、この「祭典は生きる喜びの祝祭であった」し、世界が「人々の幸せのために進歩と平和という意味で変化した」ことの象徴である〔と誇った〕（Honecker 1975a:347ff.）。〔彼は、壁が囲む「開かれた都市」の奇妙さには思い至らないかの如くであった。〕

祭典についての SED 中央委の「終了報告」（Abschlußbericht）の抜粋が Mählert（1996:200f.）にある（原資料 SAPMO, DY 24/E 7783-11）[11]。抜粋は省略部分に重要なことがあり得ないではないが、全文を未入手なので、抜粋の要旨を紹介する：

[11] 報告は 8 月 7 日付けである（Dietrich 2003）。Dietrich（2003）も Wesenberg（2003:659）もこれの原資料は DY 24/7705 であり、Mählert のそれとは異なる。SAPMO も BStU も、同じ内容のファイルでも保管場所が異なれば、別のアーカイブ番号にする。

・外国からの参加者は DDR の「社会主義建設の経験と成果」を知ろうとし、8700 人以上が 230 以上の研修旅行に参加し、彼らに「社会主義の具体像」を伝えることができた。

「祭典の魅力と祭典プログラムの有効性の 1 つの証拠」は、彼らにとって「西ベルリン訪問が何の役割も果たさなかったという事実」である。それどころか西ベルリンにいる多くの留学生が、母国からの祭典代表団とともに祭典催しに参加するために東ベルリンへ来た。

・資本主義国からは「マルクス・レーニン主義組織が強い政治的影響を行使した」が、同時に、従来になかった広がりの代表が参加した。

・BRD〔=西独〕の「社会民主主義志向の諸青年組織」は、平和共存とヨーロッパ安全保障に賛成し、柔軟さに努力し、「いわゆる民主的社会主義のもくろみとして長期的に接触と影響を獲得する」努力をした。〔西独ブラント政権の「接触による変化」戦略を指す。〕

彼らは「ブルジョア的、反共産主義的見解」の宣伝もした。DDR の参加者や BRD から来た「マルクス・レーニン主義的な諸兄弟組織のメンバー」が、「攻勢的な態度」でそれに反論したので、影響は殆どなかった。

「キリスト教志向の諸青年団体」は、挑発的かつしばしば反共産主義的態度を表明したが、「見るべき成果なし」であった。

・DDR の参加者は社会主義について「自信を持って、知識豊富に、かつ機転を利かせて主張し」、また外国からの参加者・ゲストから「社会主義的愛国者かつプロレタリア国際主義者」として認められた。

アレキサンダー広場やテレビ塔下での「敵対者との直接の論争」では、彼らが「SED と DDR の政策を後押ししていることを証明し」、その「攻勢」ゆえに「敵対者」は共感を得なかった。

・BRD や西ベルリンの報道は、祭典の「政治的・イデオロギー的かつ心理的に高い完成度」を認めざるを得なかった。全国紙では「継続的な、相対的に幅広い報道」がなされ、その内容の「主要傾向」は次のとおりであった：

－DDR 指導部にとって内政上も外交上も「大きな政治的成功」であった。祭典で「DDR 青年の自信と真の熱中、束縛の無さ、寛容」を見たため、西は「DDR 政権内部の安定性と DDR 青年の政治的態度」についての従来のイメージを払拭せざるをえない。

－〔祭典で当局が演出した〕「世界に開かれた、束縛のない出会いや異論を持つ者との政治的議論の容認は SED 指導部にとって大きな政治的テストであったが、その結果は肯定的であった」。「他方で DDR の何十万人もの青年が持ったこの自由な意見交換の体験ゆえに、祭典によって設定された〔自由の〕レベルを SED が引き下げることを困難にするだろう」。

－西の報道では BRD 代表団内部の論争が「大きな役割を果たした」。〔下線は青木。〕

終了報告は当局が実現したかった場面の抽出であるが、西の報道傾向の 1 つとして「他方で」以下（下線部分）も記したのは意外に感じる。

この体験こそ祭典の大きな遺産であり、当局の今後の舵取りにとっての難題をもたらすものであった。

報告の引用が Dietrich（2003）にもあるが、上記の諸数字のみであって、終了報告のこの部分には全く着目していない。また第三世界やチリとの交流については報告に記載がないのか、Mählert が省略したのか分からない。

5. 東独製版工見習いライナーの現場回想

Rossow（1999）を所収の本は、編者の名前「DDR 日常文化記録センター」が示すように、東独の日常生活の記録を目的とし、そのため当時の関係者へのインタビューが重視され、「公式の歴史記述に対する明確なアクセント移動」がある（同書:9）。それゆえに興味深い記録が少なくない。

同書の祭典に関する最も興味深いインタビュー相手はライナー（Rainer E.）である。彼は 1949 年生まれ、祭典当時、東独アルテンブルク〔ライプチッヒ県、1970 年代初め人口 5 万人弱〕の製版工見習いであった。次のように言う：

・ライナーは「公式代表」の一員ではなく、バカンスを取ってガールフレンドとともに列車でベルリンに来たが、〔祭典期間の東ベルリンへの旅行制限〔詳細後述〕に引っかかり〕初日にプレンターヴァルトで「拘束された」。しかし市内に親戚がいたので東ベルリンからの退去を免れた。

〔プレンターヴァルト（Plänterwald）はトレプトウ区にある広大な森林公園で、巨大なソ連兵慰霊碑もある。〕

・滞在中に彼は、〔東独の〕「多くの人々が非合法にベルリンにいて、アレックス〔=アレキサンダー広場〕で毛布さえ売られていることを確認した。それはまさに心を打った」。

また、いつもは厳しい警察が「親切さと付き合いやすさ」を示したので驚いた[12]。例えば、「我々」が広場で寝ていた時、朝警察に起こされ、「この広場は今必要だ」と言われたが、「市役所の向かいの草地に我々は 11 時まで引き続き眠ることができた」。

「それまではあり得ないと思われた雰囲気が支配し」、「朝には噴水のそばで洗濯の供宴が始まった。すべての目が閉じられた」。夜中の地下鉄での居眠りの際には警察官がバッグを盗まれないように注意した。彼らはまさに「君の友人かつ手伝い」であった。「それは我々にとって全く驚きの出来事だった」。

・ライナーは、ウルブリヒトからホーネッカーへの権力移行に「多少の自由化への希望」を見ていた。実際、「祭典は、この国に新しい、世界にオープンなイメージを与えるホーネッカーの試みであった」。

「本当に一晩じゅうずっと人々がアレックス周辺で議論し」、そこに若者だけではなく労働者も加わった。ロックコンサートへも行った。〔西独保守系の〕JU（若い同盟）もチラシを配った。「自由なコミュニケーションの可能性」があり、「それは本当に幅広く利用された」。「そういうことはそれまでには全くなかった」し、「最も驚くべきこと」であった。

[12] 当時の「いつもは厳しい警察」の一端を作家クンツェが描いている（10 節）。これが東独警察=人民警察（Volkspolizei）への東独市民の実感であったのだろう。私のわずかな体験（アウトバーンを痛みの激しい走行車線を避けて追い越し車線走行した時や洗車場不足で冬季にナンバープレートが汚れていた時など）では彼らは厳しくも丁重であった。新聞・テレビ報道に見る私服シュタジ（**図 12** 参照）は衆人環視下でもきわめて粗暴であった。

図 9 祭典期間の東ベルリン・テレビ塔まわり

（注）東ベルリン・テレビ塔下。（出所）Wikimedia Commons: Weltfestspiele der Jugend und Studenten Berlin 1973 PD 13.jpg / Bin im Garten: Eigenes Werk (CC BY-SA 3.0)

・それゆえ祭典は、「知識人や芸術家の間」にも、ホーネッカーによる自由化への期待をもたらした。「この開放が世界にデモンストレーションされたことによって」後戻りはないとライナーは推測した。

・しかし「2 年後、それは幻想であったことが分かった」。当局は外国からの参加者に、「DDR について君たちが知っていることはばかばかしいことだ。よく見てみろ、何でもある」し、「それが全く普通だという印象」を与えようとしたにすぎなかった。「リベラルな態度」は、単に「社会主義の宣伝」、「対外的な宣言」、「外部向けのショーウィンドウ行事」にすぎなかった。なぜなら、それは「一度きりの状況」であって、祭典後には継続されなかったからである。「宣伝以上のもの」なら、祭典後も継続されたはずであった。〔祭典後不継続とあるが、「2 年後」＝1975 年に注目したい。〕

・ライナーは祭典中に、西独リューベックから来た JuSo〔Jusos、西独与党 SPD の青年組織〕のウルリッヒ（Ulrich B.）と知り合い、その後数ヵ月、「非常に政治的な話し」の文通を続けたが、「コピー2 枚」と記した紙片が〔ウルリッヒからの手紙の〕封筒に混入されていたので、文通をやめた。その紙片の混入は〔シュタジが〕検閲と警告を示唆するためだとライナーは推測した。（以上 Rossow 1999: 271ff.から）

6. 西独からの参加者についてのレキシン報告

祭典の「政治的意義」という当時 FDJ が作成した文書には、西側ゲストが自分の目で社会主義の成果、特に「DDR における意見の自由」に納得するはずだ、とあった（Rossow 1999:258）。

ここからも「意見の自由」の宣伝が企図されたことは明らかである。それが西独からの参加者にどう受け止められたか、また彼らはいかに行動したかを見ようと思う。

レキシン（Rexin 1973a）が、祭典に参加した西独の「非共産主義青年諸団体」〔=後述の「調整グループ」〕の活動を、主催者側（東独及び国際準備委員会）の対応に触れつつ、詳しく紹介した。

Rexin（1973a）の著者紹介には「フリーの著作家」とあるだけだが、当時彼は西独第 2 公共テレビ ZDF ベルリン編集部勤務であった（bpb 2004）。

彼は学生時代に「SPD（西独社会民主党）左派」に属し、東独の学生、のちに東独シュタジ指揮下の秘密外交官、さらには党内反体制派となるベルク（Hermann von Berg）の知己でもあった（青木 2018:48; 54-55）。また、両独間の激しいやりとりがあった前回のソフィア祭典には、「タカ」（**表 1** 参照）の「連邦幹部会メンバー」として参加した（Breßlein 1973: Dokument 10a）。従ってこの紹介も SPD やその青年団体寄りになったかもしれない。

Rexin（1973a）の執筆動機は、調整グループによる西独の新聞報道批判の声明（8 月 3 日）にあった。

声明は SPD の青年組織である Jusos（直訳は青年社会主義者）と西独労組 DGB 青年部の代表団が起案し、「他の調整グループ諸団体の多数」が加わった。

この声明は西独マスコミの祭典報道は「多くの場合、偏向的、歪曲的であり、部分的には意識的または無意識の誤報道」だと批判し、「特にシュプリンガー系の諸新聞はその冷戦政策を尖鋭化、継続している」と非難した。

他方東独側は両独青年の「意見交換」について、FDJ 団員の議論が「より説得的」だったと報じた。

そこでレキシンは、「証拠が入手可能な限り」で、東ベルリンでの調整グループの活動の描写を試みた。以下は Rexin（1973a）のうち、本稿に関連が強いと思われる部分を中心とする抜粋である。

*　*　*

西独代表団にとっての祭典の「本来の価値」は、「25 年間の対立後に両ドイツ国家の青年が互いに親しくなる最初の大きな可能性」にあった。

現に、調整グループ内のドイツ社会主義青年団「タカ」（Die Falken）の代表が、祭典最終日前日に、9 日間の出会いの経過について次のようにコメントした：

> 「実際に多くの観察者」による祭典の特徴は、「期待以上の規模での東ベルリンの通りや広場における両独〔からの参加者〕間の討論」であった。

西独からの代表団は 2 つのグループに分かれていた。1 つは、「主として〔東独系の〕DKP（ドイツ共産党）に近い団体やグループ」から成る「祭典活動グループ」（AKF）であり、330 人の代表席が割り当てられた。そのうち、

ドイツ学生連合（VDS）60 人、
社会主義ドイツ労働者青年団（SDAJ）55 人、
マルクス主義学生同盟スパルタクス 30 人
社会民主大学同盟 30 人

であった。

もう 1 つのグループが「第 10 回世界祭典調整グループ」（Koordinierungsgruppe X. Weltfestspiele、以下単に調整グループ）である。ここには、ドイツ連邦青年団連合（Deutscher Bundesjugendring）や政治的青年団連合（Ring Politischer Jugend）の傘下諸組織も加わった。

〔これが上記の「非共産主義青年諸団体」に当たり、レキシン報告の主対象である。〕

このグループには 470 人の代表席が割り当てられ、うち主要団体の代表数は**表 1** のとおりであった。キリスト教団体が 100 人も占めた。

表 1 西独調整グループ主要団体代表

福音青年活動共同体	57 人
ドイツカトリック青年同盟	43 人
DGB（ドイツ労組連合）青年部	55 人

DAG（ドイツ職員労組）青年部	24 人
Jusos〔西独与党 SPD の青年組織〕	52 人
JU〔西独野党 CDU/CSU の青年組織〕	28 人
ドイツ社会主義青年団「タカ」	36 人
自然愛好青年団	26 人

（出所）レキシン報告本文から青木が作成。

ほかに、このグループの小規模な 13 団体は各 2～20 人の代表を送った[13]。

両グループ合わせて 800 人が西独代表団であった。

「祭典参加者 1 人当たり 60 ドルを国際準備委員会に支払わねばならなかった」。内訳は宿泊食事代 40 ドル、参加費 10 ドル、連帯基金への寄付 10 ドルであった。〔**8.1 節**も参照。なお 1973 年 1 ドルは 308 円（総務省統計局）。〕

彼らは西独本土からは 17 台の、西ベルリンからは 1 台のバスで東独に入国し、その際、会場・街頭での配布や代表団のクラブハウスでの陳列のための「かなりの量の情報資料」（パンフ、チラシ、西独青年諸団体の雑誌など）の東独への持ち込みも可能であった。

これら 2 つのグループに参加した「右から左まで」の全組織が、「成果豊かだった」との「共同の終了声明」を出し、「祭典のための傑出した諸条件」を形成し、参加者を「心からのもてなしで」迎えた主催者に感謝した。

ほかに、西ベルリンから約 100 人が西独代表団としてではなく、ベルリンのシンボルである「熊の旗のもとに世界青年スタジアムに入場した」。〔これは西ベルリンを西独から切り離した扱いになるので〕西独代表団は主催者に西独本土と西ベルリンの結び付きの尊重を求めた。

代表団の宿舎は改装された学生寮であり、各ベッドには「小さな贈り物セット」（歯ブラシ、市内地図、救急箱、裁縫セット、共産党宣言初版のファクシミリ印刷、ホーネッカーの献辞）を置くという主催者の「心理的な手腕」が見られた。

ビザは西ベルリン行きを防ぐために原則として 1 回ビザであったが、西独本土からの参加者のうち 30 人と西ベルリンからの参加者には数次ビザが発行された[14]。

祭典における約 1500〔1542〕の公式の催しには、2 万人以上の大規模集会、約 3000 人の集会、ほぼ 400 人の会議、約 200 人のセミナーという区別があった。

誰でも参加可能であったのは大集会だけであり〔野外文化催しも〕、そこで西独側が演説できたのは 2 回だけであった。うち 1 回はヨーロッパ安全保障に関する大集会での Jusos 議長の演説であり（欧州安全保障協力の前提について）、SED 中央機関紙 ND が全文を掲載した。

集会や会議、セミナーへの参加には事前に配布される入場券が必要であった。当初入場券やプレスカードが希望数に不足し紛糾したが、その後問題は緩和された。

3 日目のセミナー「信心深い青年と平和・社会進歩へのその関与」には西独を主とする宗教系代表 100 人が会場（科学アカデミー講演会場）前に集まったが、入場券がなく、「彼らは、最初の抗議のあと、自然発生的な路上討論の開始のアイディアを思いついた」。

このセミナーは当初「若いクリスチャンの会合」として計画されたが、主催側が他の世界宗教、特にイスラム教や仏教に拡大することに固執して、名称変更になった。

目撃者たちによればこの路上討論は、会場の「入念に準備されたスピーチよりも決定的に生き生きとし、より興味深い」ものであった。入場券問題にはこういう解決策もあった。

すると、「セミナーと会議への全般的な関心が弱まった。通りや広場での自由な、束縛のない討論の機会が、〔公式の〕催しにおいて受け身で聞くことよりも魅力的に思われた」からである。

集会・会議・セミナーのほかに二国間の「友好の集い」という催しもあり、「とりわけベトナム人や DDR の FDJ との会合が注目された」。〔西独代表のうちの〕「祭典活動グループ」の SDAJ はベトナム代表団に児童病院建設のために 10 万ドルを寄付した。「調整グループ」も同代表団に救急車 1 台とベトナムまでのその運搬費用を贈った。

〔祭典後ホーネッカーも北ベトナム大使に「党と政府の決議によりこれまでベトナムに供与した信用はすべて無償援助」とすると伝えた（Honecker 1980:333,訳 391-2）。〕

FDJ との友好の集いで FDJ 議長が隣席に招いたのは Jusos 議長であって東独系の SDAJ トップではなかった。これは 5 年前のソフィア祭典の様子とは様変わりであり、今回の「祭典は〔東独の〕戦略の変化を認識させた」。

〔FDJ 中央評議会書記局の 1971 年 6 月 3 日提案には、調整グループに「連邦青年団体連合のほぼすべての青年組織」が加わるのに対抗して、「SDAJ が〔西独の〕他の進歩的な青年・学生諸団体と共同で BRD 代表団の決定的な核となる」ように工作するべきとあった（Mählert 1996:196）。しかし両独基本条約が発効したいま東独政権にとって西独与党 SPD とその Jusos が重要であった。〕

祭典歓迎レセプションでもホーネッカーが、西独代表団の中の SPD の連邦議会議員 4 人と、「30 分間の非常に注目される会話」を交した。これも同様の事情であった。

〔同時に、東独政権は西独政権の「接近による変化」策の効果に苦しむことにもなった。〕

これら SPD の連邦議員たちは「アレキサンダー広場での熱い議論に非常に熱心に参加した」。

---

[13] 西独の小規模代表にはエスペラント青年団もいたし、エスペラントの催しもあった。その催しの監視に出かけたシュタジ職員は、すべてがエスペラントという「人工言語」で話されたために「何も理解しなかった」（Bickelhaupt 2013）。但し Ochs（2003）が引く ZAIG 文書によれば、そこへ派遣されたのはシュタジ職員ではなく、暗号名ヴィンター（Jürgen Winter）という「社会的保安協力者」（GMS）であった。

[14] 東独のビザには「ein – mehr - maligen」という行があり、手書き取消線が「mehr」にあれば一次、「ein」にあれば数次であった。FDJ 中央評議会書記局は当初、祭典に対抗する大規模イベントが同じ時に西ベルリンで開催され、そこへ同市政府が祭典参加者を招待する可能性を危惧した。また西ベルリン経由で「不愉快なゲスト」が送り込まれることも警戒した。そのため 1971 年 6 月 3 日には、前回のソフィア祭典がソフィアへの祭典期間のツーリスト訪問を禁じた経験に倣う提案があった（Mählert 1996:196）。しかし危惧は当たらず遮断もなかった。但し Spiegel (1973)によると、東独国営旅行社ライゼビューローが西ベルリンからの東ベルリン市内遊覧バスの祭典期間の受け入れを断った。これに西独政府、西ベルリン市政府、西側連合国（米英仏）が四大国協定やその付帯文書に違反として抗議した。同誌はこれを「ミュンヘン不安」（前年のオリンピックに倣ったアラブ人による祭典イスラエル代表団襲撃）への対応例とした。東独側にはおそらく祭典期間の東ベルリン中心部の交通規制の必要があっただろう。

他方、当時西独野党 CDU の連邦議会議員 2 人のうち 1 人（福音教会青年団）は宿舎を去って西ベルリンに宿泊し、同青年団代表から外された。もう 1 人（カトリック青年団）は熱心に活動し、東独側（FDJ 団員）の「素朴さ、断固さ、非妥協性」と西独に対する「攻撃性」に「感心した」。

しかし CDU の西ベルリン市議会議員（同会派議長）は、「開幕後数日間のアレキサンダー広場での最初の討論の印象のもとに」、「数的優位により FDJ が論争をコントロールする」と批判した。彼は西ベルリンの新聞に、「批判的な議論参加者は囲まれ、派遣された、自覚と信念のある青シャツ〔=FDJ 団員〕がすぐに議論に参加する。我々の論者は単独の闘士であり、なかなか大変である」と書いた。

CDU/CSU の青年組織 JU（若い同盟）代表の 1 人は、〔西独シュプリンガー系〕ヴェルト紙に次のように語った：

> 「もちろん会話のスタイルは会話の場所に決定的に依存している」。例えばアレキサンダー広場では誰もが、「厳しい、大概は何時間も続くストレスにさらされている」。「議論相手は殆どの場合良く訓練された FDJ 幹部であり、彼らは通例西独の共産主義的なスパルタクスブントのメンバーの支援を受ける」。しかし聴衆の 60%は、「JU の〔主張の〕本来の受け取り手である」し、これまでのどの議論の場でも、「様々な聴衆」がそっと「ありがとう」とささやいたり、私的に招待したり、人通りの少ないところで情報資料を求めた。特に「混雑のない広場では、会話に全く異なる価値がある」。

JU 代表団は、自分たちが配った情報資料を FDJ 団員が回収したことを 8 月 1 日に FDJ に抗議した。

JU 代表団長は祭典終了後に西ベルリンの新聞に、JU が「第 10 回祭典に参加しなかったとしたら、それは間違いであっただろう」と断言した。「もちろんゆりかごから墓場までの仮借ないコントロール・メカニズムを実践する“全体主義的な”国家を体験した」からであった。

他方、JU の「戦術的行動」に対して「他の西独諸団体」は、「あまり成果がなかった」、「全く時代遅れの DDR 像を持ち出した」などと批判した。

レキシン自身の観察によれば、7 月 29 日夜遅くに、Jusos がアレキサンダー広場で横断幕を広げ、人々を議論に招待し、彼らのチラシやパンフレットの配布を始めた時、配布物の「約 1 割が FDJ 団員や西独共産主義者によって回収され、即座に破棄された」。

しかし「居合わせた青年たちの大部分は提供された資料を読み、それを注意深く折りたたみポケットに入れた」。他方、同日の正午頃に配られた JU のチラシは「あまり注意が向けられなかった」し、「大量に示威的にやぶられた」。〔CDU/CSU が両独基本条約反対であったからだろう。〕

「FDJ 団員によって特別なやり方で討論パートナーとして尊重された」と自認するタカは、「モスクワ条約やワルシャワ条約、両独基本条約によって今や、我々が互いに会話することが可能になった」し、「我々がここにいることは…社会主義のための共同の闘争について将来意見交換するフェアな試みの始まりである」と評価した〔たぶんレキシンも〕。

DGB（ドイツ労組連合）青年部は、会議「独占支配に対する青年の社会経済的権利のための青年の闘争」や、会議「科学技術革命の帰結について」（2 日間）の報告者となり、職業教育や保健制度の報告も行なった。また東独の労組 FDGB との話し合いや「人民所有企業」の見学もした。〔見学の感想を報じてほしかった。〕

公務員・サービス産業労組連合青年部は主催者との事前の話し合いにおいて、「全世界における政治的危険の状況の検討」を提案し、「調整グループ」もそれを支持したが、〔「政治的危険」は帝国主義のみではないにもかかわらず〕主催者は「常設センター“青年と学生は帝国主義を告発する”の枠内で発言することができる」と、拒否した。

そのため同青年部議長は 8 月 3 日夜にアレキサンダー広場の約 150 人の聴衆の前で彼の見解を読み上げ、「ここ DDR の首都〔=東ベルリン〕に“反帝国主義連帯と平和、友好のために”集まった世界の青年は、地球上の多くの国における言論の自由の抑圧をこれ以上黙って甘受してはならない」と呼びかけた。

〔当時は西独連立与党 FDP 系であった〕Judo（若い民主主義者）議長は、「自由な演壇：青年と社会」およびセミナー「政治闘争における青年の役割」という 2 つの催しで、「Judo の立場」を「反資本主義、反官僚主義、反聖職者、反軍国主義、反権威」とし、また「我々リベラルにとっての特別の課題」として「教条主義とその帰結の危険を明らかにし回避すること」を挙げた。

〔西〕ベルリン Judo 議長代理は、西独における「ジャーナリストや教員、労働者、裁判官の職業禁止」と、共産圏での言論弾圧（「ソ連の歴史家アマルリクの再度の有罪判決」や東独の「社会主義的作曲家・作家ビアマンの事実上の職業禁止」）の両面を批判し、「資本主義諸国における民主的権利の抑圧を過小評価する試み」にも警告した。〔Judo はのちに FDP と離縁した。〕

西独宗教青年団体のうち福音教会系の活動はセミナー「信心深い青年」に集中した。

カトリック青年連盟（BDKJ）はその祭典参加をようやく僅差の多数により決定した。ところが、参加はその機会を「社会主義諸国の内政への干渉のために乱用し、帝国主義的な収斂理論の意味でイデオロギー的な弱体化を推進」することが動機だと、東独カトリックの新聞が批判した。

〔注目されるべきは、BDKJ 構成団体である〕カトリック農村青年団（Katholische Landjugend）議長バーテルト（Gabriele Bartelt）の、「安全保障と協力のための会議」における提言である。

その中で彼女は「ヨーロッパの青年たちの接触の整備のための 13 項目計画を提示した」。「具体的な歩みとしてとりわけ、ビザの漸次的廃止や CSCE（全欧安保協力会議）全参加国〔アルバニア以外の全欧諸国と米国、カナダ〕の青年のための優待鉄道旅行、教員・学生交換、教科書比較、学校の成績証明書の相互承認、職業教育プログラムの比較」を挙げた。

「職業教育プログラムの比較」は、「全ヨーロッパ諸国が承認する職業教育修了資格に到る」ための準備とされた。

〔この提案は、CSCE が西独でも草の根の動きを刺激し、ヘルシンキ宣言（1975 年）に到る支えとなったと感じさせる。東独でそうした動きが顕在化するのはヘルシンキ宣言成立後である。〕

彼女はフォーラム「国際的・地域的諸組織の協力」では、祭典を今後国連との共同開催とすることも提案した。

なお、「毛沢東主義志向のドイツ共産党（KPD）」〔西独〕は、祭典を「ソ連指導部と DDR の新ブルジョアジーのプロパガンダ劇」と非難した。祭典 3 日目に 500 人の KPD 支

持者が東ベルリンで 1 万枚のチラシを配ることに成功したと KPD 自身は言うが、レキシンが、祭典期間に KPD 支持者の言うに値する活動を見ることはなかった[15]。

（以上 Rexin 1973a より）

このチラシは「赤い親衛隊」（Rote Garde）と題し、祭典を「労働者の裏切り者のプロパガンダ舞台」と非難した（Ohse 2003: 353）。シュタジがこのチラシを入手したので、配布があったのは事実である（同前:Fn.226）。

以上に挙げた公式催し以外に Rexin（1973a）と Nawrocki（1973）は以下の公式催しにも言及した：

会議「人種差別主義とアパルトヘイト」、
セミナー「社会の経済的発展と計画化、教育」、
セミナー「学生とその組織の役割」、
セミナー「帝国主義に対する全般的な闘争への学生の寄与」、
セミナー「ラテンアメリカにおける外国独占体による国内原料資源の収奪」
セミナー「多国籍独占との闘争」
集会「パレスチナのアラブ人民の正当な闘争」
集会「朝鮮の平和的再統一」
コロッキウム「青年運動と国連」、
法学学生の集い（国際学生クラブ）、
ブッヘンヴァルト強制収容所跡記念式典

7.「より広い人民戦線基盤」：1951 年祭典等との比較

当時西独の国際放送ドイチェ・ヴェレ第 1 編集者であったリップマン（Lippmann 1973）はすぐさま、祭典（上記同様に本節でも 1973 祭典を単に祭典と呼ぶ）を第 3 回祭典（東ベルリン 1951 年 8 月 12-19 日、以下 1951 祭典）や 1968 年の第 9 回祭典（以下ソフィア祭典）ほかと比較した。

以下はその概要である（但し国際プレスセンター発表の部分は前述）：

西独と外国からの参加は 1951 祭典のほうが「もっと壮大」であり、西独から約 3.5 万人が、「祭典の全ドイツ的性格〔=ドイツ分割反対〕を東ベルリンで示威するために、非合法に境界線を越えてきた」からである。他の外国からも 2.6 万人が参加した。

祭典と 1951 祭典のプログラムの「違いは僅か」で、ともに「基本的に政治的デモンストレーションと文化・スポーツの催しの巧みなミックス」であった。

例えば祭典開会式におけるベトナム代表と同じ役割を、1951 祭典では「“アメリカ帝国主義”との闘いにおいて傑出している若い〔北〕朝鮮兵」が果たした。

また両祭典ともに細部まで SED と FDJ が準備し、要員の選抜と訓練もした。従って「多くの西の観察者」が、祭典の開会式をミュンヘン・オリンピックの模倣と言うのは「条件付きでのみ正しい」。

しかし祭典には 3 つの新しさがある。**第 1** に、「より広い人民戦線基盤」である[16]。

外国代表団、特に西独代表団には、「共産主義的グループ」だけではなく、Jusos、Judo、JU、福音・カトリック両教会、公務員を含む労組、ボーイスカウトまで含まれ、「初めてこの広がりで公式に世界祭典に参加した」。〔上記の調整グループを指す。〕

しかもこれらの参加者が「相対的に自由に行動し、自身の資料（パンフレットやチラシ等）を DDR に持ち込み、配ることができ、何千という議論の中で自由な意見表明の権利を行使したこと」がより重要である。SED が「左翼暴力集団とか毛沢東主義者」と非難する「学生左翼」さえ許容された。

「西独代表団共同の終了声明」も「はっきりと、東ベルリンでは“率直な議論”が可能であった」ことを強調した。

代表団歓迎レセプション〔**4 節**参照〕において、西独 SPD 議員から「情報と意見の交換の改善および例えば新聞交換の用意があるか」と聞かれたホーネッカーは、「イエス、もちろんだ、しかしすべてを一度にはできない」と答えた。〔これは双方とも CSCE の経過を意識してのことだろう。〕

SED は労働者階級の党の指導という国家統治を放棄してはいないが、「他の政治グループにより大きな自由の余地を認めることによって、その指導権を修正している」。

すなわち、1951 祭典に比べた「最も重要な変化」は、祭典が、「攻勢的な協調、自由な意見交換とより緊密な政治的接触の人民戦線」戦術を示したことである。

第 2 に、「自信の高まり」である。このことは〔祭典の 2 ヵ月前の〕SED 第 9 回中央委でのホーネッカーの報告にも現れている。彼はそこで、西独において「より強く明確になっている新しい DDR 像」を歪曲しようとする試みがあっても、「DDR 市民の自意識の向上」ゆえに「我々は深刻には受け取らない」と述べた[17]。

「党指導部がイデオロギー的な後見を非常にためらいながら緩めたにもかかわらず、50 万人の FDJ 団員の自意識と自信が高まっていること」が祭典の「本来的に新しい要素であった」。

1951 祭典でも類似の舞台装置があったが、それは「過度に組織化され」、「不信と猜疑を特徴としていた」。そのため当時の東独首相グローテヴォール（Otto Grotewohl）が祭典入場証を持参してこなかったために貴賓席に入ることを拒否されたほどであった。

それに対して祭典の「組織はパーフェクトであったが、過度の組織化は避けられた」。現場の「自己責任」がより大きく、「アドリブが意識的に予め計算に入れられていた」。

第 3 に、東独の「国際的承認」である。「この祭典の際立った新しさは〔東独の〕外交事情の変化」にあり、祭典は「明らかに主権国家 DDR を自ら意識した自己表現」となった。

1951 年には東独の外交関係はソ連東欧のみであったが、東独は、「今や 90 ヵ国によって国際法上承認され、その国連加盟が間近になり、すでに米国との外交関係導入も

[15] この KPD は、戦前にローザ・ルクセンベルクらが結成した KPD ではない。西独には SED 系のドイツ共産党として DKP が存在した。KPD と DKP の訳し分けは難しい。KPD には戦前からドイツ共産党という訳が定着している。

[16] 世界大百科など一般に人民戦線戦術は人民戦線政府の崩壊と独ソ不可侵条約によって 1930 年代末には終了したとされているが、1961 年ケネディがベルリン自由大学演説でも当時のことと して人民戦線に触れた。

[17] Lippmann の引用には省略がある。省略されたのは歪曲の例、すなわち、西独の中にある「SED は“歴史や言語、文化の共通性から逃げ去ること”を試みているというまさにばかげた主張」である（Honecker 1975a:239）。この「主張」は東独側の近年の「社会主義民族」論（14 節参照）への反応であった。

意識していた」。

「この事実は主催者により大きな行動範囲とより多くの自信を与えた。そのことが異論を持つ者たちに対するより寛容な行動に現れた」。

ソフィア祭典では「殴り合いや激しい弾圧行動」があり、その背景にはブルガリア住民の人種差別意識があり、「有色人種」が「敵意をもって扱われた」（特に彼らがブルガリアの少女に近づいた時）。

しかし祭典では「そうしたことは何も感じられなかった」。東独青年の間には「人種差別的な考えの培養器」がなく、祭典公式スローガン「反帝国主義的連帯と平和、友好」同様に「国際主義と反植民地主義の考えが幅広い共感を呼んでいる」し、「第三世界の代表や黒人米国人への大きな関心やシンパシーも」存在している。

第三世界からの参加者は「ソ連勢力圏以外」の大部分を占め、祭典の 3 日間が「第三世界諸国民に捧げられ」、関連の催しが開催された。

1962 年ヘルシンキ祭典ではセイロン代表が抗議の帰国をし、アフリカ代表たちも「帰国を脅した」。しかし今回祭典が「再び多くの非共産主義グループを祭典運動に合流させた」。それは「世界規模での DDR の承認」だけではなく、「寛容な演出」の成果である。

またソフィア祭典では、「ソビエトブロックの青年団体と西側の新左翼（毛沢東主義者、トロツキスト、無政府主義者等々）の間」および前者と「ベオグラードやプラハからの代表団」の間の論争が生じたが、今回はそうしたことを防いだ。

〔実際には人種差別事件が 1 件あり処分された（**8.3 節**参照）。また Ohse（2003:353）によれば「時たま外部への敵意が吹き出した」とある。例えば「何度も外国代表が侮蔑され、時には殴られた。敵意は、代表たちが「DDR 住民の負担でベルリンに寄食する」という印象によって強められた（典拠は元参加者へのインタビューとシュタジ文書）。〕

〔1980 年代初めに東独のベルリン経済大学に留学していた日本人学生によると、現地の若者から時々「ホー、ホー」とからかわれるから、「ネッカー、ネッカー」と言い返しているとのことだった。東独に増えていた北ベトナム人労働者と見ての野次であり、「人種差別的な考え」の存在を示している。「ホー」はホーチミンを指すが、「ネッカー」と返すことはホーネッカーに差し替える機転であった。その後東独でもネオナチ台頭が問題になったことはよく知られている。〕

〔リップマンは触れなかったが、1951 年祭典では参加者がデモ隊列で西ベルリンへ出かけ同地の警察と衝突するとという大きな事件が生じた（**補注 3** 参照）。東西双方の事情変化により今回はそうした事件は起こらなかった。〕

8. 資金、労働力負担、住民の反応など

祭典開幕直前にツァイト紙記者 Nawrocki（1973）は、祭典コストの高さを報じた：

> 「30 万人のもてなしと宿泊、9 日間の 1000 以上〔実際は 1542〕の催し、東ベルリンの装飾（S バーン〔都市内鉄道〕さえ塗り替えられた）、スタジアムや催し場の改修、組織ーこれらすべてが高価な楽しみでもある」。そのため、各組織では内部の FDJ 団員を中心に、「革新者提案」〔改善提案〕や計画超過達成、「ズボトニク」（無償奉仕労働）、資材節約運動、くず金属集め、「青年プロジェクト」〔プロジェクト別臨時労働集団、**図 10**〕、あるいは「ダンスの夕べ」といった催し開催などで得た資金を祭典ファンドや連帯基金へ振り込んだ。それは「何百万マルク」にもなる。

図 10 青年プロジェクト（Jugendobjekt）の例

（注）ベルリン・フリードリッヒスフェルデの地下鉄工事
（出所）1982 年 3 月 21 日撮影 ©Kunihiko AOKI

FDJ が祭典準備加速のために開いた中央幹部会議（1972 年 10 月 20 日）以後 14000 件の青年プロジェクトが新たに委ねられた（Honecker 1975a:334）。関連するホーネッカーの中央委会議での発言は **4 節**で紹介した。

前年に設置された「祭典ファンド」は FDJ や労組、国有企業（VEB）を動員し、宝くじも発売するなどして 1973 年 1 月末には 1500 万マルクを集めた。国有企業の青年労働者は超過勤務や計画超過達成によってそれに寄与し、所属企業もそのための追加賃金の 85％相当額を「若い社会主義者」という特別口座に払い込まねばならなかった。FDJ 自身も 100 万マルク寄付した（bpb 2003）。

この運動は FDJ が 1972 年 3 月月例団員集会で呼びかけ、4 月 1 日同機関紙が「計画遂行が最も重要な祭典への寄与である」と訴えた（Breßlein 2003b、事例紹介も）。

以下では Wesenberg（2003:653ff.）によって詳細を見る。

8.1. 資金

FDJ 中央評議会に設けられた組織委員会が、国家予算の制約と外貨不足という条件下で資金計画を作成した。その資金計画は 1972 年 2 月 23 日に閣僚会議幹部会が承認した。軍やシュタジ〔、警察〕の支出は別途であった。

この資金計画によると予定費用は、①1.42 億東独マルク（以下 M）と、②7.13 万外貨マルク（以下 VM）の支出が予定された。〔1973 年国家予算は歳入 949.5 億 M、歳出 932.8 億 M であった（DDR 統計年鑑 1990:299）。〕

①の最大項目は、各種物資の「供給課題の確保」費用 6699 万 M であった。そこには主に、祭典参加者・ゲスト・補助要員の輸送・宿泊・食事、救護所・電話・スピーカーその他の設置費用が含まれた。

次いで祭典の「内容形成のための支出」3894 万 M が大きかった。SED の祭典終了報告によると、〔1542 の催しのうち〕文化関係が約 1000、政治的プログラムが約 210 であり、文化関係に 910.5 万 M、スポーツ関係に 427 万 M、展示に 84 万 M、「3 つの大きな催し」のうち開会式（**図 5**）に 139 万 M などであった。〔残る 2 つの「大きな催し」は FDJ 大デモンストレーション（**図 6～8**）と閉会式（**図 11**）であるが、予算額は紹介されていない。〕

図 11 祭典閉会式のマスゲーム

（出所）Wikimedia Commons: Bundesarchiv, Bild 183-M0805-407 / Häßler, Ulrich / CC-BY-SA 3.0

ほかに、国際準備委員会の東独内での費用 490 万マルクも含まれた。委員の旅費、家賃、事務所・住居の装備、東独内で必要されるサービスのための賃金などである。

これら 2 つの費目合計が 1 億 M を超えた。

「祭典代表団および祭典参加者の準備のための支出」には 964 万 M が予定され、ここから外国ゲストの出迎えや世話、代表団への「連帯と思い出の贈り物」、〔東独〕代表団の訓練、祭典会場整理係などに支出された。

対外・対内宣伝やプレス対策などに 751 万 M、市内飾り付けに 68 万 M であった。

①とは別に組織委員会と国際準備委員会の事務用品や燃料、食事助成、職員給与として 1544 万 M が予定された。

②の外貨は祭典準備に当たる FDJ 幹部の外国出張に優先支出された。

他方、収入の計画は、参加費、宝くじ・祭典みやげ・記念切手などの販売、寄付、使用機器の売却などによるもので、③1923 万 M と④外貨 186 万 VM を見込んだ。

〔従って予定では外貨マルク収入は支出の 26 倍にもなるが、逆に東独マルク収入は支出の 14%にすぎなかった。合計収支を計算するには M と VM のレートが問題になるが、前述のようにそれは東独にとって難題であった[18]。〕

③のうち「寄付」は FDJ が集める 300 万 M と、企業、農業生産協同組合、消費協同組合などの集団寄付 300 万 M を予定した。

前者は青年〔団員?〕1 人当たり約 1.5 マルクに相当した。

後者では、特別作業班の時間外労働による賃金の全部または一部を「祭典口座 73」に振り込むこと（その賃金には税・社会保険料免除）や、青年作業班の合理化提案などによるコスト削減の一部の寄付（その 85%を FDJ 中央の、15%を FDJ の企業内基礎組織の祭典準備に当てる）などのキャンペーンがなされた。

国内からの訪問者の参加費には等級があり、1 人当たり、東ベルリンの青年は 10M、東ベルリン以外からは 25 ないし 30M、全国のピオネール団員は 25M、祭典プログラム協力者は無料であった。また「色々なグループ（例えば国家人民軍から）には別個の協定が該当した」。

国内からの公式代表団員の参加費は 400M と高額であったが[19]、大部分は派遣企業・組織が全部または一部を負担した。ある国有企業では自己負担が 90M で、残りは企業と企業内 FDJ・SED が負担した。また代表団員に支給された祭典制服は参加費よりも高額であった。

21.6 万人の参加者と代表 3000 人からの料金収入は合計 566 万 M 以上と見込まれた。

④外貨収入予定 186 万 VM は外国からの代表団や訪問者から予定された。代表は 1 人 1 日の滞在につき、コメコン諸国 5 ドル、他のヨーロッパと米国、カナダ、オーストラリア 4 ドル、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ 2 ドル（但し一部には日当 5M 支給）であった。〔西欧よりコメコン諸国のほうが高いのは驚きである。なお脚注 18 のレートを当てはめると、順に 12、9.6、4.8DM である。〕

〔仮に滞在 10 日間とし外国代表の内訳が不明ゆえ全員を最低額 2 ドル（4.80DM）によって計算しても（4.8×10×25646）、約 123DM になる。これには 1 日当たりとあるから連帯基金寄付は含まないだろう。下記の最低交換義務による収入見込みも書かれていない。**6 節**のレキシン報告には西独代表は「1 人当たり 60 ドル」支払ったとある。連帯寄付 10 ドルを除くと、12.5 日間の滞在になってしまう（50/4）。〕

代表以外の外国からの訪問者はその「日割り規定額」をドル払いしなければならなかった。〔これは東独が 1964 年以来導入した滞在 1 人 1 日当たりの最低交換義務を指す。この時点での規定額は 10DM であり、東ベルリンの日帰り滞在のみは 5DM であった（4 ヵ月後に各倍加）。義務額は DM で規定されたが、ドルその他の東独の銀行が扱うハードカレンシーによることもできた（詳細は青木 2019）。〕

貧しい外国参加者の中には繊維製品や靴を窃盗した者もいたが、「戒告」処分にとどめられた。

8.2. 労働力負担など

必要な労働力は、祭典の「内容と組織の精密な計画化」のための専門家、実際作業の担い手（資材の供給と保管や宿泊施設・舞台の準備、食事の調理と提供など）、利用予定建物の「若干」の修理などであった。

そのために、「13 日間の実施段階に約 2 万人の補助労働力と 1550 人の色々な組織委員会の職員」が全国から動員された。〔数字から、FDJ 団員の手伝いや祭典プログラ

[18] VM（Valutamark、外貨マルク）は貿易における計算通貨で、そのレートは 1VM=1DM（西独通貨）であり、他の非社会主義国通貨に対する VM のレートは新計画年度開始前に国際外為市場における各通貨の対 DM レートと向こう 1 年の評価に基づいて毎年決定した（Bundesbank 1999:40f.）。但し異説もあったし、さらにレートとは別に特殊な係数もあって、非常に複雑であった。コメコン内は別の計算通貨 M/VGW によったが、公表統計は VM 表記であった（のちに 1985～1989 年のみ前者を公表）。非社会主義国からツーリストの東独内公式レートは 1M=1DM、ドルや円など他の通貨は DM とのレート次第であった。別に大規模な東独マルクのヤミ市場のレートがあった。詳細は青木 2019a。なお DM は 1973 年 3 月から変動相場制になり、同年夏のマーケットでは 1US$=2.40DM 前後に推移した（Pick's 1977-79:254）。

[19] 1973 年の全産業平均月間労働収入は 836M、国有化されたばかりの企業を除くと 843M であった（DDR 統計年鑑 1981:109）から、400M はその半分近かった。

ム協力者を含まないと判断される。〕

閣僚会議が 1971 年 11 月 10 日に、祭典とその準備に必要な要員は「国家機関、企業、組織体、社会組織から派遣されるべき」であり、その期間中も当該企業などは雇用関係を維持し、「諸手当」も支払うように定めた。

従って、企業などの負担での、しかも「かなり長期に、しばしばすでに 1972 年 4 月から」の派遣となった。そのため計画達成に支障が出る一部企業は「抵抗を試みた」。

大きなキャンプ場や舞台、〔野外〕祭典レストランなどの建設には兵士も動員し、駐留ソ連軍も協力したが、祭典の費用には計上されなかった。

SED は、十分な「バナナ」を含む食料などの供給確保や移動手段の確保などに「大きな努力をした」が、「適時には必要な注意が払われなかった」問題もあった。例えば:

・市内の地下鉄は前年 10 月以来火災が相次いだにもかかわらず、調査委員会による検査が祭典直前の上、消火器と消火ホースの欠如、照明器具の防火性不足、職員の防火知識の欠如など、「必要な火災安全」が保障されていないという調査結果であった。〔地下鉄、S バーン、鉄道ともに車両が古く、木材の使用も多かった。〕

・バスも、各県から集めた 51 台のうち 28 台が故障で運行不能であった[20]。

・開会式場の電力不足の可能性が開会 2 日前に判明し、非常用発電機を手配しなければならなかった。

8.3. 住民の反応

祭典直前にシュタジは、「住民の間の怒りの増大」を察知した。具体的には、何よりも自分たちへの食糧供給、特に「野菜、果物、食肉、ソーセージ」の不足への怒りと、資金面の危惧であった。

ところが、祭典開始とともに住民の供給問題での異議が消えた。東ベルリンでは通常以上の供給がされただけではなく、「〔東〕ベルリンがこんなにきれいになったし、いつもこのままであって欲しい」という住民の言葉（シュタジの記録）のように、都市の変貌への共感ゆえであった。

また、多くの住民が祭典参加者の輪に入るか、興味深く見物し（Wesenberg への目撃者の証言）、また祭典ポスターやエンブレムの盗難も住民の関心を示した。

事前に「国家に拒否的あるいは無関心」な人物が逮捕〔や収容〕されたことも批判の鎮静になったが、それでも「住民の一部はその元来の拒否的態度を保持し続けた」。それは特に夜間に FDJ 団員への「祭典のブタ」、幹部やシュタジ要員への「ナチス」、「ロスケの家来」などの「侮辱の言葉や暴行」に現れた（シュタジ記録による）。

祭典の「視覚アジテーション要素」（横断幕やポスター、幟など）の 1 つへの落書きを含め、祭典ゲストに対する「ザクセン人」という罵りがたびたびあった（シュタジ記録）[21]。

通信ケーブル切断や電話での爆弾予告によって「ブタの祭典」への怒りを現す者もいて、祭典映画館「コロッセウム」は一時営業を停止した（シュタジ記録）。

外国人排斥の敵意も現れた。ある飲食店店員がアフリカからの代表たちに軽蔑の発言をし応対を拒否し、店員は戒告処分となった（シュタジ記録）。

他方、祭典参加者の多くは「無条件の感動」を示した。それはシュタジの記録だけではなく、Wesenberg 自身の目撃者インタビューの結果でもある。特に強調されたのは「高い水準の多くの文化催し」への満足であった。

彼らの一部が広場で夜を過ごしたことに対しては住民から「ヒッピー」の退去要求が出たが、シュタジは「大部分しつけのよい若者たち」と判断した。

外国人参加者の反応について、SED 中央委党組織部は、「西ベルリンへの流出が殆どなかった」こと、その上、逆に西ベルリンにいる留学生が母国から代表団とともに祭典に参加するために東ベルリンへ来たことを祭典プログラムの高い質の証拠とした（同終了報告）。

9. シュタジ・人民警察などの対策

シュタジ大臣ミールケは 1973 年 4 月 8 日に、シュタジ全職員に対して、「祭典に対して向けられるすべての敵対的な計画や企図、措置の有効な偵察、すべての敵対的行動からの防御、DDR 領土、とりわけ首都の保安と秩序の保証、そして第 10 回世界祭典の支障の無い準備と実施の保証のために、〔以下 16 項目を〕私は命令する」という「命令 13/73」を発した（AGM 2065: Bl.229-278）[22]。

シュタジの祭典対策としての作戦「旗」はすでに進行していたが、この命令はその体制と課題についての総括的な命令であった。

命令冒頭で彼は祭典について、「全世界の 2 万人の代表とわが社会主義国〔単数、東独〕の 30 万人の若い代表者たち」が参加する大規模国際イベントであることと、また「1972 年初め以来生じさらに変化している政治的・作戦的情勢の諸条件」があいまって「MfS〔=シュタジ〕に高度かつ複雑な要求をしている」と位置づけた。

そこで彼は、祭典の「広範囲にわたる政治的・作戦的諸課題の解決」のためには、「MfS の全職員に高い階級意識と政治的明確さ、チェキスト的能力、最高度の出動準備、細心の注意、責任感、規律、士気、革命的注意深さ」が必要だと、念には念を入れた列挙によって気合いを入れた。

このように、「政治的・作戦的情勢」の変化（とりわけ両独基本条約署名による変化）の認識と、チェキスト的方法による政権護持というシュタジの基本使命とがあいまってシュタジの祭典対策を規定した。

---

[20] 東独では車両も維持のための部品も不足だから旧型車が補修不十分なまま走行した。ある時ワイマール中心部の交差点で停車した時代物の小型トラックから車輪が転げ落ちてきたのを間近に目撃した。けが人はいなかったが、その後三菱自動車トラックの製造責任隠蔽の車輪脱落死傷事故に接して危なかったと思った（参照：http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/law/lex/12-3/matsumiya.pdf；http://www.shippai.org/fkd/cf/CB0011010.html など）。

[21] プロイセン（ベルリン）とザクセン（ドレスデン、ライプチッヒ）の「困難な隣人関係」は前者が後者からマグデブルクを奪取（1680 年）して以来と言う（Forberg 2014）。ザクセン出身のウルブリヒトの時代に東ベルリン市民の中には官庁街を「ザクセンハウゼン」と罵る者がいたと聞いたことがある。ザクセンハウゼンはナチ強制収容所（ソ連軍も活用）があったベルリン郊外の地名でもある。

[22] 「DDR の首都における 1973 年第 10 回世界青年学生祭典の準備と実施の保安についての命令 13/73」。

9.1 体制と課題：ミールケの命令 13/73

命令 13/73 は 50 ページ（タイプ印字）、16 項目にのぼるので、担当部局ごとの課題を列挙する第 12～16 項は省略して、以下に全体の体制と課題を規定した第 1～11 項を紹介する（AGM 2065:Bl.231-243）。

なお命令宛先として「対外諜報本部、全ての局と独立部〔=局に属さない部〕・県支部・大ベルリン支部」という言葉が繰り返される。長いのでこれらを以下では主要部局と呼ぶ。「大ベルリン支部」はその後ベルリン県支部に改称。

1）「すべての政治的・作戦的措置は「旗」（Banner）という名称の作戦の枠組みにおいて実行」する。

2）作戦責任者は大臣代理・中将シュレーダー（〔Fritz〕Schröder）〔=シュタジ第 XVIII, XIX, XX 局担当〕であり、彼が作戦の「統一的かつ厳格な中央指導を保証する」。

彼は次の部局〔作戦中核部局〕の「臨時作戦投入参謀部」（ZOES）責任者とともに指揮する〔但し ZOES は全主要部局や ZAIG ほかに設置〕：

> 対外諜報本部、第 I 局, 同 II, 同 VI, 同 VII, 同 VIII, 同 IX, 同 XVIII, 同 XIX, 同 XX, 要人警護局、ZAIG（中央評価情報グループ）、第 X 部、大ベルリン支部、フランクフルトとポツダム両県支部

3）中央作戦参謀部（ZOS、常設）が作戦責任者の活動機関となる。ZOS は、主要部局および ZAIG と協力しながら、「政治的・作戦的諸措置の準備と実施の状況」と「政治的・作戦的情勢」を分析し、「必要な中央決定を準備し、調整課題を解決」する。

4）主要部局責任者は「臨時作戦投入参謀部」を各部局責任者代理の指揮下に設置せよ（設置期間：1973 年 4 月 25 日～8 月 10 日）。

5）主要部局は大臣指示のバカンス規定に基づき、1973 年 7 月 23 日～祭典終了日（8 月 5 日）の全職務単位の迅速な活動準備体制を保証せよ。

6）主要部局は 1973 年 5 月 5 日までに作戦責任者に、各部局の祭典対策の投入計画を提出し、承認を得よ。

7）「外国、特に非社会主義その他政治的・作戦的に関心のある諸国からの参加者の確かな作戦的保安の保証のために」、1973 年 4 月 20 日までに作戦責任者直属の「臨時活動グループ」を設置せよ。このグループが「外国参加者の DDR 滞在とその宿泊・世話・食事・催し参加・あり得る旅行その他に関連するすべての政治的・作戦的諸問題と諸課題の解決に責任を持つ。すべての政治的・作戦的諸措置は外国参加者の確かな保護やテロリストの行動、挑発その他の祭典妨害の防止に向けられるべきである」。

〔「作戦的保安」は対象の安全確保のみではなく、対象にシュタジの秘密作戦を仕掛けることを意味する。具体例は **9.2 節**参照。〕

8）外国からの参加者に関わる「逮捕、捜査手続き導入、人物や車両の国外追放、人物や荷物、運送手段の捜索、作戦的コントロール行動の結果における対象の確保または押収」についての決定は、「作戦責任者の同意を必要とする。現行犯の確認の際にそうした措置が導入される場合には、事後的承認を即座に得るべきである」。

9）「政治的に重要な主要催し」4 つ、すなわち「開会式、法廷「世界の青年は帝国主義を告発する」（8 月 3 日ベーベル広場）、大デモンストレーション（8 月 4 日）、閉会式」は、「作戦責任者の指揮下に、すべての該当職務単位の要員と手段の集中的投入と調整された協力によって確実に防備」せよ。それらの防備責任は要人警護局が負う。

10）〔各地の〕シュタジ内の FDJ 基礎組織からの祭典代表団は「FDJ 大隊」にまとめ、「作戦責任者の作戦投入予備として優先的に防備課題の解決のために投入」せよ。その指揮には作戦責任者が任命する「作戦指揮将校」が当たれ。

11）「すべての作戦的職務単位の原則的な政治的・作戦的課題」は以下のとおりである（a・b と丸番号は青木）：

11-a）「作戦地域内ないし作戦地域に向けたラインごとの活動における課題」[23]

①「敵、とりわけ情報機関や政治的・イデオロギー的妨害工作センター、報復主義組織、通り抜け組織〔逃亡援助組織〕、極右・極左、並びに反動的教会グループによる、討論グループの準備・投入や扇動文書・チラシ配布、供給その他の分野で世界祭典のとりわけ主要催しの計画された進行における妨害や突発事故になり得る破壊活動のような計画や企図、措置並びに手段と方法の偵察」

②「とりわけ DDR の首都の国境に対する、西ベルリンからのすべての敵対的活動計画の偵察」

③「非社会主義その他政治的・作戦的に関心のある諸国の祭典代表団ないし青年・学生組織のメンバーを世界祭典の妨害のために投入ないし活用する敵対的な企図や措置の偵察と、世界祭典の支障の無い進行の保証と敵対勢力の暴露、外国祭典参加者の政治的・作戦的防備のための臨時活動グループとの緊密な協力のもとでのそれら〔=敵対的な企図や措置〕の発現の防止のための、作戦地域でのないしはその代表団の DDR 入国後の必要な作戦的措置の実施」。〔具体化の様子は **9.2 節**。〕

11-b）「防御地域[24]での課題」〔多数挙げられているので、ごく簡略に列挙する。具体化の様子は **9.3 節**。〕

・「全 IM/GMS 活動の調整」〔ともに密告者の活動〕

・逃亡・逃亡援助・国家敵対行動・集合・乱暴狼藉などの「政治的・作戦的処理」

・「帰責能力の無い人物」や「暴力行為の傾向のある人物」の「作戦的コントロール」

・東独で就労・就学する外国人のうち「防諜上防備されるべき人物たちの作戦的コントロール」

・祭典に参加する東独要人・外国ゲスト・外国人就労者・留学生・外国祭典代表団への脅し・テロの偵察

・国内の「敵対的かつ否定的な若者グループの作戦的処理」の「断固とした実現」

・機密保持の保証

・企業や施設の保安

・火器、爆発物、毒物、放射性材料の保安

---

[23] シュタジの「作戦地域」（Operationsgebiet）は、秘密情報活動の対象国を指し、状況によってチェコスロバキアやルーマニア、ポーランドも対象となったが、殆どのケースは西ベルリンを含む西独であった（Engelmann 2016:252）。ラインはシュタジ本部の局と県支部の同名の部（例えば第 I 局と県第 I 部）の連携を指す。

[24] シュタジの言う防御（Abwehr）は、防御地域（Gebiet der Abwehr、自国と同盟国）を敵の攻撃から守るすべての秘密警察活動を指す（Engelmann 2016:36）。

・西独市民の国境近辺への入国と、トランジット・ビザなし旅行の乱用の「不断の監視と分析」。

以下はその作戦実施状況であるが、「作戦地域」でのそれは含まれない。

9.2 祭典期間：「寛容」とひそかな対策とビアマンの脅威

Wolle (2013) が言うには、祭典期間には人民警察は、若者の「敵対的・退廃的」な外見を問題にせず、「殆どすべてが許された」。東独と世界の若者が深夜まで東ベルリンのテレビ塔のまわりや隣接したアレキサンダー広場〔**図 1・9**〕で、議論したり歌ったりすることも、西の若者がチラシやパンフを配ることも規制されなかった。「多くの DDR の若者たち—特に地方から来た若者—が、この世界祭典をまさにカルチャーショックと感じた」。以上はライナー回想に合致する。

Wolle（同前）は、しかしこの「美しい外見」とは裏腹に、「党とシュタジは長期かつ細心にあらゆる不測の事態の準備をしていた」と言う。すなわち：

> 第 1 に祭典に参加する FDJ 団員を事前に集めて「敵対的な議論や挑発の扱い方について詳細な指示」を与え、「本格的な討論練習」も実施した。
>
> 第 2 にシュタジを中心とする大規模治安作戦であり、そのためにミールケが提示した「第 10 回世界祭典中の保安保証のための措置計画」をホーネッカーが 1973 年 6 月 25 日に承認した（Wolle 2013:214f.）[25]。

ミールケは祭典期間におけるシュタジの行動スタイルを次のように指示した：「我々は共産主義者として、チェキストとして、今回は 3 匹のサル〔見ざる言わざる聞かざる〕のように行動しなければならず、それにもかかわらず、必要な場合には、見て、聞いて、正しくかつ断固として行動しなければならない」（1973 年 7 月 5 日）[26]。つまり「寛容」と「断固さ」の使い分けが指示された。

Ochs（2003）は、シュタジは「新しい外交的諸条件」に対応して、「前段階〔開幕までの準備段階〕での抑圧と、祭典期間の可能な最大限の寛容」という「二重戦略を使った」と特徴付けた。

具体的には、シュタジには「2 つの重点課題」があった：①「DDR 代表者たちや国際的な名誉ゲスト並びに外国からの祭典参加者の保安と保護」、「外国ジャーナリストや国際プレスセンター、大使館その他の外交施設の保護」、「国境施設や工業施設、病院、火力発電所のようないわゆる妨害工作の危険のある対象の防御と保護」、②「前段階」で「第 10 回世界祭典の妨害または中傷のための敵対的否定的勢力の計画や企図、措置を適時かつ包括的に」偵察・防止することであった（Ochs 2003）。

これによると祭典期間における要人や施設の保安、準備段階における「敵対的否定的勢力」対策がシュタジの重点であるが、Ochs（2003）にも説明があるように、シュタジは祭典現場でも多くの工作をし（**9.2 節**）、準備段階では大規模な予防措置を実施した（**9.3 節**）。

ただ、祭典では私服シュタジが粗暴な対処をすることはなく、「寛容」の背後で以下のようにひそかな対策を種々講じた。但しそうした対策も祭典現場の全シーンに及んだわけではなく、一部の公式行事に限られ、ライナーとウルリッヒの友情が育まれたように、またすべての回想や研究が認めるように、盛んに行なわれた非公式の交流場面や多くの音楽行事などには及ばなかった。

東西の若者の自由な交流は「美しい外見」（前述の Wolle）に留まらず実体でもあり、また一定の自由化は祭典限定の「一場の夢」（ライナー）ではなく他の文化領域にも及んだが、一党独裁堅持のための保安措置もひそかな形で並行した。

祭典開幕前に FDJ 中央評議会が東独の祭典代表に、祭典では常に FDJ の制服〔以下青シャツ〕を着用し、すべての会話において断固として SED と DDR の政策を支持し、「第 10 回世界祭典の政治スローガンの実現」を支援し、同時に外国ゲストへの手厚いもてなしもすすべきである、と指示した。加えて開幕前に 1 週間の「世界祭典向けの理論的な準備」の合宿もあった（Rossow 1999: 260）。

その国内代表団の選考についてシュタジは、「自国の社会的・政治的要請に添った青年のみを任命する」ために調査を実施した。その結果「多くの志願者が政治的な信頼性の欠如や前科、不道徳者または乱暴者ゆえに認められなかった」（Ochs 2003、原資料 MfS ZAIG 4853）。

代表のみならず、「“諸施設やその周辺で、または世話役として外国からの参加者と直接または間接に接触することができる” 約 5 万人が予防的に調査された」（Ochs 2003、MfS AS 432/73）。

西独保守系青年組織 JU の行動にはシュタジが対応して「中和」し〔青シャツ着用のシュタジのことだろう〕、祭典を「労働者の裏切り者のプロパガンダ舞台」とする「トロツキスト的および毛沢東主義的諸組織のチラシ」には東独青年自身が「拒否反応」を示した。「公式行事は厳しくコントロールされ」、特に批判の可能性のあるテーマではいわゆる「進歩勢力」が席を占め、異論派は「周辺の席しか与えられなかった」（Ohse 2003:353; 355）。

その具体例をシュタジのジェルジンスキー名称護衛連隊[27]の文化将校であったハーゲン（Hagen K.）が証言した：

---

[25] 「Plan der Maßnahmen zur Gewährleistung der Sicherheit während der X. Weltfestspiele, vom 25.6.1973」（MfS, VVS 644/73、Ochs 2003 では MfS, GVS 005 – 644/73）。Ochs（2003）はこの文書を「彼〔ミールケ〕の命令により 1973 年 4 月に」作成、6 月 25 日にホーネッカーが承認としたが、2 ヵ月後承認はおかしい。4 月〔18 日〕に作成されたのはミールケの命令 13/73（上記）である。Ochs（2003）はまた、6 月 25 日の承認後に「旗」という作戦になったと言うが、すでに上記の命令 13/73 が作戦「旗」を総括的に規定したし、1972 年 9 月 8 日付けのミールケの通知にその作戦名があった（Maeke 2011:582）。

[26] 「第 10 回世界祭典期間の保安の保証措置の全体計画における党・国家指導部の代表者およびその他の指導的同志の指示のプロトコール」（1973.07.05、原資料 MfS, GVS 005-680/73, Bl. 92）。Ochs（2003）による。Wolle（2013:214; 2008）がこの言葉の典拠とした Suckut（1996:34）に見当たらない。Wolle（2013: 215）は別の言及で同じプロトコールを使ったが、そこには「VVS 680/73」とある。ミールケの指示には「VVS」も「GVS」もあり、ともに機密事項を示すが、このケースはどちらかの誤記だろう。

[27] Wachregiment »Feliks Dzierzynski«。1951 年創設、1967 年からジェルジンスキー名称となり、1989 年には 1.1 万人。主な任務は、シュタジ本部の AGM の指揮下に政治局員居住地ヴァントリッツを含む党・国家の施設と要人・外国ゲストの護衛を担った。モドロウ政権が 1989 年 12 月に連隊を解散した（Engelmann 2016:365 ff.,396）。ジェルジンスキーはソ連 KBG の初期組織チ

彼は FDJ 代表として祭典に参加し、FDJ の制服〔青シャツ〕を着て一般参加者に「紛れ込む任務」に当たった[28]。

「我々の任務」は、各種の催しに参加して、「挑発やチラシ、間違ったスローガンが掲げられないようにすることだった」。だから、彼らは、何か起こった時への対処のために、夜な夜な「広場や公園で諸国民が多彩に交わり」を持つ場にいた。

あるグループがシンガーソングライター・ビアマン（Wolf Biermann）の歌を歌った時には、〔妨害のために〕「自然発生の見せかけ」のもとに護衛連隊の歌唱グループの男声合唱が別の歌を歌い始めた。

「ロックやビートの催し」にも「我々は真っ先にいなければならなかった」。FDJ の制服を着ているが、ギターを持ち髪が長い男がいれば、「予防的にその近くにいる」ことになっていた。

国内から「ベルリンへの大量到着も監視され」、「外見が政治的風土に合わない」者はベルリン入りできなかった。「弟」から FDJ の制服を借りてベルリン入りしても、シュタジの「作戦グループ」が摘発した（Rossow 1999: 260f.）。

ここでビアマン追放計画について拙稿[29]の補足をしたい。それは祭典に直接関連するからである。

シュタジ文書 HA IX 16677（Bl.16-21）によれば、彼の祖母を利用した追放計画が 1973 年 4 月 12 日に、祭典にも言及しながら、立案された。いわゆる「緊急家族案件」（危篤や死亡、重要家族行事）での出国許可規定を利用して出国させ、国籍を剥奪するという陰謀であった。この文書の表題は「ビアマンの作戦的処理の終了構想」であるので、一見監視や IM 派遣、分解工作などの「作戦的処理」の終了かと思わせるが、そうではなく、そうした作戦をやめて彼を追放しようというものであった。その理由は、ビアマンのこれまでの言動（特にその言論や西独での旺盛な出版）は国家敵対的扇動罪ほかで「10～15 年の自由刑」相当である上に、近づく「第 10 回世界祭典」に向けて彼の「敵対活動」が増加し、「DDR の否定的立場の若者へビアマンから発せられる影響が強まること」が予想されることだとある。

従って、この追放計画は祭典前の大規模予防措置（詳細 **9.3 節**）の一環であった。

Ochs（2003）によれば、シュタジが職員に青シャツを着させて「FDJ 団員に偽装して投入した」のは、「導入された保安措置を部外者に覆い隠し、自分の要員を迅速かつ不意に投入できるように」するためであった。これらの職員は、ハーゲン証言にあるように、「いわゆる否定的な青年たちの“集合”」の有無を見回り、問題を発見すれば、「グループの中に入って賢明な議論によって“集合”を解消」するよう尽力し、挑発者に対しては「“自制して挑発者の観察と確認のみ”を行ない、〔いつもは粗暴な逮捕劇を演じるが〕“見物人の連帯を防止するために、逮捕はあとで、一般人に知られないようになされるべきである”と指示された」。貴賓席前でシット・イン（sit in）が発生するなど、「大きな妨害」が生じた場合にのみ「介入の許可」を求めることになっていた。

Ohse（2003:353）によると、ビアマン自身もアレキサンダー広場で歌ったが、シュタジの対応は記されていない[30]。

Zeit（1973）によると、ビアマンはこの祭典のために「司令官チェ・ゲバラ」（Commandante Ché Guevara）をテーマにした歌」を作り、当局に「公式に提出し」、ホーネッカーにも「文書で配慮を依頼した」。しかし、ビアマンが言うには、指導部は「まだじっくり考えている」ため、「この歌は私の住居の中に留まっている」。つまり、これを公衆の前で歌うことはこの時点ではできなかった。

現在 SED 独裁解明連邦財団のサイトには、東独政府はビアマンが祭典のためにチリ・クーデターについての歌を公衆の前で歌うことを「禁止した」、そのため彼は自宅でジャーナリストにその歌を聴かせている、とある[31]。

しかしクーデターは祭典後の 1973 年 9 月 11 日であった。この歌は 6 月のクーデター未遂の際の兵士によるカメラマン射殺への怒りの歌「チリ（カメラマンのバラード）」（Chile - Ballade vom Kameramann）のことに違いない[32]。

どちらを歌うにせよ、当局にとっては歌自体よりビアマンが問題だっただろう。彼はすでに著名な反体制派ハーベマン（Robert Havemann）との交友が始まった 1963 年に一時的公演禁止、1965 年から全面的な公演・出版禁止になっていた（Müller-Enbergs 2010:126、Nayhauss 2006: 134）[33]。いわゆる職業禁止である。

これら 2 つの歌のレコードは CBS レコード（西独）から 1973 年に発売された。その「利益金」は「チリ反革命」犠牲者救援基金に充てられ、1975 年 5 月までに 2 万 DM になな

ェカー（反革命・サボタージュ取締全ロシア非常委員会）の責任者。シュタジはその教えを守る「チェキスト」であることを誇った。

下記に BStU による同連隊の説明と写真がある：https://www.bstu.de/informationen-zur-stasi/themen/beitrag/das-wachregiment-des-mfs-feliks-e-dzierzynski/

[28] シュタジ要人警護局（HA PS）は、FDJ の青シャツ着用は「突然命じられた」ためすぐには用意できなかったと言う（Wesenberg 2003:658f.）。HA PS 職員は 1989 年秋 3343 人で、ジェルジンスキー護衛連隊の指導にも当たった（Engelmann 2016:148）。

[29] 青木（2004:93-100）。そこでは当時東独で人気のビアマンが祭典の 3 年後、1976 年 11 月に西独公演からの帰国禁止という形で東独から追放された経緯を紹介し、その半年前のビアマンの母（西独在住）を利用した追放計画にも触れた。

ビアマン追放を報じた ND（1976.11.17）は、ビアマンが西独公演で「反 DDR・反社会主義」のために「私はなんでもやる」（Ich bin zu jeder Schandtat bereit」と言ったと批判したが、それは文脈のすり替えであった。ビアマンは客席からの曲のリクエストに「なんでもやる」と答えたのであった。多くの東独市民が公演をテレビの録画放映で見たから、すり替えがばれ、ND への信頼が一層損なわれた（これについての証言は青木 2009:156）。

ビアマンの詩と歌については野村（1986）参照。当時のビアマンはショッセー通り〔南端〕十字路の西北角 131 番地のアパートに住んでいた（野村 1986:20）（**図 2** 右下矢印）。そこは祭典開会式が行なわれた「世界青年スタジアム」やショッセー通り検問所のすぐ近くであった。同アパートの 1974 年と 2015 年の写真が de.wipwdia の「Wolf Biermann」にある。HA XX, Fo, 147 はシュタジが秘密裏にビアマンの住居内を撮影した写真集である。ゲバラの写真も飾られていた。この写真集の BStU 解説には場所が「Eckhaus Hannoversche Straße/Chausseestraße」とある。

[30] 典拠は Stefan Heim の著書であるが、私は未見。

[31] https://www.bundesstiftung-aufarbeitung.de/klaus-mehner-3915.html の中の写真「Opposition / Repression」01 の説明文（写真のリンクによる表示）。

[32] Youtub に彼が 1976 年ケルン公演でこの歌を歌う動画がある。野村修 1986:162-168, iv-vi に訳詩と楽譜がある。

[33] ビアマン追放直後シュピーゲル誌（Spiegel 1976）はビアマン公演禁止を 1963 年以来と報じたが、それは「一時的」であった。

った（野村 1986:74-77。同:165 に後者カバー写真）。

シュタジをはじめとする東独治安当局にとって祭典は、「世界に開かれた」行事ゆえに抑圧が見えないようにしつつ、不都合の発生を防止しなければならず、神経をすり減らす行事であった。

その際、特にシュタジが念頭に置いたのは 1969 年 10 月 7 日、東独建国 20 周年の記念日の事件である。この日に壁のすぐ向こう側のシュプリンガー出版社ビル[34]で、「ローリングストーンズが公演するというわさが、何千人もの東独のロックファンを壁の方向に駆り立て」、警察が警棒と警察犬で対処する騒動になった（Wolle 2008）。

壁を越える逃亡や壁への殺到の防止など、シュタジの国境防衛は別稿とし、以下には、祭典期間の厳重な国内警備のための大がかりなシュタジ動員を紹介する:

> シュタジは東ベルリン及び隣接 2 県の「全要員」（常勤職員）4260 人と、ジェルジンスキー名称護衛連隊 3200 人、シュタジ法科大学教員・聴講将校・学生、各シュタジ県支部からの派遣職員を動員した。
>
> その合計は 27096 人で、当時のシュタジ全職員約 5.3 万人の半数以上に達した。加えて「1550 人の選抜された人民警察官」がシュタジ指揮下に置かれた（Ochs 2003; Wolle 2013:215）。
>
> シュタジはジャーナリストを含む「非社会主義諸国からの参加者」と東独市民との接触を探るために、IM（非公式協力者という名の密告者）を 509 人活用した。うち 428 人は従来からの、81 人が新規勧誘の IM であった。また作戦「旗」の終了報告によると、シュタジは外国代表団の世話役と通訳の約 90%と「非公式な結び付き」を作って、代表団のチラシやパンフの内容を報告させ、それらを「陰謀的にコントロール」させた。すなわち、「意図的とは見えないように」汚したり、水道管破裂や酸の投入によって使用不能にするなどであった（Ochs 2003、原資料 MfS AS 432/73; ZOS 1171）。

シュタジは「4000 人の密告者を華やかな行事に送り込んだ」とも言う（jugendopposition.de 2019）。

外国代表団の安全と監視のために「外国参加者活動グループ」がシュタジ内に設置された（Ochs 2003）。

この活動グループは、ミールケ命令 13/73 第 7 項にある「臨時活動グループ」（**9.1 節**）のことだろう。その設置目的にあったように、下記のような「作戦的保安の保証のため」の活動をした。

その任務は、①外国ゲストとその宿舎の安全確保（そのために宿舎近辺を「偵察」し、その住民の調査もおこなった）と、②代表団の「コントロール」であり、そのために「隠された観察地点」を設け、「施設への政治的・作戦的職員の潜入ルート」を確保した。これらのためにシュタジが 1360 人の職員、人民警察が 2050 人、合計 3410 人を投入した（Ochs 2003、原資料 MfS AS 432/73、Bd.1a; ZOS 1171）。

「外国代表団による望ましくない政治的内容のチラシやパンフレットの配布」を防止し、配られてしまったら「保安要員や FDJ によって回収されるべきである」ともあった（Ochs 2003、原資料 MfS ZOS 1171）。

さらに「“参加による妨害”という敵対的構想の偵察と撲滅」のための措置として、シュタジの「政治的・作戦的職員」が「公式の世話役として、また一部は運転手として」配置された。それによってシュタジは「本質的により多くの直接的な情報を“すくい取る”ことができた」ことを確認した（Ochs 2003、原資料 MfS ZOS 1171; AS 432/73, Bd. 1a）。

「参加による妨害」が当時の西独 SPD 政権の「接近による変化」政策をもじっていることは明らかである。

外国代表団の宿舎には「FDJ 団員に偽装したシュタジ職員」が受付にいて通行証をチェックし、行動を監視した。大規模な行進の催しではルート上に配置された通訳が外国代表が掲げるスローガンを翻訳してシュタジに報告し、望ましくないスローガンは「作戦要員のよく考えた介入」によって取り下げさせた（Ochs 2003、原資料 MfS AGM 2065; AS 432/73, Bd. 1a）。

にもかかわらず、「外国祭典参加者の異なる政治的行動に対して“可能な最大限の寛容”が示されるべきであった」。だから外国代表団は入国時に税関検査を受けず（東ベルリン・シェーネフェルト空港は別）、テープレコーダーやコピー機などの持ち込みも許された。しかしシュタジは気付かれないように「いわゆる作戦的・戦術的手段によって」人物と荷物のコントロールを実施した。また旅券の写真をコピーし「敵対的・否定的人物」の監視に役立てた（Ochs 2003、原資料 MfS AGM 1758; AS 432/73, Bd.1a）。

内務省は東独警察官（ドイツ人民警察、Vopo）19800 人を東ベルリン警察本部長の指揮下に動員した（Wolle 2013:215）。予備には 2 つの人民警察機動隊 1800 人と、内務省およびスポーツクラブディナモの FDJ 代表が当てられた（Wolle 同前）とも、8870 人の人民警察ボランティア協力者や警備係連盟員が当てられた（Ochs 2003）とも言う。

東独警察計画定員は当時（1974 年）58308 人であった（Diedrich 1998:132）ので、その 34%の動員であった。上記のシュタジ指揮下 1500 人を加えると 37%になる。

国家人民軍（NVA）は、1750 人の兵士（2 エリート大隊、3 落下傘中隊、1 混成ヘリコプター中隊、1 移動指揮所）を当てた（Ochs 2003）。オートバイ狙撃連隊も当てられたとも言う（Wolle 2013:215）。これらはもちろん現場に出るのではなく、「高度待機態勢」（Wolle 同前）であった。

準軍事組織である GST（スポーツ・技術協会）[35]会員 1700 人と、FDJ の秩序維持グループ（Ordnungsgruppen）4000 人が全国から動員された（Ohse 2003:351）。

祭典の現場では、例えば西独代表が登場する場面には FDJ の青シャツを着た上記護衛連隊兵士が会場またはその「戦略地点」を占拠した。夜間には「信頼できる年輩の同志たち」が住宅地域を見回り目を光らせた（Wolle 2013:215）。

これらの動員数は人口比では非常に大きい。1973 年人口は東独 1695 万人、日本 1 億 910 万人であり、日本が東独の約 6.4 倍であった。上記の警察官動員 2.4 万人を人口比で日本に当てはめると 15.4 万人[36]である。

---

[34] このビルについては『社会主義体制史研究』第 6 号の表紙と表紙裏の写真と説明参照（http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/）。

[35] 「明日の兵士」を養成する準軍事組織で、射撃をはじめ陸海空の軍事関連スポーツの団体。訓練写真が下記サイトにある: https://www.mdr.de/zeitreise/gst122_showImage-bild319492_zc-a0ed9723.html

[36] 当時の自治体警察官定員（http://sentence.co.jp/2016/06/06/警察官/）の約 85%に当たり、ほぼ総動員に当たる。

上記の東独の警察官計画定員 58308 人は人口比例で日本に当てはめると 37 万人を越えるので、東独は人口比で日本の 2 倍の警察官密度の警察国家であった。

シュタジ中央作戦参謀部（ZOS）は、祭典における「…敵対的・否定的な行動ないし出来事の評価」と題した総括文書（8 月 29 日）において、「祭典の準備と実施の全期間において首都及び DDR 全県の政治的・作戦的情勢はノーマルであり安定していた。保安と秩序が常に保証された」と満足した（Ochs 2003、原資料 MfS ZOS 1173）。

具体的には、予防措置が成果を挙げたこと、祭典期間の国境では「約 13g のハッシッシュやわずかな低俗・わいせつ本、ブローニング拳銃 1 個」の押収以外には、「言うに足る事件は殆ど無かった」ことが挙げられた（同上）。

事前には「強力な妨害」の発生が懸念されていた。すなわち、「国境に対する挑発」や「扇動・プロパガンダ資料による敵対的な理論・イデオロギーの流布」、「特別に選別され訓練された西独の人物たち」による工作、「西ベルリンの左翼および極右勢力」の大量入国、これらの「敵対勢力」と国内の「否定的人物グループ」が協力して「壁建設」・「射撃命令」への反対、「旅行の自由」要求のシュプレヒコールなどの「挑発や突発事故」の懸念であった（Ochs 2003、原資料 MfS ZOS 1173; ZAIG 4853; 4852）。

こうした事前情報は、西独の新聞、ラジオ、テレビと IM 情報をまとめたものであり、「過度に作用」したが、大規模投入の「正当化」に役立った（Ochs 2003）。

西独・西ベルリン当局も反祭典の動き抑制に動いたかもしれない。それは両独関係の政治状況によってあり得ることであり、例えばかつて西ベルリン市政府は通行証協定実施期間に逃亡用トンネルの利用を禁止した（青木 2018:51）。

シュタジはもし「否定的内容のシュプレヒコール」が起これば FDJ による対抗シュプレヒコールまたは「FDJ 歌声グループの自然発生的投入」を計画していた。「望ましくないシンボルやスローガン、ポートレート」の掲示には「寛容」に対応し、「不快な扇動や中傷」には「会話」で解決を図るが、うまくいかない時には「観察し人物を同定」し、大規模催しでの「望まれない」スローガンにはすぐに覆い隠すためのスローガンと担ぎ手を用意することになっていた（Ochs 2003）。

祭典期間の逮捕は 213 人（うち 93 人に捜査手続き導入、そのうち拘留 76 人）だが、逮捕のうち祭典参加者は 24 人（うち 3 人は酔っ払って住宅に掲揚の東独国旗をみやげにしようとしたフィンランド人などの外国代表）にすぎなかった（Ochs 2003、原資料 MfS HA IX 269）。

そこで Ochs（2003）は、「前段階における抑圧によってあり得る危険の群れを排除し、祭典期間には寛容に徹し目立たないところで行動するというシュタジの二重戦略は、有効性を実証した」と言う。

「しかし、人員と資材の厖大な動員にもかかわらず、世界祭典の全面的なコントロールを達成することができなかった」と続けた。「青年たちにとって、コントロールと監視を離れた自由の余地が十分に存在した」からである（同前）。

シュタジが特に気にしたのは、東独市民の「非社会主義の外国」からの参加者との接触がシュタジによって確認された数よりも実際は「ずっと多かった」と見られることであった（Ochs 2003、原資料 MfS ZMA XX）。

9.3 祭典前：大規模予防措置

国内治安対策には祭典前の予防措置がより重要かつ大規模であった。党の大義の前には人権のない共産圏らしいやり方であった。

予防措置には、失敗したビアマン追放計画（**9.2 節**）のように、大物を狙い撃つシュタジらしい陰謀もあったが、一般青年には公然たる大規模作戦が展開された。

幅広い適用可能性を持つ刑法の運用、刑法非該当者の刑務所以外への予防収容、東ベルリンへの旅行禁止などが実施され、後二者には裁判所の関与が不要であった。

すでに 1973 年前半に東独全体で刑法第 249 条（反社会的行動による公共の秩序と保安の侵害）[37]によって 6635 人の捜査手続きが導入された。これは前年同期の 3.3 倍であった。また同年初日から 7 月 23 日までに少なくとも 917 の「犯罪グループ」（メンバー数 5258 人）が解体され、1824 人が逮捕された（Wolle 2008; Wolle 2013:216、原資料 MfS HA IX 5353）。

Ochs（2003）は、祭典開始までに 955 の犯罪グループの「少なくとも 5391 人」が捜査され（原資料 MfS HA IX 5354:Bl.16,Anlage 3）、祭典への犯罪行為の準備または祭典の危険となり得る人物グループ所属を理由に 7 月 23 日までに 8995 人がシュタジと人民警察によって逮捕された（原資料 MfS HA IX 269）と言う。

シュタジ文書（HA IX 5354: Bl.15）によると、7 月 1 日から祭典終了日〔8/5〕までに刑法第 249 条違反ゆえの捜査手続きが 3671 人に導入された。うち 89%が祭典開幕前であり、祭典期間の捜査手続き導入は 396 人（11%）にすぎなかった。県別最多はポツダム県の 457 人であり、東ベルリンは 350 人であった。

この数字によれば 7 月 1 日から祭典開幕前日の 27 日までの捜査手続きは 3275 人（=3671-396）となる。これは上記 Wolle の 1973 年前半の数字（6635 人）の 49%に当たり、1 日当たりでは前半の 3.3 倍というハイペースであった（1 日当たり 37 人→121 人）。

1973 年初日から祭典前日までの捜査手続き合計は 1 万人近く、9910 人（=6635+3275）に達したことになる。

東ベルリンと隣接 2 県（ポツダム県・フランクフルト県）に限ると、「祭典準備期間」に「2073 人の反社会的人物」が逮捕され有罪となった（うち東ベルリンでは 1460 人）（HA IX 5355：Bl.1）。この「祭典準備期間」の日付の記載がない。終わりは開幕前日だろう。ちなみに、祭典期間の逮捕は 24 人のみであった（bpb 2003）。

別のシュタジ文書では同じ東ベルリンと隣接 2 県について、1973 年 7 月 1 日～8 月 4 日に 1007 人、うち開幕まで

[37] 第249条 (1)労働能力を有するにもかかわらず、労働を嫌って規律された労働を逃れることによって市民の社会的共同生活または公の秩序および安寧を侵害した者は、保護観察の言渡し、拘留刑または2年以下の自由刑をもって処罰される。(2)売春に従事し、またはその他の方法で非社会的生活様式によって公の秩序および安寧を害した者も、同様に処罰される。(3)情状の軽い場合には、刑事責任措置を免除し、国家の統制監視および教育監視を言渡すことができる。 (4)犯人がかつて第1項もしくは第2項により、または重罪の故をもって処罰されたときは、5年以下の自由刑を言渡すことができる。(5)滞在所の制限および国家の統制監視および教育監視を附加的に言渡すことができる（山田1982: 103-104）。本稿では「統制」を原語のままコントロールとした。

に 916 人に捜査手続きが導入されたとある（**表 2** の一部）。このうち何人が有罪になったかは記されていない。

表 2 捜査手続き導入（1973 年 7 月 1 日－8 月 4 日、人）

県	7/1-23	7/23-28	7/28-8/4	合計
Berlin	239	66	45	350
Cottbus	102	13	14	129
Dresden	214	31	32	277
Erfurt	70	127	29	226
Frankfurt (Oder)	186	7	7	200
Gera	110	15	9	134
Halle	148	45	48	241
K-M-Stadt	199	25	24	248
Leipzig	222	75	32	329
Magdeburg	190	39	23	252
Neubran-denburg	200	6	12	218
Potsdam	365	53	39	457
Rostock	354	35	72	451
Schwerin	73	14	7	94
Suhl	49	3	3	55
合計	2,720	555	396	3,671

（注）原表は県を北から順に並べ、ベルリンのみ末尾としたが、アルファベット順に並べ替えた。日付の重複についての説明はないが、、例えば「7/23-28」は本文の記述によれば、実際には「7/23-27」である。（出所）HA IX 5354_Bl.15.

表 3「第 10 回世界祭典に参加しようとして逮捕および防止された否定的人物」（人）

県	逮捕	防止
Cottbus	30	288
Dresden	119	761
Erfurt	220	60
Frankfurt (Oder)	113	199
Gera	29	154
Halle	24	24
K-M-Stadt	110	156
Leipzig	32	32
Magdeburg	60	217
Neubrand-enburg	95	89
Potsdam	200	529
Rostock	174	105
Schwerin	119	45
Suhl	67	57
Wismut	4	4
合計	1,396	2,720

（注）原表の県をアルファベット順に並べ替えた。原表に時期表記がないが、「防止」2720 人は本文（Bl.1）に「1973 年 6 月 28 日まで」とあるので、この表の時期も同じと考えられる。県ではないWismut 支部もあるのは、当時同支部はウラン鉱山があるため県支部扱いであったからである。（出所）HA IX 5355:Bl.3.

シュタジ第 IX 局（刑事警察担当）の祭典開幕 1 ヵ月前 6 月 28 日までについての報告（HA IX 5355:Bl.1）によると、東ベルリン以外の全国各地の「2720 人の否定的ないし反社会的人物、前科のある人物並びに特に危険な違法犯」を、祭典期間の東ベルリン行き禁止とした。そのうち 1400 人が祭典期間の東ベルリン行きを意図していた。

このうち「2720 人」の県別数字が、同報告の付表である**表 3** の「防止」（Verhinderung）だと見られる。

同報告には、同じく 6 月 28 日までに東ベルリンと隣接 2 県の「反社会的活動撲滅」のための「特別措置」によって 2073 人を逮捕し有罪にしたとあるが、内訳として「ベルリン 1460、ポツダム県 409、フランクフルト県 244 人」ともあり、その合計は 2113 人である。

さらに、800 人をベルリンから退去させ「ベルリン滞在制限」に処し、〔監視のために〕そのことを退去先の各人民警察県本部に通知した。

これらの措置は、ベルリンとその周辺の浄化であって、祭典に行こうとしているかどうかとは関連づけられていない。

浄化措置はベルリンと周辺だけに留まらなかった。「刑法に触れるか、その恐れのある若者と若い成人の偵察のための具体的な措置」が全県で導入された。例としてハレ県が挙げられ、該当する「60 の犯罪グループの解体」のために 145 件の捜査手続きを導入して 220 人を捜査し、うち 125 人を逮捕した。

同報告は、経験から「否定的人物」への祭典対策として「以下の方法が目的に合っていると証明された」と言う：

・親権者・国家機関・社会組織〔学校、企業、FDJ など〕の協力の下に彼らと「予防的協議」を行ない、ベルリン行き断念を文書で誓約させる。

・人民警察法第 11 条〔「法的規定の実現、危険予防、妨害除去」〕によるコントロール措置の導入。

・ベルリン禁止を命ずること。

〔以上 3 項目の例は **10.1 節**にある。〕

・刑法 249 条の「断固たる」適用と即決有罪判決。

加えて同報告によると、ベルリン人民警察本部は隣接両県人民警察本部と連携して、「コントロール措置強化による否定的人物のベルリン入りの防止のための措置」を導入し、「否定的人物の連行と収容、送還のための措置」を定めることになっていた。

Ochs（2003）によると、ベルリンへの旅行防止のために 7 月 28 日までにコントロール下に置かれた青年は「約 3 万人」であった（原資料 MfS HA IX 5354: Bl.20）。

だが、同じシュタジ文書の別のページ（HA IX 5354:Bl. 19）とそこからの計算によると、東ベルリン以外の全県で、祭典準備期間から祭典終了日までに、祭典期間に東ベルリンへ行かないように〔警察が〕「会話」した「犯罪者および犯罪の恐れのある人物」は 23532 人であった[38]。そのうち 56%は 7 月 13 日までに（いつからか記載なし）、その後開幕までに 28%であり（合計 21935 人）、祭典期間は 7%にすぎなかった。

有罪にすることができない者の一部は強制収容された。祭典準備・実施期間に全国で精神病院に 604、少年院に 978、特別養護施設に 1473、合計 3055 人が強制収容され、うち 96%はすでに開幕前に収容された（HA IX 5354: Bl.21 による**表 4**（本稿末尾））。

[38] Wesenberg（2003:658）には「独自の数字」として、「26728 人が刑事警察局によって祭典前と祭典期間に“統制下”に置かれた」とある。なお Ochs が利用した Bl.20 を未入手である。

Wolle (2013:216) には 1973 年 1 月 1 日～同年 7 月 23 日の強制収容数合計 2332 人とある（原資料 MfS HA IX 5353）。しかし HA IX 5354（Bl.21）では同期間の合計は 2710 人である（**表 4**）。この差は恐らく統計作成時点の違いによるだろう。前者は 7 月 24 日、後者は祭典終了後の作成である。

上記 Wolle が引用する HA IX 5353 の統計の注目すべき点は、精神病院など 3 施設のほかに HWG 女性収容施設もあることである。そこに 53 人が収容された。HWG は「頻繁に取り替える性交渉」の略語で、売春婦を指す。HA IX 5354 には HWG という項目はなく、特別養護施設に含まれたのだろう。

Wolle（2013:216）には、1973 年 1 月 1 日－7 月 23 日に、コントロール下に置かれた者 25927 人、「国家的コントロール措置」が取られた者 2982 人、テント設置許可取り消し 327 人、一時的に身分証明書取り上げ 637 人〔**10.1 節**の Mi がその一人〕、バカンス禁止 574 人、その他の措置（住居・宿舎の監視、付き添い追加、東ベルリン滞在制限）2577 人ともある。

Bickelhaupt（2013）は、ベルリン行き禁止や監視、「バカンス場所」への収容などの予防措置のために「全国で約 2 万人のシュタジ」も、〔警察に協力して〕その任に当たるように動員されたと言う。

既述のように公式行事の平穏はほぼ確保されたが、それはシュタジによる数万の青年への予防措置および祭典現場での目に見えない介入に支えられた。

広場や通り、95 の舞台などには若者の自由が実在し、五十数万もの東独青年がそれを謳歌した。同時に、数万の青年が強圧的予防措置の犠牲を体験した。両者とも祭典後故郷で互いに、あるいは学校、職場、家族などで語り合い、それが潜在的な歴史原動力になったにちがいない。

彼らは 16 年後、1989 年に 30 代ないし 40 代として、東独社会の最も活動的な世代となるからである。

予防措置の体験例を描いたクンツェの「元素」を次節で紹介するが、上記のように、もっとひどい目にあった東独青年も多い。

10. 作家クンツェの「元素」と「残響」：予防措置と事後

Kunze（1976、邦訳『素晴らしい歳月』）は、東西ドイツ両方で人気だった東独の詩人・作家クンツェの作品である[39]。

本書は、著者が「何百人もの若者たちとの数年に及ぶ対話」をもとに、1976 年に西独で出版した（訳者あとがき:172）。著者は 1977 年西独移住を余儀なくされた[40]。

私の手元にある本書の 1977 年重版には「169.-188. Tausend」とあり、すでに 18.8 万部も発行された。

本書の中の「元素」（Element、邦訳表題は「分子」）と「残響」（Nachhall）が祭典にまつわる話しである。「残響」は Mählert（1996）にも収録された。

「元素」の主人公は祭典期間の東ベルリンへ行こうとしていると誤解されて散々な目に遭う。シュタジの記録では、同様の被害に遭った東独青年は**表 3**（防止）のとおりである。

10.1 「元素」（Element）

> Kunze（1976:124, 訳 57）によると、これは「まったくの事実にもとづいて」いる。
>
> 原文表題「Element」は、英語の場合と同様に、元素や要素などのほか、「反社会的分子」などの分子に当たる意味（集団ないしその構成員）もある。化学の「分子」は別の単語（Molekel または Molekül）である。邦訳は元素と分子に訳し分けた。文学的にはそうかもしれないが、ここではすべて元素と訳す。
>
> というのは、クンツェがこの言葉を表題にしたのは、メンデレーエフの周期律絡みだからである。表題は、主人公ミヒャエル（Michael、以下 Mi）を、公民科目の女性教師が、「メンデレーエフの周期律では予見されていなく、かつ「“不確かな”という形容詞によってより詳しく規定される元素（Element）の 1 つとして分類し始めた」ことに由来する（Kunze 1976:38f., 訳 52、訳文は一部変更）。

Mi は、レッシンク・メダル[41]を受けたほどに成績優秀な生徒であったが、「論理的に考えること」を貫いて教師への抗弁が多いため、教師との折り合いが良くなかった。

祭典に先立って、Mi が見習いとして職業教育を受けている工場を「私服の紳士」[42]〔シュタジ〕が訪れ、Mi に、祭典期間に首都〔東ベルリン〕に立ち入らないことを誓約しますという文書への署名を求めた。

〔これも以下もシュタジ第 IX 局報告（HA IX 5355）の「目的に合っていると証明された」方法（**9.3 節**）の実践である。なお、東独の職業教育にはわずかながら大学進学コースもあった（末尾の**図 13** 参照）。〕

Mi は懸命に〔邦訳 1.5 ページにわたって〕、「論理的」抵抗を続けたが、「誰がなにをすべきかということは、この国では労働者と農民が権力を握っているという事実からのみ生じるのだと紳士は言った。だからわるいことは言わない、ことを荒立てないのが身のためだよ」と脅されて署名した。

Mi はすぐ休暇に入る予定であり、タトラ山地へ行くつもりだった。それを妨害されることを恐れたための署名であった。

しかし結果的には妨害された。というのは「休暇のはじまる2日前になって、彼は身分証明書を取り上げられ、代わりに仮身分証明書を渡された」からである。仮身分証明書では出国不可能であった。

〔タトラのあるチェコスロバキア・ポーランドと東独の間

---

39 シュタジのクンツェ対策は Kunze（1990）にあり、その邦訳に詳しい解説がある。

40 訳者によると、「70 年代になって東ドイツの文化政策がわずかながら緩和のきざしを見せたころ、クンツェの詩はようやく国内で“Brief mit blauem Siegel”という題名の選集として出版されたが（73 年）、このときには 15000 の初版が数時間で売り切れ、同部数の第二版も同様で、彼の詩の朗読会は熱烈な若い支持者たちであふれた」。Kunze（1976）は「東ドイツの著作権事務所の正式の認可」のもとに西独で出版された。しかし 1976 年 11 月に東独作家同盟が彼を除名処分にし、「このすぐあと」ビアマン追放となった（Kunze 1976:訳 177）。ビアマン追放は本稿 9.2 参照。

41 Lessing-Madaille。戦後東独領となったザクセン出身のレッシンク（Gotthold Ephraim Lessing、18 世紀の詩人・啓蒙思想家）を記念して、卒業試験が特に優秀な生徒に贈られたメダル。

42 邦訳では「平服」とあるが、原文の「Zivil」は制服に対する言葉なので私服とした。シュタジはしばしば私服（ジーンズ、スーツ、革ジャン・ジャケットなど）で出動した（**図 12**）。

では旅券・ビザなしに身分証明書だけでの通行が可能であった（前者は1972年1月1日、後者は同15日から）。これにより東独からの逃亡ルートが特に前者経由に移動した（Tantzscher 1998:11）。私が利用した東独東南端のごく小さな対チェコ国境検問所では近隣の両国市民が自転車で往来していた。〕

代わりの休暇先に東独のバルト海岸を選び、Z 市から列車とヒッチハイクで行くことにした。途中、ヒッチハイクのために降りた K 駅プラットフォームで鉄道警察の検問に引っかかり警察署へ。またもベルリンへ行かないと署名させられ、深夜解放された。すぐヒッチハイクしようとした同駅前路上でパトカーにつかまり留置された上、Z 市に戻された。

「留置所の雑居房」は祭典のための規制に引っかかった「ギターをもった若者ばかり」だった。

Z 市の警察署は、彼がベルリンへ行こうとして戻されたと理解し、バルト海行きだったと言う Mi に対して、「あなたが再度嘘をつくなら、私はあなたに、労働者・農民の権力とはどういうものか、しっかり思い知らせてやる！」と脅した上で Mi を釈放した。〔この警察官は Mi に敬称形を使った。〕

Mi は今度はベルリンに近づかずにバルト海へ行くために東独の東端にある F 市へ行き、そこからオーデル川（ポーランドとの国境の川）沿いに北上することにした。

F 駅前で 7 時半に落ち合って乗せて行くという、あるトラック運転手の好意に従い、駅へ行った。

駅前広場は FDJ の青シャツと青い旗で埋まっていた。祭典へ行く青年の集合であった。FDJ の「腕章をつけたリーダー（Ordner）」が、「君は 50 人組のどれかに属しているか」と聞き、Mi が「そう見えるか」と答えると、その整理係は鉄道警察官 2 人を連れてきた。〔祭典行きは 50 人ずつの団体編成だったようである。〕

祭典に行く団体に属していない Mi は鉄道警察官に連行され、Z 市まで戻らなくてもよいが、D 市まで戻れと命じられた。途中のどの駅にも犬を連れた警察官が警戒していた。

D 駅では 2 人の警察官が待っていて、話しが違って、Mi は Z 駅行きの列車に乗せられた。Z 駅の警察官が身分証明書を返し、「行っていいよ」と言った。Mi は「どこへ？」と訊いた。（以上 Kunze 1976:39-42, 訳 52-57 から。）

身分証明書が返却されたのは、祭典が終わったからだろうが、そういう記述はない。

いずれの検問でも仮身分証明書であることが災いした。というのは、そこには「見えないように “不確かな元素（Unsicheres Element）”と記されていた」（Kunze 1976: 40, 訳 54）からだと言う。

どのように「見えないように」（unsichtbar）記すのか分からないが、そうでなくても身分証明書を持たず仮身分証明書であること自体が「否定的人物」の証明であった。

以上の都市名のうち F 市は明らかにフランクフルト（オーデル）である。東独南東部に Z 市は幾つかあるが、文脈からツヴィカウであり、K 駅はカールマルクスシュタット、D 市はドレスデンだと推測する。

10.2「残響」（Nachhall）

「残響」（Kunze 1976:43f., 訳 58-59; Mählert 1996: 200）が伝える祭典終了 3 日後のアレキサンダー広場での出来事の要旨は、つぎのようであった（訳は一部変更、ここでも主人公の名はミヒャエル、以下 Mi）：

広場でギターを弾く若者たちにパトロールの警察官が、「ここでは演奏はまかりならん！おまえたちの時はもう終った、家へ帰れ」と言った。「掃き集められた若者たちが車で運ばれ」、広場は空っぽにされ、歩哨の警察官たちが「にわかに生えそろった木立ち」のように立っている。

〔広場の真ん中の〕噴水の「ふちに置いであった彼〔Mi〕のギターはもうない」「人質にとられた」。警察官が〔敬称形で〕、「あなたはギターを探していますか？一緒に来てください」と言った。

警察署で Mi は何人もと一緒に、通路の「壁に向き両手をあげて」立たされた。「靴をぬげ！すぐに靴をぬがないと、鼻づらをぶん殴るぞ、この拳の一撃はなまやさしいもんじゃないからな！」などと怒鳴られた。

一緒だったのは噴水の縁に腰掛けていた「見習いや、学校の生徒たち、年金生活者たち」で、演奏、特にハンガリー人の「弦から火花が散るかと思えるほど」のそれに拍手が送られた。

Mi は 10 マルクの秩序罰金決定を受け取るとともに、午前 3 時に楽器を返してもらった。その決定には、罪状として、「社会主義的共同生活の妨害（ギター演奏）」とあった[43]。

11. その後の評価

東独の体制転換と両独統一によって旧機密資料の利用が可能となった。それを勘案した評価をすこし紹介する。ライナーの回想（**5 節**）に似ているが、矮小化もある。

「DDR 青年反体制派」（Jugendopposition in der DDR）というウェブサイト[44]は、連邦政治教育センター（bpb）の支援のもとハーベマン協会（Robert-Havemann-Gesellschaft e.V.）[45]が運営している。同協会は大量の反体制派発行物を収集し閲覧に供するとともに、頻繁にシンポジウムほかの企画を開催している。

このサイトには現在次のようにある：

東独当局は、この祭典を通じて、「リベラルで世界に開かれた国というイメージを国際世論に伝え」ようとした。「町中のどの通り・広場も華やかな行事に彩られ、90 以上〔95〕の舞台で」政治的な歌からビート・ロック音楽まで響き渡り、東独の若者たちにとって、「世界の、とりわけ西側の同年配の若者との意見交換のまたとない機会」となった。「彼らは普段あり得ない自由を満喫したが、その自由は世界祭典の終了とともに無くなった」（jugendopposition.de 2019）。

Ohse（2003:353ff.）の評価は、その祭典に関する節のタイトル「“ショーウィンドウ催し”：世界祭典の輝きの中の DDR」に現れている。次のように評する：

「全体として、少なくとも短期的には、肯定的な全体

[43] 邦訳には罰金「10 マルク以上」とある。それでは Mi は幾ら払うべきか分からず、原文も規定もそうではない。東独の秩序罰（Ordnungsstraf）の罰金は重大さに応じて軽微から順に 1、3、5、10, 300, 500 マルク、「例外的に 1000 マルクまで」であった（山田 1982:28）。10 マルクは軽い違反の中では最高額であった。

[44] https://www.jugendopposition.de/

[45] 何度か資料閲覧に訪れたが、いかにも有志が支える民間施設である。他方公的施設である BStU では最新の第 13 回活動報告によると、約 1600 人が従事する（最大は 1994 年 3075 人）。

印象が支配的であった」。その原因は、

・「感動的な文化行事（東ベルリンでは毎日 95 のバンド舞台とディスコが雰囲気を盛り上げた）」[46]、
・「青年たちの典型的な行動様式（公園は突然寝場所として妨害なく利用され得た）」の許容、
・「飲食店のいつもと違うサービス（そのアソートメントはほぼ無限のように思われた）」〔**図 4** 参照〕、
・〔ライナー回想のように〕「“君の友人かつ支援者”として振る舞った保安関係者〔この場合は警察官（制服）〕の友好的態度」、
・加えて「働きに行く必要がなく、たぶんオレンジかバナナが入った素敵な給食袋をもらえた」という〔代表や祭典協力者の〕特典、であった。

「こうしたこだわりのなさと小さな特典（とりわけ労働免除と南方果物の供給）ゆえに世界祭典に伴った諸困難が大目に見られ得た」。

〔Ohse のこのよう評価は、ライナー回想を読み評価したにもかかわらず、軽薄である。〕

東独参加者にとっては、祭典の「オープンな雰囲気」ゆえに、〔ウルプリヒトから奪権したばかりの〕「ホーネッカーに寄せられ、〔西独との〕基本条約によって新たな糧を得た最初の諸希望が実現したと思われた」。

しかも祭典中にウルプリヒトが死去したにもかかわらず祭典が「平然と継続された」ことが、時代変化の「象徴と理解されたに違いなかった。しかしこの希望のうち第 10 回世界祭典後に残ったものはほとんどなかった」、「ライナーが思い出すように、すでに青年祭典数日後に日常と単調さが訪れた」。

この引用の末尾によればライナーの回想では「祭典数日（wenige Tage）後」に「希望」は消え失せたことになっている。しかしライナーの回想に「祭典数日後」という言葉はない。**5 節**においてアンダーラインで強調したように、彼にとって、祭典体験が「幻想」と分かったのは祭典の「2 年後」である。繰り返すが、それは 1975 年のことである。

Ohse（2003:353ff.）によると、祭典における出会いと議論の「開放性」への参加者自身の評価は「非常に意見が分かれた」：

「西独人はベルリンのオープンな雰囲気に感動した。それは彼らの目には予想外であった」。同時に「東独青年の DDR への支持表明とこの国家〔=東独〕の一定の“”成果”との一体化」に驚いた。西独人はシュタジによるコントロールがあり得るとは考えていなかった。

西独カトリック代表団の 1 人が言うには、「アレキサンダー広場でのしばしば非常に熱い議論」に妨害はなかったし、「個別事例に留まるだけではなく、原則的な立場も議論することができたことは喜ばしかった」。議論の中では、東独での「移住の自由や言論の自由」の欠如を批判し、西独のことを知ろうとする FDJ 団員さえも、「自国の成果の自覚」が見られた。

東独青年のこうした支持表明は〔Ohse の評価では〕、東独当局による代表への事前講習の結果であるだけではなく、西独側の「偏向報道」や西独人による「十把一絡げの判断」への反発としての「ふるさと感情」の発露でもあった。「これは全く典型的な反応であった」と言う。

「オープン」とはいえ、いつものように西ベルリンへの国境は閉じられ、「出会いは非常にコントロールされていた」との感想が、東独代表の中にもあった。また外国代表に敵意を示す者、祭典による住民負担に反発する者もいた。

また実際には、〔セミナーなど〕「祭典の公式催しは厳しくコントロールされていた」。席の主要部分は「進歩勢力」が占め、対立する立場の議論は望まれず、対話はしばしば十分には実現しなかった。

例えば「信者フォーラム」では、西独の福音青年団（AEJ）〔プロテスタント〕やカトリック青年団（BDKJ）の代表はセミナー入場券を「激しい抗議のあとにようやく」を受け取ったが、カトリック青年団議長に与えられた演説時間は「たった 3 分間」であった。この催しは終日続けられたにもかかわらずであった。〔上記のセミナー「信心深い青年と平和・社会進歩へのその関与」のことだろう。〕

〔西独野党 CDU 系の〕JU のアレキサンダー広場での活動は、シュタジの記録によると、シュタジの強力な配置によって妨害され中和された。

トロツキスト的および毛沢東主義的諸組織のチラシには東独青年たち自身が拒否反応を示した。

東独内での祭典批判は「途方もない支出に比べれば、わずか」であった。「無理をしているのではないか」とか住民への供給不足の不安などがあった（SED カールマルクスシュタット指導部報告）が、他方で、「巨額の支出に感心した」者もいた。

12. 両独・ソ連の関係者と東独記者の 31 年後の回想

bpb（2004, 2004a）は連邦政治教育センター（bpb）が祭典について 2004 年に収集した合計 22 人のインタビュー集である。以下にはそのうちの若干を紹介するが、紹介は要旨ではなく抜粋である。

●フォイクト（Karsten Voigt、西独・男、当時 Jusos 議長代理）：

雰囲気は非常に緩やかだった。関心の的は第三世界からの人たちであった。

祭典で議論した人々や、アレキサンダー広場などで私からチラシを受け取った人々、私に「彼らがチラシの拾い集め係だ」と教えてくれた人々と体制転換後に会った。

〔西側への〕旅行の自由がなく、第三世界へも行けない東独青年にとって、祭典は「日常では体験し得ない世界」であった。

祭典は東独の見方でも我々の見方でもアンビバレントであったし、私の今の見方でもそうである。

●ディートリッヒ（Gerd Dietrich、東独・男、歴史家、当時 28 才）〔当時 SED 付属マルクス・レーニン主義研究所の現代史研究員、体制転換後フンボルト大教員、Dietrich

[46] FDJ 中央評議会書記局は 1971 年 6 月 3 日に文化プログラムについて「文化のすべての分野で社会主義芸術が印象深く代表されることが目指されるべき」とし、「階級的に訴える力」を重視していた（Mählert 1996:196）。しかしロック、ギター、ディスコに圧倒された。

2003 著者〕:

（bpb の前書き:雰囲気は陽気で、率直であったが、DDR の日常の常である監視が感じられ得たと彼は言う。）

「最も興味深くかつ最も重要であったのは」ベルリン市内を「相対的に」自由に動くことができたことだった[47]。

毎日午後と夜、中心部じゅうを歩いてとりわけ西独青年と接触、会話し、Jusos や西独労組の青年と我々はしばしば歓談した。

「もちろん時々、青シャツの年上の男たちや、いつもは制服を着ているとすぐ分かる奇妙な私服〔青シャツ〕の人間たち〔**図 12** はいつもの私服のシュタジ〕も大量に周りを歩いていた」が、「それはもちろん DDR 時代には周知のことであった。それはベルリンのどんな大きな催しでもそうだった」。

「しかし自分の経験では実際に相対的にオープンで率直なものであった」[48]。

図 12 祭典と異なり「奇妙」でない私服のシュタジ

（注）「いつもは制服を着ているとすぐ分かる」私服シュタジ。カメラを凝視する真ん中付近の 2 人ほか。目つきと動作、横柄な態度で一目瞭然。彼らは 5 月 8 日の「解放」（東独ではソ連の対独戦勝=解放）記念行事舞台の準備を警備（東ベルリンのカール・マルクス・アレー）。顔つきと服装とカメラから私を「西側外国人（日本人!?）」と識別したのだろう。撮影禁止表示はなく何も言われなかったが、彼らは習性を発揮した。祭典での彼らの私服は青シャツだったので「奇妙」に見られた。祭典では粗暴さを隠したが、彼らの粗暴な行動が再三記録された。中国「国保」の私服も同類。（出所）1981 年 5 月 7 日撮影。©Kunihiko AOKI

●メルケル（Ina Merkel、東独・女、文化研究者、当時東ベルリン在住の 16 才、組織と無関係に出かけた）。〔彼女が前年に書いた Merkel（2003）は、ほかに見られない分析的内容であり、**13 節**に紹介する。〕

ホーネッカーがアレキサンダー広場の様子を見に来たが、「目に見える護衛なし」だった。〔青シャツを着たシュタジが「目に見えない」護衛をしていたのではないかと思う。〕

可能なあらゆることが許された。夜中まで、あるいは朝まで青年たちが円く座り、ギターを弾いたりした。夜と昼が取り替えられた。そうしたことはそれまでは DDR の諸関係にとって考え得ないことであった。

〔ホーネッカーは、「他の同志たち」とともに 8 月 3 日午後にアレキサンダー広場に出向き「あっという間に」若者に囲まれ、テレビ塔の連帯センターでは「ソンミの虐殺〔1968 年〕のたった一人の生き残り」の少女からベトナム連帯への感謝の言葉が送られた（Honecker 1980:333, 訳 391）。その場面の写真もある（同:330、邦訳には見当たらない）。但しソンミ生存者は 11 人だそうだ（朝日新聞 2001）。〕

●レキシン（Manfred Rexin、西ベルリン・男、ジャーナリスト、当時西独第 2 公共テレビ ZDF 西ベルリン編集部勤務）〔Rexin（1973; 同 a）の筆者（**6 節**参照）。〕

（bpb のまえがき:レキシンは ZDF のためにこの祭典を報道し、彼は祭典に感動した。彼は〔西側〕ジャーナリストとして初めて東ベルリンを自由に動き、妨害なしにインタビューし、東独の「生活の信頼できる像」を手に入れた。しかしその時生じた「希望はすぐあとに再び裏切られた」。）

ZDF には東ベルリン・ビューローがなかったので、ZDF 西ベルリンが DDR についての特別番組を制作し、それがきっかけになって、「Kennzeichen D」（国籍標識 D）[49]というシリーズ番組が〔1971 年に〕生まれた。

祭典期間に我々は初めて具体例によって、「ここ〔東独〕で見るものをかなり正しくかつリアリスティックに描写することができるか」を検証し、成功した。

その際もちろん「激しい対立」もあった。例えば〔プレスカードの不足による公式催しへの〕入場制限である。

また西独代表のチラシは押収はされなかったが、「拾い集める試み」が繰り返された。青シャツの「多くの若者」やそれ以外の者も、「自由が節度の無さにならないように」走り回っていた。

西独青年は祭典期間に「DDR に特有の抑圧の経験もした」。すなわち、〔当局にとって問題のある〕「青年たちが東ベルリンから追い出されていること」を知った。

「そうした制限や時々の圧力にもかかわらず」、祭典の日々は、1950 年代や壁建設後に我々が東ベルリンで体験した様子とは異なり、「覚醒と大きな変化の中にある DDR」の体験であり、「それに期待がかけられていた」。しかし「残念ながらむなしかった！」。

●グラチョフ（Andrej A. Gratchev、ロシア・男、1967-72 年世界民主青年連盟副会長、1992 年からモスクワの世界経済国際関係研究所研究員）

（bpb のまえがき:諸共産党指導部は、「この祭典期間に敢えてより多くの開放を実行した」。なぜなら、彼らの体制は、ベトナムでの米国の敗北のあとでは、傷つけられ得ないと考えたからである。グラチョフ博士は、彼らが「この立場から」

[47] 私的体験（1980 年以後）では、ソ連と異なり、軍事・国境施設や企業など日本でも同様に立ち入り制限がある所以外は東ベルリン市内はもちろん、全国を自由に移動可能であった。

[48] ディートリッヒ発言と後述のノイバート発言の一部が Bickelhaupt (2013)にも載っているが、出典は書かれていない。

[49] ヨーロッパはどの国でも諸外国の車が入り乱れて走るので、当時はナンバープレートとは別に車の所属国を表示していた。西独は「D」、東独は「DDR」、日本は「J」、ポーランドは「PL」などであり、韓国は「ROK」だが、北朝鮮は「目下国籍標識が知られていない国」の 1 つであった（Deutsche Shell 1981）。ポルトガルは「P」だったが、その後「PO」になった。私は VW のパサートの乗っていたが、東ベルリンナンバーなので「DDR」表示だった。だから西ではきっといたずらされると東でも西でも言われたが、経験しなかった。オーストリアの「スカイライン」では、車が日本国籍なら無料だが、人が日本国籍でも車が「DDR」では有料だった。他方東独で交通警察に捕まった際は、非社会主義国の運転手でも東独ナンバーなので東独市民と同じ罰金（低額）であった。

祭典を「第三世界とのより強い結び付きを結ぶための手段」としたと見ている。）

1973 年祭典は「基本的に第三世界に向けられていた」。そこから多くの参加者やアラファトを迎え、「そうして共産主義諸国はこの世界祭典によって第三世界との一種の戦略的結び付きを結ぼうと試みた」。

「本来すべての祭典」の「意義の大部分は、左翼共産主義思想を青年たちに宣伝することにあった」。この点で 1973 年祭典においては「西独青年の来訪」が特別の意義を持った。

東独指導部もソ連も「当時は、この祭典が共産主義の基礎上でのドイツ統一のための基盤を準備したという印象を持った」。しかしこれは「個別の事例」であったわけではなく、当時「共産主義の指導勢力」は「いわば“全般的な近視眼”」状態にあった。

「モスクワや他の共産主義諸国の幹部たち」は世界情勢を、共産主義諸国は「進撃中」であり、他方「米国はベトナム〔やチリ〕での敗北のあとその地位を失った、第三世界は米国孤立化のためにソ連に協力するだろう」と評価していた。

「この評価がベルリンでの世界祭典によって確認されるつもりであった」。

当時は、「共産主義体制に弱みはなく、外部世界に対する開放は危険ではないと信じられていた」。

〔現にホーネッカーはこの当時至る所で、世界における「社会主義の前進」（Honecker 1975a）。〕

「けれども、体制開放への願望が非常に急速に広がり、それはまさしく伝染性があることが明らかになった。当然住民が色々な理由から西側の人間と親しくしようとしたし、隔離から脱出しようとした」。

西側志向の「最も重要な理由」は経済面であり、西側は「花盛りの豊かさの例」であり、同じ生活水準が求められた。

〔実際には逆に、まもなく到来する石油危機とソ連の農業危機がヨーロッパ共産圏を経済的危機に陥れた。〕

「かくしてこの祭典後に、もはやイデオロギーに影響されない新しい青年世代が発生した」。〔これも一種の「祭典世代」発生論である（メルケルの言うそれは **13 節**参照）〕。

●ノイバート（Erhart Neubert、東独・男、牧師・宗教社会学者・市民権運動家、Neubert (1998)などの著者）

（bpb のまえがき：ノイバート博士は 33 才の時に世界祭典に参加し、当時ワイマールの学生牧師であった彼は、他の者とともに、ベルリンの聖母マリア教会に、誰にでもオープンの「会話拠点」を設置した。）[50]

青年牧師のグループとして参加し、教会が祭典期間に提供する色々な他の催しと並んで、聖母マリア教会の中に会話拠点を設置し、FDJ も、DDR の異論派も、また外国人も、西独人も、すべての参加者が自由に使えるようにした。

「教会の DDR 市民として常にそうであるように」慎重に行動しつつ、我々も〔東独において〕、「我々がどこでうまくいっていて、どこではそうでないか」について「真実」を話したかった。我々にとって問題は、「まさに 1970 年代初めに信仰の自由、とりわけ青年におけるそれが制限されていたこと」であり、「それを我々も隠さなかった」[51]。

「我々は部分的に当時まだ西に対して批判的でもあったし、自由選挙によって社会主義政権になったチリに感動していた」。「我々はもちろんこのことを裏返しにして、我々のところでも自由選挙が行なわれねばならない、と言った」。

祭典期間は国家側が教会との仕切りを非常に低くしたことに我々は気付いた。第三世界には多くのキリスト教徒がいるから、「社会主義の中でいかにして我々〔国家〕は教会とオープンかつ自由に付き合っているか」を示したかった。これは「我々にとってのチャンス」でもありそれを利用したが、「それは〔東独の〕日常ではなかった」。

〔教会にとって〕「日常は本質的により厳しかった。我々ができた唯一のことは、少し雰囲気を改善し、少し自負心を示すことであった」。すなわち「ともかく勇気を持って自分を信じ、すぐにはひるまないなら、DDR でもキリスト教徒でいることができる」、と。

「我々はやはり少し陶酔していて、おそらくすこし世界祭典の中に美しいものをあまりに多く見過ぎた。しかし、一度少々 DDR のバカンスだったということは本当だった」。

●ヴォレ（Stefan Wolle、東独・男、歴史家、Wolle (2013) など著作多数）

（bpb のまえがき：彼は 1973 年にフンボルト大学に復学し、世界祭典の際には「舞台装置」（Kulisse）として参加した。他の FDJ 団員と共同で、彼は主に西独からの参加者との討論〔への対策〕を要求された。）〔「舞台装置」は当局の都合への誘導役の意味。〕

「私は当時フンボルト大学の学生だったが、非常にきわどい状況にあった」。「少し前にイデオロギー的困難ゆえに」同大学を放校され、「まさに世界祭典が始まった時」に戻ったばかりであった。

〔ヴォレが〕「はめ込まれた」グループはある学校に集められた。電話で指示が来ると、「舞台装置が必要なところ」、すなわち「焦点が議論になる」とか、西独人が登場するところなどに送り込まれた。

「舞台装置」役の FDJ 団員は「100 人あるいは 500 人あるいは 1000 人」で、送り込みは「すいすいすいと進行した」。

〔そうではあっても〕「それは興味深い日々だった。我々はこの国際的な営みを非常にエンジョイし、そしてそれはもはや誰によっても 100%のコントロールはされ得なかった。FDJ 指導部によっても、シュタジによってもである」。

「私は当時多くのことを全く初めて知った」。例えば「イランの学生たちとの長い時間の、興味深い議論」からイランで起こっていることを知った。「それはまさに視野を広げる機会だった」。

---

[50] ノイバートは牧師の家庭に 1940 年生まれ、当時すでに 30 代。イェーナ大学で神学を勉強、ワイマール近くの教会牧師兼ワイマールの学生牧師。ハーベマンに影響された「色々な非公式サークル」に参加した（Müller-Enbergs 2010:941）。

[51] 祭典の 5 年後（1978 年 3 月 6 日）に、ホーネッカーと東独福音教会指導部議長シェーンヘル（Albrecht Schönherr）による政教首脳会談があり、ホーネッカーによると、そこでシェーンヘルが「教会は自らを，社会主義社会と並ぶものでもそれに反対するものでもなく，社会主義の中の教会として理解するのであって，教会は西側のトロイの木馬であってはならないと言明した」（1988 年 3 月 3 日福音監督・福音教会指導部会議議長ライヒとの会談についての SED の記録 DY 30/J IV 2/2/2263）。これが東独における党・政府と教会の折り合いとなったが、種々軋轢は続き、シュタジは教会幹部を IM 引き入れる工作を継続した。

「全体としてホーネッカーの最初の年々」、つまり「ほぼ 1971 年〔3 月奪権〕と 1976 年〔11 月ビアマン追放〕の間の時期」は、「確かに SED 指導部と住民の間の相対的に最大の一致の時期であった。人々は日常の小さな自由を喜んで受け入れた」。しかし人々は自由を「もう少し沢山欲しい」と言った。だから国家には「非常ブレーキ」が必要となり、ビアマン追放となった。

（以上 bpb 2004; 2004a）

東独国営通信社 AND の編集長代理やホーネッカー番記者を務めたタウバート（Taubert 2008:127ff.）の回想の書名は『脚注世代』である。これは著名な作家ハイム（Stefan Heym）の東独崩壊時の言葉「DDR からは世界史における脚注 1 つのほか何も残らない」に由来する。その中の「見せかけの自由」には次のようにある（抜粋）：

・「訪問客たちに対して DDR は世界に開かれたふりをした」。

・地方の「怪しげな青年」は厳重にベルリン禁止、首都の「反抗的な青年」は収容された。

・パレスチナ代表とイスラエル代表の同席を防ぎ、アラファトに感謝された。

・西独代表の Jusos 議長がベーベル広場で演説した時には、開始 1 時間前に広場は青シャツを着た「警察と軍とシュタジの保安要員約 6 万人」で埋まった。だから聴衆は「演説者の正当な批判」（例えば DDR 市民の旅行の自由の欠如）にも拍手しなかった。

〔これはベーベル広場で 8 月 3 日に開催された法廷「世界の青年は帝国主義を告発する」であろう。ミールケの命令 13/73 はこの「法廷」を、開・閉会式と 4 日の FDJ 大デモンストレーションとともに「政治的に重要な主要な催し」と位置づけ、シュタジの「集中的投入」と「調整された協力」を命じた（**9.1 節 9 項**）。だからシュタジ等が大動員されたことは間違いない。しかし「警察と軍とシュタジ」の「青シャツ 6 万人」は疑問である。一般警察は制服、軍は待機であり、シュタジと GST、下記警察機動隊総動員でも 3 万余であり、実際は他の職務もあって総動員は不可能だから、仮に「6 万人」が本当としても、過半は FDJ 自体だっただろう。〕

〔ベーベル広場は国立歌劇場の裏手にあり、ナチ焚書があった場所でもある。〕

・知人の「警察機動隊高位将校」によると、「世界の若者の混じっている彼の二・三千人の若い連中」は全員「同じモデルの半靴」を履いたので、私服〔たぶん青シャツ〕にもかかわらず「即座に識別」可能であった。

・8 月 1 日昼頃〔12:55（Taubert 2013）〕にウルブリヒトが死去したので、昼過ぎにテレビ塔周辺で〔青シャツの〕二・三人の反応を聞こうとしたが、死去を誰も知らなかった。おかしな質問する「私のシャツが青ではなかったので」、彼らは急いで 10 人組長に、10 人組長は 100 人組長に通報した。通報義務と通報ルートが徹底されていた。〔クンツェの言う 50 人組はない。〕

すると「ずんぐりした青年幹部」〔たぶん 100 人組長〕が問いただしに来たので、「私は〔近くの〕国家評議会の建物を指差した。そこには半旗が掲げられていた」。面食らったこの幹部は「上」に事実確認するために立ち去った。

13. 体制内少女メルケルの 30 年後の分析

イナ・メルケルによれば Merkel（2003）は、祭典 30 周年に際してベルリンの雑誌 Zitty に見られる過大評価と Wolle の過小評価を批判しつつ、自らの体験を基礎に祭典を考察した。だが批判は評価の大小にとどまらず、評価対象の選択にも向けられた。

Wolle は西独青年と東独青年のアレキサンダー広場での自由な議論を祭典の「特徴」とした（**3 節**参照）が、彼女は西独のことを良く知っている東独青年にとってそれは目新しいことではなかったと片付け、以下のように全く異なる見方を展開する。

その記述内容は他の関係文献とは大きく異なり、体制に同化していた少女が、その後得た研究者としての目で、通りや広場、教会などでの祭典の体験と風景に独自の描写と分析を加えた。回想内容は典拠なしの断言調であり、当時 16 才になったばかりの少女の実体験に拠っている。ただ、当時の感動が強いせいか、過大評価と思われる部分もある。

彼女は東ベルリン在住ゆえに「ベルリン禁止」の対象ではなく、また FDJ 団員であっても公式代表ではないので、おそらく入場券が必要な会場には入ることができず、通りと広場、教会の中などを全く自由気ままに走り回り、話の輪に加わったのだろう。

彼女の経歴が視点や判断に影響しているだろうし、16 才の時の記憶の 30 年後の再現には幾分美化またはその逆の可能性もある。

彼女は 1957 年 7 月 28 日、外交官の父と教員の母のもとに生まれた。要職にある党員の家庭に育ち、1976 年高校卒業試験（Abitur）合格後 1976～78 年に FDJ 機関紙「若い世界」（Junge Welt）で見習いをし、1977 年には SED に入党した。1978 年フンボルト大学美学・文化学部に進学し、大学院へ進み 1985 年博士論文「個人の社会化の性別特性」により博士号を取得し、続いて同大学助手になった。〔このようにエリートコースを歩んだ。〕東独末期には同大学の改革プロジェクト「民主的社会主義」に協力し、独立女性連盟（UFV）や独立社会主義党の設立に関わり、1989 年 12 月に SED を脱退した。その後米国に研究滞在（長期とも 1 年とも）、1999 年教授資格取得、2000 年からマールブルク大学民族誌・文化研究所教授（Müller-Enbergs 2010:872f.; DDR 1989/90. 後者には彼女の興味深い 2 つのインタビュー発言も所収）。現ドイツ首相メルケル（旧姓カスナー）とは無関係。

彼女は体制内優等生から体制内改革派になって東独終焉を迎えたことになる。

彼女は、祭典における「左翼抗議文化」、すなわち祭典において「熱狂的に称賛された」ところの「ゲバラ、マンデラ、デイヴィス、民族解放運動、チリ人民の選挙勝利」の役割を高く位置づけて、次のように記した：

> 祭典後にベルリンでは「世界祭典」（Weltfestspiele）が「世界ベッド遊び」（Weltbettspiele）と揶揄されたし、「ヒッピー化」が語られたが、「ヒッピーのイメージは部分的」に過ぎず、祭典の「決定的な青年文化的基準点」は左翼抗議文化にあった。

これが彼女の基本的な祭典評価である。なお、彼女にとってヒッピーも左翼抗議文化に含まれ、別の箇所では、祭典の「本来の魅力」である「左翼青年の抗議文化」として、「学生運動、ブラックパンサー、平和運動、ヒッピー等々」と

「民族解放運動」を挙げた。

彼女が言いたいことは冒頭の展開によく示されている。すなわち、一方で雑誌 Zitty による祭典の過大評価（「伝説的な」出来事、「神話」）を批判しつつ、同時に Wolle（1998〔Wolle 2013 の初版〕）が祭典における当局の「演出の側面」の効果を強調することに異を唱えた。

ここに言う「演出」は当局が「挑発的な人物を公然たる大騒ぎなしにすでにあらかじめ片付けていた」こと、つまり大規模な予防措置と、国内代表の事前訓練とを指す。

「演出」だとの「Wolle の〔祭典〕解釈」は、「路線に忠実な FDJ 団員」が全国から運ばれてきて、「食料袋と無料ビール」、「東のロック音楽」につられてホーネッカーを称賛したにすぎないという「推測を容易に引き起こさせる」ことになる、と彼女は批判した。

このような批判は Wolle にとっては遺憾だろうが、彼女にはそう読み取られた。祭典では「舞台装置」として働いた Wolle（上記）と、自由に走り回った彼女との体験の違いが評価に影響しただろう。

そこで彼女は Zitty と Wolle に対置して、祭典は諸手を挙げて賛美できるものではないが、さりとて単なる「演出」の産物ではないのであって、有意義な実体があったと断言し、その実体の中心を、「革命、蜂起、抗議のパトス」と「サブカルチャー的外見」（ロングヘアーとひげ、ワイルドな服装、自由な行動）の組み合わせに見た。

彼女にとって、祭典は「DDR 青年にとっての文化ショック体験」（Zitty）ではない。なぜなら「テレビやラジオ、映画、親戚、インターショップを通じて西のものは壁建設後もどこでも存在し、DDR 市民はいつも比較していた」からである。

そうではなく、「祭典への関心はむしろ、社会主義の考えに魅力を感じ DDR を友好的に見る西側の人間と知り合いになることができることであった」、「なぜなら〔西メディアや西の親戚が示す〕ネガティブなイメージには慣れていたが、ポジティブなイメージ」には接していなかったからだと言う。

彼女によれば、東独青年にとって祭典では、よく知っている西独人ではなく、他のヨーロッパやアフリカ、アジアの「外国文化や外国の生活様式の登場が驚きであり、強烈」であって、彼らと「明確な左翼世界観を共有した」。そこに存在した「世界観とイデオロギーの差異を越える反帝国主義のコンセンサス」が、祭典における「最もすばらしい経験」であった。

当時の東独の世相を彼女は、国家トップの交代と東独という国家の「承認の波」がもたらした「目覚めの雰囲気が特徴」であり、「外部への開放は当初内部での自由化を伴い、両要因から DDR 住民は変化への望みを手に入れることができた」と見る。しかしその期待がその後「度々裏切られ」た結果、「多くの人が DDR を見限る」ことになり、「終わりの始まり」となったと言う。

祭典は「政治的にも日常文化においても従来の諸関係との断絶をもたらさなかった」という意味で、「DDR の生活の転機を意味するものではなかった」けれども、「その体験は、参加した青年たちにとって政治的ないしサブカルチャー的イニシエーションを意味し得る新たな種類の経験」であった。「とりわけ、政治的、文化的に関心を持ち関与する用意があり理想像を持ち同時に自分たちの社会と批判的に向き合った青年のこの部分のことを以下では取り上げる」と言う。

おそらく彼女自身が「青年のこの部分」の 1 人であり、従って以下は自画像でもあるだろう。以下の紹介は抜粋かつ要約である。

a）論点：「2 つの思考の束」

「私は以下においてこれら〔=Zitty と Wolle〕の新解釈への批判から 2 つの思考の束を展開したい」：

(1) 「世界祭典の重要な機能の 1 つ」は、DDR の「対外プレゼンテーション」として「実際の開放」を実施したことであり、それによって「非常に多くの DDR 市民」が、外国人の「オータナティブの思考と生活の様式との生き生きとした出会い」という「もはや取り消され得ない経験」をした。

(2) 祭典の「第 2 の機能は、国家指導部の政策への青年の支持表明を手に入れ住民に見せること」であった。そのために「政治的文化の古いセレモニー（デモ）」と、「今風の青年文化（ロックフェスティバル）」を混合して成果があがり、それが「新しい催しタイプ」（「青年フェスティバル」）として継承された。「すでに祭典準備においてこれは、クラブやバンド、モード、音楽その他における青年固有の文化の展開を可能にする青年政策の転換点を意味した。このやりかたで従来政治的に禁欲的であった青年の部分が、少なくとも外的形態では、国家ドクトリンに統合され得た」。

b）外国からの参加者との関係

「振り返ってみて重要だと思われるのは、〔当時の東独における〕外国文化の殆ど完全な不在である。外国人のこのわずかな存在はすでに当時もむしろ遺憾に思われていた。DDR を訪問する外国人は自国の高い評価を意味した。だから彼らは喜んで迎えられた」。

「兄弟諸国」：東独の参加者は「少なくとも一度は直近の隣国ポーランドないしチェコスロバキアを訪問したことがあった」し、「ハンガリー、ブルガリア、ルーマニア、ユーゴスラビアまたはソ連への旅行は同様に」可能であった。

その際東独とこれら諸国の間では「類似の国家・経済構造にもかかわらず差異が目立った」。

「DDR はずっと清潔、組織的、規律があり、豊か。他方でこれら諸国はエキゾチックなもの：太陽、海、果物、民俗的なもの、もてなし、気楽さ、情熱、文化、歴史を提供すると思われた。世界祭典との関連ではとりわけポーランド人、チェコ人、ハンガリー人が、すでに何年来独自の青年文化を許可、振興していた点でも魅力的であった。クラコウやブダペスト、プラハにはジャズ・ケラーや生演奏付き飲み屋があった。ジーンズや T シャツは全く別としても、そこでビートルズやローリング・ストーンズのレコードを買うことができた」。

「第三世界」：「DDR 青年は若い民族国家に対して最良の反人種主義的良識を示した。幼稚園から連帯の行動様式を〔連帯バザーなどで〕練習した」。彼らはこれら諸国について「非政治的なこと、解放闘争や内乱あるいは政治的反乱に関係しないことはほとんど知らなかった」。

「DDR 青年のイメージでは」それら諸国は、バナナやオレンジ、パイナップルがあふれる国々という「エキゾチックな好みゆえではなく、冒険的な解放闘争ゆえに関心が持たれた」。彼らが「これら諸国を将来の旅行目的地として考慮する場合には、彼らは旅行の自由あるいはバカンスというカテゴリーにおいて考えるのではなく、ジャングルの中の闘士として、研究者または開発援助者としてであった」。

「西側」：「政治面では西独人は非常に不均質で、色々な方向に分散し、対立していた。彼らは世界祭典で互いに論争した、Jusos〔SPD 系青年団〕が若いリベラル〔当時 FDP

系の Judo〕に対して、キリスト教徒〔JU〕が共産主義者との対決に。それを知って驚かされたものだが、自分たちの問題とはごくわずかしか関係が無かった」。

「DDR 青年の遠いあこがれは西独をずっと越えて、フランス、イタリア、英国、スペイン、ギリシャ、カナダ、米国に向いていた。そのことは壁崩壊後の最初の旅行目的地からも明らかに読み取られる」。〔壁での最後の射殺となったギュフロイの願望も米国旅行であった（青木 2018c: 13,15）。〕

国内の「祭典参加者の最大グループ」が「1948～1958 年生まれ、当時 15～25 才」だとすると、彼らは 1961 年建設の壁の中で育ち、「すでに厳然とした自明のこととして壁と付き合い、彼らは社会人としての政治的自覚を 1960 年代末から 1970 年代初めまでに、つまり DDR が外交上承認された時期に経験した。そのことと、この方法でいつか連邦共和国〔=西独〕との国籍問題〔西独が東独国籍を認めていないという問題〕が解決しそれによって西への旅行ルートが開かれるという望みが結びついていた」。

ポーランド人、チェコ人、ハンガリー人がさきに西側への旅行を許された（但し相応の外貨持参が条件）が、東独人の「旅行可能性は展望としては、解放闘争によって第三世界の方向に、外交上の承認によって西側の方向にも拡大すると思われていた。世界祭典はそのために 1 つの兆候を示した。私の周辺の多くの人は、壁の問題は早かれ遅かれおのずから解決されるだろうということを確信していた。但し解決は再統一という意味ではなく国際法上の諸関係の正常化〔=西独による東独国籍の承認〕という意味であった。だから、政治指導部が努力した世界への開放性の示威は、DDR 住民、特に青年が分かち合った努力でもあった。〔指導部、住民、青年の〕諸利害はこの点で一致した」。

c）「左翼抗議文化」

祭典の「本来の魅力は左翼青年の抗議文化」、つまり「学生運動、ブラックパンサー、平和運動、ヒッピー等々」、および「民族解放運動」から発した。それらから「革命や蜂起または独立闘争のパトスが供給された」。

それを示すのは、「ベトナム人が熱狂的に歓迎され、初めて民主的方法で選挙勝利に成功した人としてチリ人が称賛され、キューバ人が熱愛され、アフリカ人が熱烈に歓迎された」ことであり、「英雄とはホーチミン、チェ・ゲバラ、アンジェラ・デイヴィス、サルバドーレ・アジェンデであった」。〔これはリップマンの観察（**7 節**）にも見られる。〕

「左翼反植民地主義的・反資本主義的抗議文化（闘争的、無政府主義的、熱狂的）のカリスマが第三世界から、世界の青年文化を介して DDR の中にまで放出され」、「DDR は左翼的諸抗議文化に舞台と熱狂した観客を提供した」。

〔ちょうど 1960 年代終わり頃、ウッドストック前後の西側の様子が数年遅れで伝染してきたかのようであるが、反政府、反体制ではなく、逆であったことになる。〕

祭典における外国人との出会いは諸民族の「差異ではなく、共通性の発見」の場となった。それは「共産党宣言が先頭に〔正しくは最後に〕掲げたスローガン“万国のプロレタリア団結せよ！”というパラダイムにぴったりかなっている。共産主義的ユートピアのこのパラダイム（DDR のドイツ語で言えば平和と諸国民友好）が世界祭典の期間の雰囲気を支配した」。〔この文章は全くの駄文。言うまでもなく共産党宣言のこのスローガンはユートピア・パラダイムでも平和・友好でもなく世界革命への決起の呼びかけである。〕

「私のテーゼでは、左翼抗議文化との出会いの中で DDR 青年は彼らの本来的な外国経験をし」、その結果「新しい形態の政治的議論文化が発生した」。「通りや青年クラブ、教会での自然発生的な議論－幾晩も続く論争を伴う知的刺激のある議論文化が展開された」ことが、「世界祭典の成功にとって決定的であった」。その際「重要なのは西独人との出会いだけではなく、とりわけ DDR 内の異論派〔となるだろう人々〕ないしキリスト教徒との出会いであった」。

また、「通りまたは教会が外国の議論相手を通じて自己の社会主義イメージについての討論の機会を提供した」。その結果は最近の雑誌 Zitty におけるレンフトの発言にある：「そしてそれ（革命）を我々は望んだし、我々は確信を持った社会主義者だったが、我々は民主的な社会主義、人間的な社会主義を望んだ」。〔レンフトは補注 2 参照〕

「以前および以後の儀式化された祭典」は「ふさわしい強いシンボルの欠如に苦しんだ」。しかしその欠如は「この世界祭典では問題ではなかった」。祭典のシンボルは「パレスチナのスカーフ〔カフィエ〕、ベトナムの制服〔軍服〕、チリの国旗、「象徴的人物」は、「ブラック・パンサーのメンバーで 1972 年 6 月 4 日に釈放された」デイヴィス、ゲバラ、「民主的方法で勝利に成功した」アジェンデであった。

「これらの国々の社会主義類似の社会形態への努力」は、「我々がすでにいるところに行こう」とするのだから、「いわば間接的に（退屈な）DDR の正しさを証明した」。

そこで、「予期せずに DDR 青年はユートピア的映像の焦点にいた：パラダイスとしてではなく、目指すに値する社会的オータナティブとしての DDR（平和、性的放蕩[52]、社会保障、職業教育と職業展望）」である。

〔ここに言う「社会的オータナティブ」は、「これらの国々」にとってのことである。メルケルの考えでは、東独青年にとってはレンフトが語った上記の社会主義がオータナティブであった。それは次の文章が示している。〕

と同時に、「DDR が違ったものになるチャンスもあった－これらの短い日々の間にはとにかく DDR はそれであった」。DDR 青年は「非常にオープンで自由だと思われる別の DDR の魅力を体験し」、他方、国家は「開かれたかつ自由な発言を認めることによって、世界祭典期間に言葉の最良の意味で世界への開放性を示した」。

d）祭典とロック音楽

政治的判断により従来「青年文化」の中で「ダンス音楽グループが繰り返し問題に直面したのに対して、歌声グループ運動は有利であった」。ところが「世界祭典では両者が初めて同時に並存して出演することができ」、「それによってロック音楽が、承認された人気のある娯楽形態に昇進した」。

〔ロック音楽は祭典出演によって人気が出たのではなく、その人気ゆえに「承認」レベルが高められた（**補注 2**）。〕

祭典では「毎日 21:00-01:00 に野外や飲食店、クラブハウスで約 100 のダンスパーティーが開催され」、「路上舞台では DDR 全国からの 200 コンボと 12 職業オーケストラ、

[52] 前年に東独は妊娠中絶を第 12 週まで合法化し（GBl I 1972. 03.15）、母体保護のためピルの無料配布に踏み切り、合わせて母子保護・助成措置を拡充した。学生寮でも通路がベビーカーで埋まった。その結果しばらくは出生数が急増したが、ほぼ 10 年後には再び減少に転じ、その間も一貫して人口減であった（**図 14**）。

23 アマチュアオーケストラが演奏した」。

だから「“赤いウッドストック”のレッテル」が貼られた。東独のバンドに加え、社会主義国からは東独でも人気の隣国の「オメガ」や「赤いギター」 ほか多数が、英国の「Middle of the Road」とオランダの「Mouth & McNeal」も出演した。

「祭典のフィナーレでは終了デモのあとに“青年のダンス通り”が開かれ、そこでは深夜遅くまで 30 の野外舞台で 50 の楽団、若干のソリスト、ダンスオーケストラ、合唱団、コメディアン、芸人、司会者が出演した。国家と青年とロックミュージシャンのアレンジメントはパーフェクトで、強力な文化プロパガンダ演出に見えた」。これらは無料であり、「押しかけた大群衆を興奮させ、深夜まで続いた」。

「舞台の周りでは公園のベンチや芝生の上で嬉々とした青年の生活が展開された」。その限りでは“赤いウッドストック”」が当たっているし、「DDR 青年が反資本主義的または反植民地主義的な意味で批判的」であったこともウッドストックに似ている。

しかし、「ウッドストックとの類似性はほんのわずかであった。青年祭典は非商業的催しであり、ドラッグなし、政治的要請あり」であったし、「DDR 青年は自国に反抗することは、少なくともこの公式の催しの間にはなかった」。〔ベトナム戦争の役割が、意味は違うが、共通であり、またウッドストックも会場フェンスが間に合わず無料=「非商業」となった。〕

祭典は「表向きでは政治化されていなかった」が、それは「純粋の音楽催しでもなかった。政治とロック音楽の結合は可能であっただけではなく、青年多数の同意も得て、のちに本格的に〔結合〕モデル」が形成された。そのために「国家・党指導部は当初は困難な自制のコストを払った」。

〔ロックは 1960 年代までの変遷を経て〕「1969/70 年には政策が徐々にこれらの〔青年の〕欲求に向きを変えた」[53]。

1970 年代初めに「有意義に自由時間を過ごす」可能性を調べた SED 中央委青年部は、その可能性が村でも都市中心部でも「いかに不十分かについて“驚愕”した」。

「青年たちは通りや広場にごろごろし、クラブや飲み屋をうろついていた」。そこで、「コントロールと統合の新しい構想の下に、青年ダンス催しを開き、ダンス音楽グループを振興することを目指すキャンペーンが展開された」。

〔ここに言う中央委青年部の文書は 1971 年 2 月の「青年の自由時間形成と自由時間分野における若い人々の教育の若干の諸問題について」であり、続いて行政機関（閣僚会議青年問題局や文化省）も同 3 月に対策措置を策定した（Rauhut 1993:281f.）。〕

ちょうどその時（1971 年）に祭典の準備が始まった。「この関連で青年クラブの数が目立って増やされ（1973 年だけで 1200 の青年クラブ新規オープン）、DDR ロック音楽もとりわけラジオによって」普及が図られた。

「祭典期間のロックフェスティバルによって、〔ロック〕音楽と政治の結合に基づく新しいタイプの青年祭りが創造された。この混合がモデルの形成になった」。〔政治的スローガンとロック、場合によりデモも組み合わせた〕そのモデルの典型例が「平和のためのロック」（Rock für den Frieden）シリーズ[54]であり、「青年の大群衆を引きつけた」。

「人気があり“青年にふさわしい”娯楽形態に政治的な出来事が埋め込まれた。それは、ロック音楽家が少なくとも国家・党指導部に対して忠実に振る舞うことを求めた」。こうして「ロックフェスティバルは党指導部と青年の一致のシンボリックなデモンストレーションに役立った」。

e）商業化

費用回収とプロパガンダのために、「祭典は広告戦略的にもプロフェッショナルに準備された」。

祭典のために「無数のズボトニク」（ボランティア労働）や、「自由意志での追加的な労働シフト」による寄付がなされた。その 1 つは、ベルリン・ヴァイセンゼー芸術大学の学生たち[55]による記念品向けデザインの考案であった。それが T シャツやスカーフなどとして販売された。

デザインは「政治的に中立的であり、DDR や FDJ のエンブレムやプロパガンダ言葉は断念された」。「T シャツは単純に祭典色〔**図 15**〕での色とりどりのストライプのみ」であったので、青シャツ嫌いの「多くの DDR 青年」はその代替品として活用した。記念品には「テレビ塔とブランデンブルク門」もあった。

図 15 祭典カラー（バッジの周り 5 色）

（出所）Wikimedia Commons: Fmje-10.jpg / CC-BY-SA 3.0

「これらの商業的提供はとりわけ想い出フェティッシュへの欲求を満足させた」。T シャツなどは記念サイン集めにも利用された。こうした「商業化の事実も注目に値する。DDR はそれによって共同性やイメージ、モードへの青年文化の欲求に応えた」。

f）カーニバル化

祭典では「DDR のカーニバル化」が生じ、「DDR は一種の閾状態（限界段階）にあった」。すなわち「一定の規則・習わしが無効にされ」、通りを走り回る、深夜まで公園で音楽を楽しむ、自分の考えを言ってよい、意見を闘わせてよい、という状態になった。

「通りは青年たちによって、音楽や議論、食事、カーニバル、愛を伴う公共の場として占拠された。まさに信じがたい

[53] 東独ロック・ビート史の一端は補注 2 を、詳細は近稿参照。驚くべき冒険的行動によって東独国境体制の非人道性を暴露したガルテンシュレーガーは壁建設前の少年の頃に、友人たちと西独ロックのファンクラブを作って警察に睨まれ、西ベルリンで買った宝物のレコードを押収された。ちょうどプレスリーが西ベルリン駐留米軍にいた頃である（青木 2018a:1,7）。

[54] 東ベルリンの「共和国宮殿」（Palast der Republik）大ホールで FDJ 中央評議会が 1982～1987 年に毎年 4 日間主催し、収益の一部が東独平和委員会に寄付された。当時両独を揺るがした米ソ中距離核ミサイル装備競争ゆえの喫緊のテーマに対応し、西独平和運動との提携および国内教会系平和運動対策として実施された。初回 1.1 万人が参加してセンセーションとなった。外国ミュージシャンも出演したが、1984 年には西独ケルンのバンド BAP が、冷戦をテーマにした曲を東独当局が外すように要求したために出演をキャンセルして帰国した（BAP はその後の東独公演も拒否された）。その後ロックバンドがますます「イデオロギー目的」の利用ゆえに出演を拒否し、このシリーズは中止になった（Sommer 2002: 280f.; Steinmetz 2008）。

[55] 当時の学生数は分からないが、2015/16 冬学期は 819 人（Amt 2016:30）。

ことに、通りでこうして深夜遅くまでダンスをし歌うことが、ギターやドラムで演奏するラテンアメリカ人やアフリカ人によって鼓舞された。そこではまた、至る所に愛し合うペアがいて、公然といちゃつき、夜の草地が占拠された。愛とセックスがこんなに公然と可能であったということは、ヒッピーとは殆ど関係なく、“労働者風の”またはプロレタリア的な倫理の構成部分であった。それは、DDR ではすでに伝来であった性的奔放の形態に由来した」[56]。

g）何ものにも替え難い経験

メルケルは「まとめとして」、祭典での「あらゆる演出」や政治的支持要求、また過去における検閲と抑圧（特に 1964～65 年）にもかかわらず、祭典は「青年と彼らの国家の間の一致または少なくとも一致点（複数）のようなもの」を作り出したと主張した。

「それはあとになってからはすぐに幻想だと分かったが、老年と青年の間の相互承認と寛容が雰囲気を規定し」、「DDR がサブカルチャーと青年文化の発展のためにおのれを開いたこと」に意義がある。

祭典は「DDR にとって二重に成果」があった。すなわち、「世界への開放と政治的寛容」を示し、「青年を固く国家と結びつけることに成功した」。

「世界祭典期間に街頭で党指導部によって、互いに議論し、しかもその際相互に納得することにこだわらない能力」が示された。それは「国内の自由化を含んでいた。これなしには信ずるに足りなかっただろう」。党指導部のこの方針の「はっきりした兆候」は、「文化政策（社会主義リアリズムのドグマの拒否）」と、「DDR ロック音楽の公式の承認とシンボリックな統合」に示された。〔この評価を本節末尾でメルケル自身が限定付ける。〕

「参加者の側は政治的文化の次元でも生活世界の次元でも、一度きりの体験を持った」。「互いに敬意を持って聞き、合意発見に努力するという寛容の経験」であり、それは「人間的かつ自由な社会主義のイメージにふさわしかった」。

加えて、「外国人との出会いが二重の愛国主義効果を持った」。第 1 に、「退屈な DDR」が「物笑いの種」としてではなく「突然世界の関心の的」になり、外国人が「いつもと違って、より友好的」に DDR を見たことによって。第 2 に、西の放送局や政治家の DDR や祭典への非難に対する「殆ど無意識に弁護の態度」として。

「青年は外国人との出会いによって、言葉の困難や世界観の違いを越えて理解しあえること、どこかほかの場所で闘う価値がありうること、冒し得るリスクがあること、独立した自分自身の生活決定が存在することを経験した」。彼らが受容した青年文化は「ヘアスタイルから、衣服、音楽の好み、性的放蕩にまで及んだ」。

〔SED 指導部側では〕「祭典期間に明確になったホーネッカーの奪権が、青年政策の転換と結びついていた：ロック音楽の承認と持ち上げ、青年のファッションへの寛容（彼は西からジーンズを輸入させた）」。

同指導部は「世界祭典によって多くの点に関して印象深い肯定的経験」をして、「カーニバル化構想」を膨らませ、「世界への開放」も、「国内自由化の兆候と考えられた青年政策上の開放も肯定的に」受けとめた。

では「開放が DDR 指導部にとってそんなにも良いと証明されたなら、なぜ引き続き再び狭苦しさが DDR に入り込んだのかという疑問が浮かぶ」。

開放は「別の DDR への希望と結びついた予期せぬ奇跡と思われた」し、そうなれば住民にも自国に留まる「魅力」が発せられただろう。だから、開放は「論理的であり、古い諸関係への復帰は非合理」であり、「引き続く閉鎖はショックであった」し、「鼻面を取って引き回された」。

なぜそんなことになったのか。「閉鎖は、青年政策の転換全般のように、党内派閥闘争、ソ連指導部との対立、諸々の力関係の変化を示唆する」。〔この「示唆」にはホーネッカー自身の変化の可能性が含まれていない。〕

「参加者にとってそうした背景は殆ど理解不可能であり」、彼らにとっては「短期間での開放と閉鎖の経験」、「自由な議論と衝突文化、青年の文化欲求への寛容の経験」こそが「決定的」であり、「何ものにも替え難い」経験であった。

その「撤回は抑圧、非合理的な態度と感じられ」、青年たちの間では「懐疑主義、冷笑主義、展望喪失の風潮が広まった。政治的儀式に対する懐疑、支持表明することへの嫌悪が強まった」。

1964～1976 年という時期には開放と閉鎖が繰り返された。1964 年〔正しくは 1963 年〕には「青年コミュニケ」[57]が出て〔自由化〕、1976 年には「ビアマン追放とそれに続く人気の俳優や音楽家、芸術家のエクソダス」があった〔閉鎖〕。祭典がこの時期を 1 つの出来事として束ねている。

祭典参加者だけではなく、祭典不参加の東独青年もこの時期についての証言力を持っている。この時期に「政治的イニシエーション」あるいは「生活スタイル形成」を経験した者は、「過去の世代ともその後の世代とも異なる」。

それを「祭典世代と言うのは大げさかもしれないが、当時若かった彼ら（1948～1958 年生まれの 15～25 才）は特別の経験をした」。

それは、「政治的な、特に外交上の諸事象が自分の生活のつながりにとって重要だと感じられた」経験である。彼らはキューバ、チリ、アフリカから参加した「革命家」に陶酔し、その新社会建設への協力を夢見たし、また、外交的承認の波というという「東独の目覚めの雰囲気」が彼らの「青年の時期」と合致した。

加えて、「閉鎖」という経験も「この世代特有の仕方で消化された：幻滅、落胆、懐疑、反体制、冷笑主義、あきらめとして、あるいはまた私的世界への逃避として」。

東独の体制転換の時期（1989 年）には、これら「当時の青年が 30～40 才であった。このグループが転換の主役の大部分を占めただろう：「出国者」、改革社会主義者、反体制活動家、順応派として」。

彼らは「DDR 史をめぐる解釈論争に特別の関与の仕方で参加するいわば引き裂かれた世代」であり、また「エリート交代の際に完全に無視されてきた」のであり、「おそらく戦後期の本来のロスト・ジェネレーション」である。（完）

---

[56] ある東独男性によればヌーディスト・ビーチなど FKK（自由肉体文化）も「ドイツ労働者階級の伝統」であり、ある女性によればヌーディスト・ビーチで男性は興奮状態を見せてはならなかった。

[57] 「青年コミュニケ」（Jugendkommunique）は 1963 年 9 月 21 日（BMiB 1985:1577 では 20 日）公表の「青年 信頼と責任」と題する SED 政治局コミュニケを指し、青年政策の「指図や説教、指令」からの脱却を謳い自由化転換文書と言われる。Mählert（1996:150ff.）や Rauhut（1993:62 ff.）などに詳しい。

閉鎖ないし自由化制限の重要事件としては、メルケルが挙げたビアマン追放に加えて、アンソロジー「ベルリン物語」事件（検閲に挑んだために 1976 年発禁）、1975 年レンフト公演禁止（**補注 2**）と「平和のためのロック」における BAP 拒否（脚注 54）（ともに歌詞次第で禁止）、などがある。

14. 東独中央青年研究所の調査結果と「2 つの民族」

祭典において東独青年が何をどのように感じたかを知るには、祭典前後の彼らの状況を知っておくことも必要である。そのため、東独内における青年調査の結果を紹介したい。

ライプチッヒ中央青年研究所（Zentralinstitut für Jugendforschung Leipzig、1966 年設立、以下青年研究所）の 1969 年調査（調査 69）が Mählert（1996:184 f.）に抜粋されている。その限りでは、青年の状況は以下のように当局にとってはなはだ芳しくなかった：

「本調査は、わが青年たちの間の社会主義的な意識の発展が一様にすべての側面を捉えているわけではないこと、それは大きな飛躍ではなされないこと、停滞や逆行傾向さえあり得ること」を示している。

例えば、本調査では「青年の 43%」が「科学的無神論」支持だが、これは「1962 年よりも約 10%〔ポイント〕減少」した。「この傾向が続くなら、我々は 1980 年には無神論者が 1/3 未満という事態に直面する」。

「14%が無宗教」という数字は従来同様だが、「世界観未定や他の世界観支持の比率がアンケート毎に絶えず、かつ大きく増えている」。

西独による、国家としての東独の「不承認政策」が「平和に敵対し攻撃的であること」は青年に受け入れられているが、「青年の 1/4 では敵のイメージ」、すなわち「帝国主義が…恐ろしい危険であること」の認識が不十分である。

「帝国主義的収斂理論」の危険の認識も同様であり、「階級敵のこの構想を見抜くことができている」のは「青年の半分」である。

「FDJ は政治的な大衆組織」であるにもかかわらず、「政治的に理由付け」している団員は「5 人に 1 人」にすぎない。「FDJ 生活を多面的かつ興味深いと思っている青年は半分のみ」、「FDJ の催しが政治的・世界観的にためになっているという青年は 1/3 のみ」である。

「団員集会」も「明らかに困難」な状況にあり、「青年の 4 人に 1 人」は団員集会はない、または 1 回のみと回答した。

FDJ の各地指導部とその周辺以外は、「受動的なままであり、FDJ 生活に殆ど参加していない」。

その「原因を正確に分析し、一方ではこの青年団体の高い政治的・イデオロギー的目的の達成を確保しつつ、他方では青年向きの団体生活の形態と方法を発展させ」ねばならない。

他方で、授業ないし労働後の自由時間における「青年の非公式のグループ」が広がり、「青年の 60%」がそこで過ごしている。その際携帯ラジオの所持が影響している。この比率の男女別では家庭の手伝いの多い女子より男子のほうが高い。

〔自由時間に FDJ の影響力がないか、小さいという〕このような事態を見過ごすことはできない。

青年にとって東独のラジオ・テレビ番組のうち「最も肯定的」に評価されているのはスポーツ関係であり、「重要な政治的出来事について正確に伝えている」と評価する者は「たった 40%のみ」であった。

このような評価は「西の放送局の影響」だけではなく、東独青年の「視聴する態度」によるのだから、「この問題は非常に深刻に受け止められねばならない」。しかも以前よりも「西放送局に反対する青年の比率は明らかに減少し」、「西放送局の視聴は各人が…処理すべき案件であるという見解が増えている」。

「最も好むラジオ放送局」として「青年の 67%」が西のドイツラジオ（Deutschlandfunk）〔西独公共放送〕とラジオ・ルクセンブルク（Radio Luxemburg）〔ポップミュージック中心〕を挙げている。

「この問題を次期の FDJ のプロパガンダとアジテーションにおいて系統的に考慮」すべきである。

無神論が「1/3 未満という事態」の懸念は、**表 5**（本稿末尾）によれば杞憂に終わり、全階層で常に 6 割以上が維持された。**表 5** の見習いと労働者では未決定の漸減と信心深いの漸増が、学生では未決定の漸減と無神論の漸増がほぼ対応していることが注目される。

1969 年に 43%（上記）であった無神論が 1970 年には 1.5 倍以上（本稿末尾の**表 6**：64～76%）になっているのは調査方法に違いがあったのかもしれない。

この調査には現れないが、たとえ信心深くなくても、相対的に自由な空間として教会を頼る青年が大幅に増えた。

調査 69 は問題点を厳しく指摘し、対策は、青年向けの自由化では全くなく、引き締め路線であった。

東独青年たちと FDJ の現状に対して、調査 69 の報告者は、それを「イデオロギー的影響を獲得しようとする敵の試み」の結果と見て、イデオロギー教育と FDJ 指導の改善・強化を強く勧告した。

東独には西独から西側の文化・政治・経済・社会のあり方などの情報が言語の壁なしに、テレビ・ラジオ、来訪する親戚、知人などから大量にかつ間断なく流入するのだから、「イデオロギー教育と指導の改善」だけでは青年の関心に対応できるはずがなかった。

Mählert（1996:180f.）によれば、1960 年代末、チェコスロバキア侵攻への批判にもかかわらず、「ベトナム、キューバ、チリ」での勝利やアジア・アフリカでの影響力拡大、西側の「経済危機」勃発などを根拠に、「東欧の指導者たちは 1960 年代末には大きな期待を持って将来を見ていた」。

その結果「75 ヵ国共産党・労働者党代表会議」（1969 年 6 月）では、「力関係はこの間に「基本的に」「社会主義世界体制」に有利に変化したという破滅的な結論が引き出された」（Mählert 同前）。

〔上記 3 国のうちチリにおけるアジェンデ政権成立は 1970 年であって、75 ヵ国会議には間に合っていない。しかしこの見方は、祭典当時についてのグラチョフの回想（**12 節**）と同様である。〕

しかし、そうした「期待」や「結論」は、「内部の発展」と矛盾した。東独では「企業の中では労働者の間で不満やあきらめが広がった。青年の中ではそれがより一層みなぎっていた。SED 指導部は出口を用意していなかった」。

FDJ ドレスデン県指導部の「不安定な青年および非行

青年に対する政治的活動のための構想の実現の現状」という 1969 年 3 月 7 日の報告がその例証である。そこには、チェコスロバキア侵攻後、西のラジオなどの影響と FDJ の活動の不十分さのため、「扇動スローガンの落書きやチラシの作成・配布、国家を中傷する発言、ソ連反対の扇動、幹部への実際の攻撃」が、特に「県の郡部地域と学校」で見られたなどとあった（Mählert 同前）。

従って、Mählert の、1960 年代東独青年状況の見立ては上記の青年研究所 1969 年報告と類似であり、後者が「指導」の強化での解決を唱えたのに対して、Mählert は「出口なし」と見た。

1970 年代に着目する Wesenberg（2003:652）は、東独では「1960 年代末には多くの青年たちが、自国を“心底から”愛するということからほど遠かった」、「皆伐総会」（1965 年の文化抑圧）とチェコスロバキア侵攻（1968 年）が「若い人々に失望と絶望を引き起こした」と言う。〔これは青年研究所や Mählert と同様であるが、「皆伐総会」による文化面の不満増加も原因に挙げている。〕

そこでホーネッカーと SED 指導部は「パンと遊び」戦術や祭典プログラムを含む文化規制の緩和によって、FDJ や党、国家と青年の結び付き強化を計画した、と彼は続けた。

「皆伐総会」が文化面の失望、侵攻が政治面の失望を増幅したことは確かだろうし、東独指導部にとって政治的自由化はあり得ないとすれば、暴発防止には文化面の妥協を考えざるを得なかったかもしれない。

青年研究所の中心的研究者であった Förster（1990:31-33）は 1971 年の政変〔ウルブリヒト失脚〕が、少なくも短期的には、空気を大きく変えたと見る。その結果、「“黄金の”1970 年代」が登場した：

> ホーネッカーは 1971 年 5 月 3 日の第 1 書記就任直後の第 8 回党大会で「権力交代を確定し」、「ホーネッカー時代が始まった」。そこで謳われた「経済政策と社会政策の統一というこの新しい政治的ドクトリンの背後に何が潜んでいたのか？－新しい要求か、それとも単に新しいうわべか？」
>
> 1960 年代末に「明らかな危機要因が浮かび上がっていた」。即ち、経済不均衡、生活水準停滞、個人崇拝、政治的困難（特に「プラハの春」とその「軍事的終焉」の影響）が、「住民や芸術家、知識人の間の永続的かつ険悪な不穏さを生み出していた」。〔皆伐総会などによるロックを含む文化抑圧も影響。〕
>
> そこでホーネッカーは「内政でも外交でも近代化」を推進しようとした。
>
> それは外交面の緊張緩和（西独のハルシュタイン・ドクトリン停止と両独基本条約、両独国連加盟、ベトナム戦争終結、CSCE ヘルシンキ宣言）に後押しされた。
>
> 住民も安全保障に加えて、自国の「国際的尊重」を実感し、内政面では「とりわけ社会主義の改革に尽力する SED 指導部の政治的開放を感じた」。その中で住民に「最も持続的な印象を残したのは」、新指導部の「社会政策措置」による生活水準の向上であった[58]。
>
> 生活向上を生産向上の刺激とするこの新政策〔=上記の経済政策と社会政策の統一〕は「長期には実現されなかった」が、「1970 年代」にはそれによって「内政の安定化が形成された」。
>
> しかしビアマン追放（1976）や人権要求非難が「SED 指導部の制限的な権力政治的思考の継続を証明し」、また「ドル危機（1977 年）」が東独経済の脆弱性を示した。

「人権要求」はおそらく CSCE ヘルシンキ宣言（1975 年）に基づく国内外からのそれを指す。

「ドル危機（1977 年）」の影響とは、1976 年から 1978 にかけての急激なドル安が一方でカーター政権のドル防衛策、他方で西独通貨 DM 高となり、それが東独経済に影響したということであろう。東独経済への痛撃は、タイムラグを伴って影響した石油危機と、その直後のソ連からの石油供給削減、ソ連のアフガニスタン侵攻に伴う西側での資金繰り困難であった。

青年研究所が 1970 年以後継続した青年世論調査の結果の一部を**表 5・6・7**（ともに本節末尾）に示した。

東独公的機関の世論調査だから、いくら匿名回答であっても、回答が率直かどうかの問題は残るが、調査ごとの率直さがほぼ同じであれば、変化を読み取ることができる[59]（なおこれらの表の調査母数は青木 1991:77 の表 2）。

階層のうち「見習い」は義務教育終了後におよそ 8 割が進む職業教育生のことである（本稿末尾の**図 13** 参照）。

表 6 の最初の項の設問は、「社会主義は全世界で実現されると思う」かどうかである（統計表表題は「社会主義の歴史的展望」）。これについて、見習いも、青年労働者も「完全に」そう思うという回答が、1970 年に比べ 1975 年には大幅に増えて過半数になり、学生では 3/4 を超えた。同期間に「限定的」にそう思う者と否定する者が全階層で減少した。

その後「完全に」そう思うは 1979 年調査では全階層で減少に転じ（特に青年労働者で大幅減少）、1980 年代に少し持ち直したこともあったが、1989 年には極端に落ち込んだ。

Friedrich（1990:28）は社会主義展望のこうした推移について、①「1980 年代半ばまで」を一括して「尖鋭化した国際情勢（冷戦、〔中距離〕ミサイル配備論争）と強力なプロパガンダの影響」の結果とし、②その後ゴルバチョフによる「批判的な情勢評価」と「社会主義諸国で露呈した危機」によって「初めてこの政治的確信の急速な解体が生じた」と言う。

従って彼は①の期間内の変化を全く無視した。1970 年から 1975 年への顕著な確信増加と、その後すでに 1979 年には減少に転じたことに注目すべきであった。このことは 1970 年代前半の特異性を際立たせている。

社会主義の将来を確信する者が 1970 年代前半に大幅に増えたのは、東独の国際的地位の向上、ベトナムやチリでの共産主義ないし社会主義の前進、西側の経済困難など国際要因の作用も大きいと思われる。

しかし同時に、東独青年の心理には、1960 年代に比べたホーネッカー政権初期の政策実践（両独関係の正常化、規制緩和、社会政策拡充、文化自由化）への好感も大きく

---

[58] 生活向上は事実だが、Förster（1990:32）が挙げるその例証、1970 年と 1975 年の乗用車、洗濯機、テレビの世帯普及率比較では明らかと言えない。その期間に目立って増えたのは冷蔵庫のみで、ほかは概ね 1960 年代の伸びの継続または少しの増・減である（本稿末尾の**表 8** と**図 16** 参照）。

[59] 私が本研究所で 1990 年に二度聞き取りした際の研究員ティーレ女史の真摯な対応に感心した。その際得た聞き取りと研究所員の論文から 11 回の調査結果を青木（1991:第 2 章）に紹介した。

作用したと考えられる。**表 6** の自国を誇りに思う者が、同じ時期に、ほぼ同様の伸びを示したことがその根拠である。

「自国を誇りに思う」という項の設問は、1979 年調査までは、「私はわが社会主義国家の市民であることを誇りに思う」かどうかであったが、1983 年調査からは、「私は DDR と緊密に結びついていると思う」かどうかに変更された。統計表の表題は「DDR との一体化」に統一されている。

この項の回答も社会主義確信の項と同様に、強くそう思う者が全階層で 1970 年の 3～4 割から、1975 年には 6 割前後に大幅増になった。その後は低下（1979 年）と上昇（1980 年代半ば）と低下（同後半）という起伏が生じた。

この項の「強い」と「限定的」を合わせると、自国を誇りに思うものが 1988 年 5 月まで約 9 割に達した。これについ Friedrich（1990:30）は「驚くべきこと」と見なし、それは「この一体化意識なしには、いざこざなしに生きることがほとんどできなかったから」だと言う。そう言いながらも「（部分的には外見だけの）経済的・政治的な成果の年々」には肯定数字が上昇し、例えば「1970 年以後の〔国家〕承認の波が自信を与えた」ことは認める。

1970 年と 1986 年を比べるとどの階層でも、「限定的」も「否・殆ど否」も減少し、その分だけ「強い」が増えている。このことは単に「いざこざなしに生きることがほとんどできなかったから」ではないことを窺わせる。もしそうなら「否・殆ど否」の減少は「限定的」の増加になるはずである。自己肯定のための材料はそれなりにあった（顕在的失業や倒産がない、緩い労働、ソ連東欧よりも高い生活水準、オリンピックの成果など）。しかし 1986 年調査のあと、政治改革がソ連に比べてさえ遅れることが明らかになり、全階層のストレスが一気に高まった。

表 7「SED との一体化」

	強い	限定付き	殆ど無・無
SED 党員（青年全階層）			
1970	87	13	0
1986	81	19	0
1989	48	44	8
非 SED 党員（青年全階層）			
1970	20	55	21
1986	22	58	20
1989	8	37	55

（注）1989 年は「4・5 月」調査。（出所）表 6 に同じ。

加えて 1970 年代前半はホーネッカーが掲げた「経済政策と社会政策の統一」という従来政策の修正への期待や、祭典の中身を始めとする規制緩和への期待があった。

但し、**表 6** のように、SED 支持率を示す「SED との一体化」は、1970 年も 1986 年も見習いと青年労働者では「強い」と思う者は約 1/4 に過ぎなかった。

全階層の数値である**表 7** では 1970 年も 1986 年も、非 SED 党員による強い SED 支持は 2 割ないし 2 割少々にすぎなかった。しかもノー（「否・殆ど否」）が両年とも「強い支持」に匹敵する多さであった。残念ながらこの調査には 1975 年がないので、1970 年代前半の趨勢は分からない。

この SED（不）支持率を Friedrich（1990:29）は「特に興味深い」と言う。意外にも、〔1970～1986 年には〕「たとえ 50％は限定付きであったとしても」、「強い」と「限定付き」を合わせると「70～80％が SED と自分を一体化」していたからだと言う。

しかし「限定付き」を「強い」と一体化させるのは、あまりに強引な合算である。

一党独裁国では回答者の本心がノーであっても、国家機関である青年研究所の調査にはせいぜい「限定付き」を選ぶ可能性は小さくない。ティーレ女史は匿名性を確保したと言うが、東独の実情を熟知する回答者の多くが警戒心を捨てることはできなかっただろう。

そうではないとしても、一党独裁国家においてその党への支持を「限定付き」と回答するのは否定的意味合いと解すべきであり、「限定付き」の合算対象はノーである。

ノーと「限定付き」を合わせると両年には 76％ないし 74％、つまり 3/4 が、限定的不支持ないし全面的不支持であったという事実のほうが重要である。

以上、青年世論調査結果によれば、1970 年代前半には社会主義の世界化を強く信じ、かつ自国を誇りに思う青年が増加して、過半数になった。しかし SED に対しては非党員の 3/4 が限定的ないし全面的不支持であった。

Friedrich（1990:28）は、「DDR アイデンティティ」は社会主義と結びついていたから、「社会主義の将来能力への信頼が強ければ強いほど、それだけ DDR アイデンティティが顕著」であった。しかし逆に「社会主義の優越」に疑念が生じると、「DDR アイデンティティが強くぐらつくことは避けがたかった」。そうなると多くの東独市民が「ドイツ・アイデンティティ」に回帰したと言う。

しかし東独市民に「ドイツ・アイデンティティ」がなかったことがあるだろうか。少なくとも私の個人体験の範囲ではドイツ・アイデンティティだらけであったが、そのことと、「DDR アイデンティティ」は両立していた。

ホーネッカー政権は一時「2 つの国家、2 つの民族」論をキャンペーンした。西独という国家における資本主義民族と東独という国家における社会主義民族である。

この理論を外交担当政治局員アクセンが SED ベルリン県指導部理論会議（1973 年 6 月 7 日）で説明した：

> 第 8 回党大会の決定（東独の社会主義国家としての仕上げと社会主義国家共同体との結合強化）が示した「客観的な社会経済的かつ階級的な発展と完全に一致して、DDR における社会主義民族の一層の形成と繁栄および同時に社会主義兄弟諸民族との接近の過程が生じている」（Axen 1973a:3）。

すでにホーネッカーの SED 第 8 回党大会報告に、東独では「労働者・農民権力の達成と社会主義建設のに伴い新しいタイプの民族、社会主義民族が発展している」とあった（1971 年 6 月 15 日）。その後キャンペーンが展開され、さらに両独基本条約署名を踏まえてアクセンが 1973 年 3 月ソ連党機関紙プラウダに寄稿し、「いわゆるドイツ問題」はもはや存在しない、存在するのは「互いに独立のドイツの国家と民族である」と宣言した（Axen 1973：415）。「国家と民族」はいずれも複数形で書かれた。

その後、「ドイツ民主共和国はドイツ民族の社会主義国家である」という 1968 年憲法を、1974 年憲法は「ドイツ民主共和国は労働者と農民の社会主義国家である」に変え、さらに何ヵ所かにあった「民主ドイツ国民戦線」を「DDR 国民戦線」に変更し、1976 年には党綱領が「社会主義民族の発展」と明記した。

これはホーネッカー政権が東独のいわばドイツ民族離れを図ったことを意味するが、「ドイツ」が入った国名を変えることはなかったし、国内の反発も強かった。その象徴はザイフェルト（Wolfgang Seiffert）が「2 つの民族理論」や隔離政策に反発して 1978 年に再び西独に鞍替えしたことであった。彼は 1956 年西独 FDJ の活動により収監されたが、逃亡して東独に移住し、その後 1968～78 年には東独の外国法・比較法研究所長や東独政府の国際法顧問、コメコンの法律顧問を務めた（Müller-Enbergs 2010:1220）。

ホーネッカーも 1980 年代初めにはフリードリッヒ大王像をウンテア・デア・リンデンに戻したり、ルター年やベルリン 750 周年を盛大に祝うなどドイツ回帰を図った。

また青年研究所調査自体がアイデンティティの混在を示した。東独南部の生徒に対する①1989 年 3 月（765 人）、②同 11 月（1181 人）、③1990 年 2 月（369 人）の「アイデンティティ体験」調査で、「ドイツ人」「DDR 市民」「ヨーロッパ人」「ザクセン人・チューリンゲン人」という選択肢を、「100％」「多少」「無し」などと段階区分させた（調査によって選択肢と段階区分が簡略化）。

すると「100％」は、①ではドイツ人 78％、DDR 市民 63％、ヨーロッパ人 68％、②では同じ順に 56％、72％、49％、③では 72％、44％、43％であった（Friedrich 1990:33）。時代の動きに応じて変動が激しいが、いずれも混在であり、1989 年 11 月に DDR 市民・アイデンティティが最高であったことは改革への期待であったかもしれない。

特に 1989 年 2 回の調査はドイツ人と DDR 市民のアイデンティティ体験のほぼ同程度の混在を示した。

郷土愛や自己愛、自意識、認知欲求は普遍的であり、また西のメディアや政治家、来客、親戚などが投げつける東独侮蔑への反発が DDR 市民アイデンティティの自覚を加速した。「一寸の虫にも五分の魂」と言う。

1980 年代初めの東ベルリンで、地域のランニングクラブの知り合いの電気工が「あっち〔西独〕の暮らしは豊かだが、仕事がきついし失業・倒産もある。こっちの仕事とあっちの暮らしの組み合わせがいいが、無理かな」と言いながら笑ったことがある。あくまで同一民族の分割国家の意識であり、プラグマチックな両独感覚が多かっただろう。

だが世界有数のハードカレンシーDM の魅力は圧倒的であった。1990 年初めからの大量移住第 2 波と経済・財政危機露呈に早期両独通貨同盟（東独への西独通貨導入）案が浮上し、その実現、そして早期両独統一へと怒濤の進展になった（青木 2019；青木 1992:第 1 部第 2 章）。

15. おわりに

祭典は以上のように中身も見方もまさに百景であるが、いずれにおいても「開放」と「自由」がキーワードであった。

ロックや自由な風俗、「左翼抗議文化」などカウンター・カルチャーが実質的主役となり、「東のウッドストック」にふさわしかった。ウッドストックは 2 億人の中の 50 万人であった。祭典の国内参加者の人口比はその 10 倍以上である。少なくとも量的影響力はウドストックを上回った。

祭典には、シュタジの予防措置もひそかな対策も効果を挙げ得なかった熱い風景が広がっていた。

東独青年は「このような百花繚乱の多様性をまだ一度も体験したことがなかった」、そこには「柔軟で強制されない雰囲気があった」。だから、「祭典の回顧には肯定的な印象が支配している」（Bickelhaupt 2013）。

本稿は、当時の両独の新聞報道、BStU や連邦公文書館の元機密文書などの収集がまだ不足であるが、できるだけ多くの報告、回想、研究、元機密文書、報道などを利用することによって多角的に様子を捉えようとした。

開放・自由をめぐる論点は、その有無ではなく運命である。大方はそれを祭典限定の出来事であり、希望はすぐに裏切られ、失望に替わったと見る。

この見解には、他の文化分野、とりわけ文学や音楽における自由化も視野に入れた総合的考察がない。それらを考慮に入れれば、祭典限定の開放と自由という主張は成り立たない。

特にアンソロジー「ベルリン物語」事件のような体制の基本的支柱（検閲）を揺るがそうとする動き、すなわち自由化の一層の徹底を求める動きさえ発生し、しかもそれが祭典後のことであったのだから、状況はますます「一場の夢」でも「単なるショーウインドウ」でもなかったと言い得る。

開放・自由は 1975～76 年に終わったとする少数意見もある。その場合の転機はビアマン追放に見られ、祭典からそこに至る間に何があったかの検討がない。

祭典のみではなく実社会にも、しかも何年か自由化が存在したとすれば、それは東独版雪解けと言い得る。この場合も指導党や秘密警察の圧力が消えたわけではないが、それは広範な人々の雪解け体験として、その後の市民生活と東独史に影響を残したと考えられる。

同じ共産圏でも苛烈なスターリン主義政治もあればフルシチョフの雪解けも、百家争鳴も、出てきた杭を取り締まる政治もあったのだから、区別が当時の実情を見るためだけではなく後世への影響を考えるためにも重要である。

この論点の派生論点は、メルケルが言うように、なぜ開放・自由化が 2～3 年後に再び閉鎖になったのか、である。彼女は東独党内権力闘争やソ連の圧力その他の力関係の可能性を挙げた。

しかし、または、加えて、ホーネッカー自身の移り身の可能性もある。彼は 1965 年には抑圧の先頭に立ち、奪権後は自由化を唱道したのだから、再び自由化抑制（1965 年と同じではないとしても）に転じたかもしれない。この点の究明は難題であるが、アンソロジー事件を検討する次稿の際に、ホーネッカー発言の経過を見てみる。

もう 1 つの論点は、メルケルの言う「祭典世代」の開放・自由化体験および予防措置体験の後世にとっての意義（当局にとっては後遺症）である。

仮に自由の謳歌が祭典現場のみであっても、前者は五十数万人、後者は数万人の大衆体験であり、しかも忘れられない体験（メルケルの言う「何ものにも替え難い経験」）であったがゆえに、広範囲に伝えられ、大いに議論されたに違いない。その波及効果は絶大であった。そうした祭典世代が 1989 年体制転換時に社会の中堅を占めていた。

当時 19 才で祭典を訪れたカーナイも、「アレックスで議論し、主張することに問題はなかった」が、「そうすると突然、非常によく訓練された FDJ 団員が登場して、議論を即座にリードした」と批判しつつも、今でも「あの時を好んで想い出す。あの時はベルリンじゅうに世界への開放の息吹き」が満ちていたからだと言う（MDR 2018）。

開放と自由に関して大方の論者や回想者が両独参加者

間のやりとりに焦点を当てた。

しかしメルケルは東独にとって西独は日常的に十分知った相手であり、東独参加者は、チリやベトナムをはじめとするそれ以外の外国との接触に夢中になり、紹介される左翼抗議文化に共鳴したと主張した。

非公式参加の労働者者ライナーは西独からの友人を得たことを、「舞台装置」だった Wolle はイランの様子を知ったことを喜んだ。

参加者それぞれが異なるのは当然であるが、体制内少女であったメルケルのこの主張は多くの公式代表つまり FDJ の積極的活動家に当てはまったのではないかと思う。

メルケルが言うように、左翼抗議文化への共鳴の結果が「民主的な社会主義」、「人間的な社会主義」（レンフト）であったとすれば、彼ら FDJ 活動家の場合でさえ、国内の現状への批判として後々まで影響した可能性がある。メルケルみずから、上記のように東独末期に「民主的社会主義」化に尽力しようとした。

「祭典世代」の時代体験は祭典参加者に限らなかった。青年研究所の調査が示したように、1970 年代前半に青年世論が大きく変化した。1969・1970 年には政権と FDJ による青年掌握は危機的状況であったが、1975 年に劇的に改善された。その象徴は社会主義と自国への否定世論が少なくとも半減、階層によっては 1/5 へと激減したことである。これには国際情勢の変化や社会政策改善などに加えて、ダンス音楽や中絶・避妊問題などの自由化策も効いたと考えられる。しかしその後 1970 年代末には学生以外では概ねまさに元の木阿弥になった（**表 6**）。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（補注 1） 祭典への東独参加者「800 万人」とは

色々な文献に東独の祭典参加者 800 万人とある。1973 年の東独人口 1698 万人のほぼ半分が東ベルリンに来たことになる。あり得ない。これは延べ人数に違いないが、そうは記されず、どのような集計かも記されていない。

そもそも、祭典終了日の国際プレスセンターの発表（8 月 6 日の ND 掲載）には 1542 の公式催しの訪問者は「500 万人以上」（Lippmann 1973:788）、祭典終了報告には 1542 の催しの訪問者は「約 740 万人」（Dietrich 2003）とあるのだから、催し参加者 800 万人説も怪しい。

祭典の東独国内での影響を考える上で参加規模は重要な要素であるので、「800 万人」を検討しておきたい。

ミールケの命令 13/73（**9 節**）の冒頭には、祭典参加予定が「全世界の 2 万人の代表とわが社会主義国〔=東独〕の 30 万人の若い代表者」とあった。計画の「超過達成」が目指されたから、「若い代表者」が大幅に増えた可能性はある。

東独の国家祭典委員会は当初（1972 年 2 月）、「平和と友好、連帯のために」というモットーのもとに、外国から約 2 万人と東独から 3000 人の公式代表団を、また東ベルリンの青年 4 万人と、幾つかの期間に分けて国内各地から到着する「組織された大衆参加者」33 万人とを予定した[60]。〔このモットーと後述の祭典スローガンは少し異なる。〕

これによると公式代表以外の動員計画は 37 万人である。

祭典直前の報道である Nawrocki（1973）によると、当局は外国から約 6 万人の来訪を予想し、国内からは 24 万人の青年を 2 段階に分けて〔各 12 万人ずつ〕ベルリンに来させる計画であった。従って毎日「18 万人のゲストを泊め、食べさせ、もてなさなければならない」予定であった。

1972 年 2 月 23 日決定の祭典収入計画（**8.1 節**）は、国内正式代表 3000 人と参加者 21.6 万人の参加費支払いが予定した。合計約 22 万人である。但し、祭典プログラム協力者（無料）や、軍など「色々なグループ」からの参加者、潜り込み参加者はこの数に含まれない。

東独の官製青年組織 FDJ のいわば正史である Jahnke（1983:499）には、「1700 以上の各国組織と 18 の国際組織を代表する合計 25646 人の外国ゲストと、50 万人以上の DDR〔=東独〕青年男女が参加した。1542 の政治、文化、スポーツの催しに 730 万人以上が訪問した」とある。

Honecker（1980:332, 訳 390-1）にも「わが国から 50 万を超す」FDJ とピオネールの団員が加わったとある。Lippmann（1973:789）も、祭典に参加した FDJ 団員を「50 万人」とした。

国際プレスセンター発表によると、外国からは世界のすべての大陸の 140 ヵ国から 25646 人の代表が、1700 の「政治・労組・スポーツ・ツーリズムその他の組織を代表」して参加し、「89 ヵ国と西ベルリンからの 1556 人の新聞・ラジオ・映画・テレビのジャーナリスト」が報道に当たった。

しかし祭典終了報告では、25646 人の外国ゲストのうち代表は 19136 人であった（Dietrich 2003）。

国際プレスセンター発表には、「強力な最後の催し」と「すばらしい花火」には「75 万人が参加した」ともある。75 万人は、スタジアムで開催の閉会式（**図 11**）ではあり得ないので、前日の大デモンストレーション（**図 5・6・7**）を指すのだろうし、デモンストレーション・メンバーだけではなく見物人も含むだろう。これも公式の催しだから、上記の「500 万人以上」に含まれるだろう。

この発表の中に、祭典に東独から「FDJ とピオネールの団員およびスポーツ選手 52 万人」が参加した、とある。これは延べ人数ではなく、組織された参加者の実数であろう。これは Jahnke や Honecker の「50 万人以上」と合致する。

以上の数字によれば、国内の組織的参加者の実数は 52 万人ないし 50 万人以上、1542 の催し参加者は 500 万人以上ないし、730 万人以上、または 740 万人である。

組織的参加者には参加費不要の動員（各種の祭典業務を担う大量の FDJ 団員や出演者など）も含まれただろう。

催しは昼間も夜もあったので（青年には特に後者が魅力）、組織的参加者もそれ以外の参加者も各人が毎日複数参加したはずである。その重複計算が 500～740 万人であり、それがいつからか 800 万人となって流布されたのだろう。催し参加数と組織的参加者を足すとほぼ 800 万人を導き出すことができる、前者が後者の中身の大部分だから、まさかそういう足し算はしていないと思う。

各地からの組織された参加者の団体上京の様子はクンツェの「元素」に描かれている（**10.1 節**の F 駅前）。ライナー（**5 節**）のような潜り込みや周辺住民の参加も多かった。彼らは、組織的参加者数に含まれない。

[60] Rossow 1999:257. Mählert（1996:196）所収の FDF 中央評議会書記局提案（1971 年 6 月 3 日付け）にも同様の数字が。国内祭典代表 3000 人はどの文献にもあるが、Dietrich（2003）によると、祭典終了報告には「DDR からの 28.8 万人祭典代表」とある。

そこで国内参加者合計を五十数万人とする。これに外国からの代表や参加者が加わった。

（補注 2）ライプチッヒのロックバンド「クラウス・レンフト・コンボ」と 1965 年「ビート騒乱」（「ロック騒乱」）[61]

レンフト（Klaus Renft）の本名はイェンチュ（Klaus Jentzsch、1942-2006）であった。芸名であるレンフトは彼の母の旧姓（Renft）に由来する。

彼は 1957 年に Klaus-Renft Quartett を結成し、翌年初公演をした。1961 年には Klaus-Renft-Quintet に改称。しかし 1962 年に公演禁止となる。

1964 年に盛んになった「ビート運動」の中心がライプチッヒであり、グループが「雨後の竹の子」のように誕生した。当初は FDJ（自由ドイツ青年団、官製青年団）が奨励、当局も黙認し、毎週末若者多数が「ビートが演じられる私営のダンスホールに出かけた」。

同年、レンフトもバトラーズ（The Butlers）を結成し、「舞台のスター」となった[62]。シュタジはこれを暗号名「放浪者」（Wanderer）のもとに監視し文書を作成し始めた。

Rauhut（1993：140f.）によれば、「バトラーズのキャリアは 1964 年の“ドイツの出会い”[63]という上昇気流の中で」始まった。彼らは「どのダンスホールも簡単に満員にし」、「公式の称賛」も得た。青年向けラジオ DT64〔脚注 63 参照〕が彼らを「たびたび模範的」とし、FDJ ライプチッヒ県指導部や文化省中央文化会館（ZfK、ライプチッヒ）のダンス音楽中央活動共同体（ZAG Tanz-musik）[64]が後援を協定したほどであり、繰り返し社会的祝賀行事に参加した。「ドイツの出会い」での活躍に、この行事の委員長でもあった FDJ 第 1 書記から「DDR の首都ベルリンにおけるドイツの出会いの準備と実行の際の卓越した業績の証書」が与えられた。

Rauhut（1993:142）には FDJ 中央機関紙 Junge Welt（若い世界）の 1965 年 8 月 26 日の記事の大きな写真が載っている。

その見出しは、「バトラーズ：“高い水準を目指す者は沢山練習しなければならない”」である。これは記者が「ギターコンテスト」の呼びかけへの対応を聞いた記事である。インタビュー相手は「ライプチッヒの 4 つのギターコンボ」、The Shatters、The Guitarmen、The Buttlers、The Players であった。

〔見出しになったようにバトラーズへの注目度が高かった。またこの記事の直後、10 月にライプチッヒでは英語名のバンドがすべて公演許可取り消しとなるが、この時点では FDJ は英語名をまったく問題にしていなかった。〕

写真は本のページに合わせて一部トリミングされているが、第 1 問への回答は 4 グループとも収録されている。第 1 問は「君らは〔ギターコンテストの〕呼びかけを知ってるか？、知ってるなら、どこから？」であった。〔青年向け新聞だからすべて親称形。〕

バトラーズは、「知ってる。我々は FDJ〔ライプチッヒ〕県指導部と殆ど結婚しているようなものだ。我々は頻繁に集まっている。何でも知ってるよ」と答えた。この回答にも、それが機関紙に載っていることにも彼らと FDJ の非常に親密な関係が現れていた。この回答の中ではバンドの構成にも触れ、「7 人、19～26 才、ギター3 人、ドラム、オルガン、ハーモニカ、歌手各 1 人」であった。

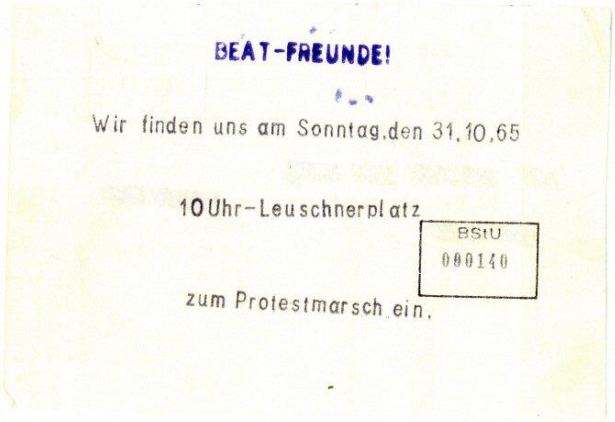
ところが 1965 年 10 月 11 日状況が一変した。SED 指導部の基準に則り、ライプチッヒ県では全ビートバンドが演奏許可を一旦取り上げられた。そのため「ライプチッヒのビートシーンが激しく沸き立った」。新しい演奏許可を得たのは同県登録の 56 バンドのうち 9 バンドのみであり、バトラーズを含む 5 バンドは公演禁止となった（数字は jugendopposition.de：：Es lebe der Beat!による）。

バトラーズは、FDJ ライプチッヒ県指導部が「非常に良い」との評価を維持した「数日後」の 10 月 21 日に、ライプチッヒ市文化部から「無期限演奏禁止」通告を受けた（Rauhut 1993:141）。通告書の写しが Rauhut（1993:143）にある。禁止理由として、「我々の道徳的、倫理的諸原則に反している」ことと、違法行為（催しの届け出義務、プログラム規定、報酬規定などへの違反と 1 万マルクの脱税）が挙げられた。

バトラーズなどビートに対する党の闘争の「断固さ」が「ライプチッヒの青年たちの心情を逆上させる」結果になり、「公演禁止」＝全般的な「ビート禁止」と理解された（Rauhut 1993:141）。

マークレーベルク（Markleeberg）〔ライプチッヒ近郊で、東独時代は農業博覧会の会場〕の 3 人の生徒が抗議デモを計画し、チラシを 174 枚作成し、10 月 25 日にライプチッヒで撒いた（**図 17**）。

図 17 バトラーズ公演禁止抗議デモ呼びかけの手作りチラシ


BEAT-FREUNDE!

Wir finden uns am Sonntag,den 31.10.65

10Uhr-Leuschnerplatz

BStU 000140

zum Protestmarsch ein.

（注）四角の中は BStU の印字（ページ番号）
（出所）jugendopposition.de: Es lebe der Beat!

---

[61] 以下では Rauhut（1993）以外は Renft (2018)、jugend-opposition.de: Es lebe der Beat!、Müller-Enbergs（2010:981; 1058f.）、Spiegel（2006）による。これらには一部記述の齟齬があるが、Renft (2018)を優先した。

[62] バトラーズとしての公演写真が Rauhut（1993: 142）、jugend-opposition.de: Es lebe der Beat!にある。

[63] 「Deutschlandtreffen der Jugend」。東ベルリンで 1950 年、1954 年に続き 1964 年 5 月 16-18 日に 3 回目を両独青年を集めて FDJ が主催した。当時の詳報が Spiegel (1964)にある。この出会いには「50 万人、うち西独から 1 万人」が参加し、そのために設けられたラジオスタジオが「99 時間、ポップとプロパガンダのミックス」を放送した。出会い終了後、「国家に近いプロパガンダを青年好みのポップ音楽で包む」というアイディのもと、放送継続が決定された（Ackermann 2014）。それが「青年スタジオ DT64」または単に DT64 である。DT は Deutschlandtreffen の略。

[64] Zentralen Arbeitsgemeinschaft Tanzmusik beim Zentralhaus für Kulturarbeit (ZfK)、文化省の一部門。

東独では印刷は許可制であり、私的な印刷は不可能であった。彼らは、文字と数字を押印することができるおもちゃのスタンプ箱を利用した。71 文字×174 回の押印というものすごい手仕事であった。

チラシには、「ビートの友よ！ 我々は日曜日、1965 年 10 月 31 日抗議の行進（Protestmarsch）のためにロイシュナー広場へ行く」とあった。

チラシはすぐ回収されたが、驚いた当局が職業学校を含むすべての学校に、当日ロイシュナー広場（Wilhelm-Leuschner-Platz、ライプチッヒ新市庁舎近く）付近に近づくなと生徒に警告するよう指示した。そのため行動の日時と場所が広く知れ渡り、それがビート・デモだということも口伝えされ、新たなチラシや落書きも登場した。

当日ライプチッヒ中心部に約 2500 人集まったが、うちビートファンは 500～800 人、残りは私服の FDJ 幹部や党員、保安要員であった。警察犬や放水車も投入された。これがライプチッヒの「ビート騒乱」または「ロック騒乱」である。

デモ参加者のうち 267 人（15～25 才）が連行され、そのうち 97 人が再教育のための強制労働として最高 6 週間〔褐炭の〕「露天掘りに押し込められた」。

レンフトは 1967 年にクラウス・レンフト・コンボ（Klaus Renft Combo、のちに単に Renft）を結成し、公演許可を得た。当初はレッド・ツェッペリンやピンク・フロイドのカバーであったが、自作を歌うようになり、すぐに「怒れるロッカーとか反抗的な市民という評判を獲得した」。その結果「DDR の最も好まれるロックグループ」の 1 つとなった。

1971 年には「短期的に DDR の文化政策の自由化が生じ」、10 月にコンボの初めてのラジオ放送が実現した。1973 年には「Klaus Renft Combo」、翌年には「Renft」という LP を出し東独でのベストセラーになった。

自作曲が増えた 1969 年に作詞家パナッハ（Gerulf Pannach、1948-1998）との協力が始まった。大学入学資格取得からそれまで彼は兵役だった（1967-69）。彼は 1972 年からバンドの固定メンバーになり彼の作詞の歌をソロで歌うようになった。パナッハはビアマン（Wolf Biermann）の影響を強く受けていたので、政治性の強い歌詞を作った。たとえば「小さなオットーについてのロックバラード」（"Rockballade vom kleinen Otto"）という歌は東独のタブー・テーマである「共和国逃亡」の失敗を取り上げた（歌詞は https://deutschelieder.wordpress.com/2014/05/26/）。

歌詞のためパナッハは度々公演禁止となり、1975 年 9 月末にはこのコンボ自体も「最終的な禁止」となった。バンド内部でも意見の違いも大きくなり、禁止措置が出なくても「自分で解散しただろうと思う」とレンフトが自伝に書いた。

公演禁止後バンドは解散し、1976 年 5 月にレンフトは西ベルリンへ出国し、同年 11 月にパナッハともう一人のメンバーが「国家敵対的扇動」罪で逮捕された〔ビアマン追放と同じ時期である〕。彼らは翌年 8 月に西独政府による政治犯自由買いの対象となり、西ベルリンに出国した。1990 年に Renft 復活公演があり、1999 年に第 3 アルバム「何もなかったかのように」（Als ob nichts gewesen wäre）を出した。

こうした東独ロック史はホーネッカー政権初期の自由化を考える上でも重要である。

（補注 3）1951 年第 3 回祭典（東ベルリン）における西ベルリン警察との衝突

1951 祭典の際に「何万人もの FDJ 団員」が西ベルリンへ行ったことにソ連は「非常に驚いた」（Lippmann1973: 790）。これは彼らの西ベルリンでのデモ行進と警察との衝突を指す。この衝突事件は次のようであった。

東ベルリンにおける 1951 年 8 月 5 日-19 日の第 3 回祭典には西独から 3.5 万人、西独以外の 104 ヵ国から 2.6 万人、国内から青年 200 万人、ピオネール 2 万人が参加した（Jahnke 1983: 223）。壁建設 10 年前であった。

宿泊と食事提供の負担が当時の東独には過大であったため、不足穴埋めに毎日 8～9 万人が西ベルリンの提供に頼った。そのため批判を受けたホーネッカー（当時 FDJ 責任者）が「困難とトラブルから目を逸らすために衝突を挑発」することにし、同年 8 月 15 日に「5 千人から 1 万人」の FDJ 団員が西ベルリンでデモをし、警察と「流血の衝突」になったと言われる（Breßlein 2003a; Wolle 2013a:233）。

東独側に言い分では、西ベルリン市長ロイター（Ernst Reuter）がラジオを通じて東ベルリン滞在中の青年たちを西ベルリン訪問に招待したので、祭典期間の 8 月 15 日午前に、「祭典運動の目的や平和維持をめぐる闘いにおける青年の責任について、若い人々や住民と議論するために、多くの祭典参加者が西ベルリンに平和的に来た時、西ベルリン警察の何組かの百人隊が暴力的に若者や少女を襲った」ため、重傷を含む多数の負傷者が病院に搬送され、「何百人かが逮捕された」（Jahnke 1983:227）。

この言い分だけを見ると、なぜ警察が動いたかが全く分からない。しかし Jahnke（同前）には、警察は「無防備のデモ隊に放水機や硬いゴム製こん棒を投入した」ともあるので、祭典参加者は三々五々「平和的に来た」のではなく、「デモ隊」列を組んで来たことが明らかである。無許可デモであり、もしデモ隊が米軍占領地区に入ったのなら、駐留米軍による「祭典参加者の米国占領地区通過拒否」（Jahnke 1983:224f.）にも違反した。

東独側には西独政府による西独 FDJ 非合法化（1951 祭典直前の 6 月 26 日）への反発もあったのだろう。この非合法化を含め「帝国主義諸国、とりわけ米国や西独の、祭典と青年たちのベルリンへの旅行を妨害する試み」があったが、その「大部分失敗した」と Jahnke（1983:225）は言う。

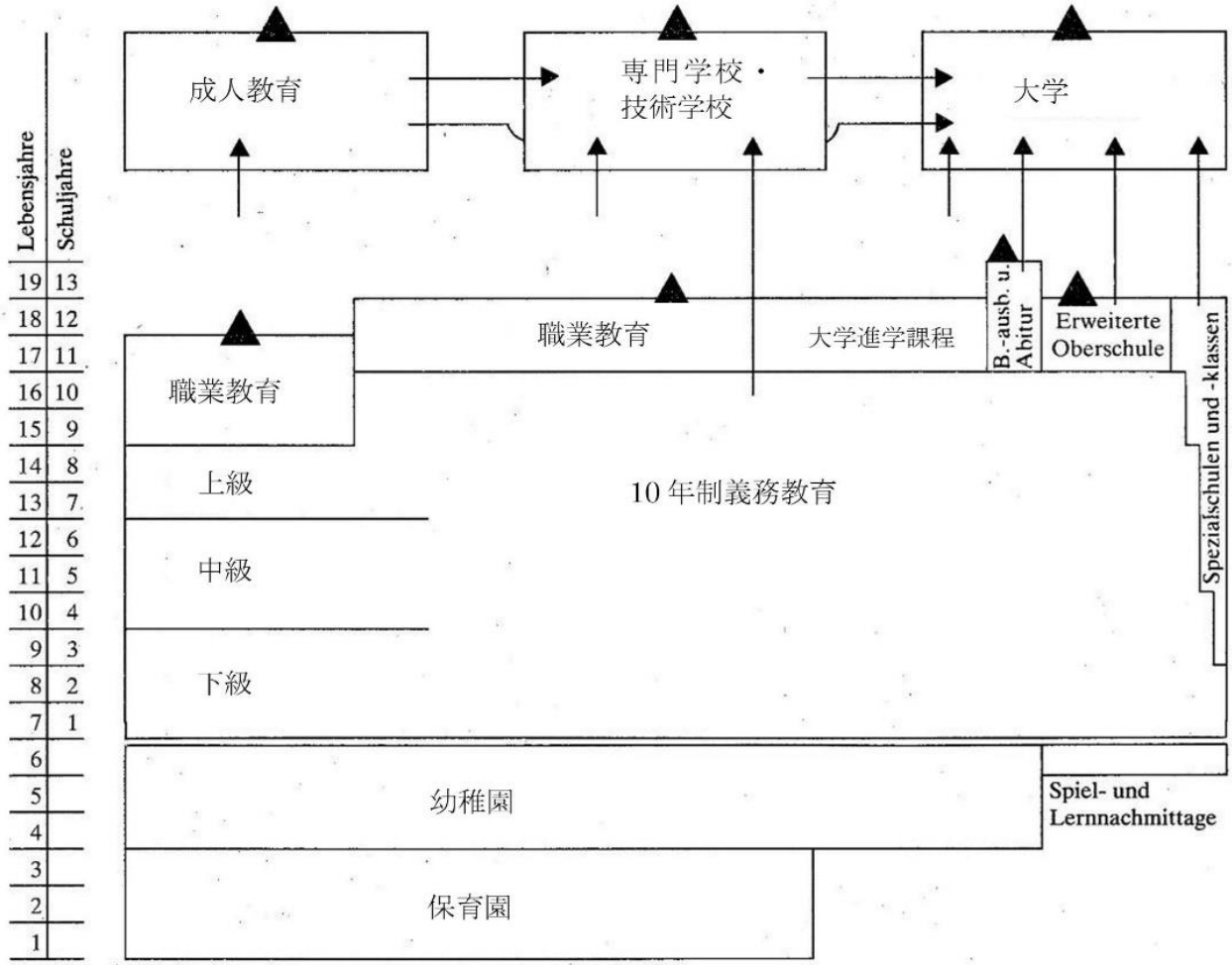
Wolle（2013a:231）には 1951 年祭典での西独からのゲストと外国からのゲスト、東独青年の別の 1 日当たり食事供給量の表がある。例えば肉供給は同じ順に 300g、500g、250g であり、果物・牛乳・フルーツジュース・ブドウ糖・レモン・卵は両ゲストのみに供された。

Nawrocki（1973）によれば、「1951 年夏に東ベルリンで開催された第 3 回祭典では、重大な組織的欠陥が存在したので、ホーネッカーの下の FDJ 指導部は SED の厳し批判を受けた。宿舎が不足し、食事が滞り、首相グローテヴォールが貴賓席に着けなかった。彼が入場券を持っていなかったからである」。その上、「自然発生的に西ベルリンで反祭典が組織された：食事、議論、文化催しと 17 万枚の映画・劇場無料入場券があった」（同前）。

1973 年祭典ではそうした「反祭典」はなかったし、そもそも両ベルリン間の通行は 1961 年から壁が遮断した。

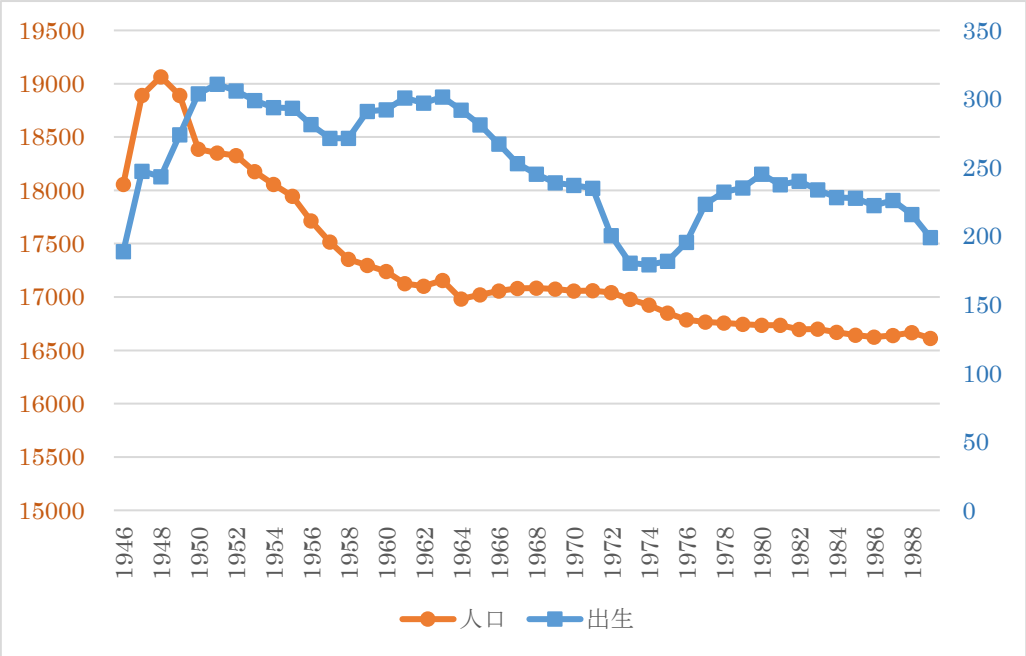
両独間の経済格差は、豊かな国に占領された西独がマーシャルプラン援助を得、貧しい国に占領された東独は生産設備など可能な最大限をソ連に持ち去られたことにも起因した。（補注完）

図 13 東独の「統一社会主義教育制度」



（注）▲は職業へ移行、↑は進学を示す。左端列が年令（日本語の 0 歳児が第「1」年）。その右の列が就学年次。1～10 年次（一部の生徒は 8 年次まで）が義務教育。その後職業教育（生徒を「見習い」と言う）か大学進学課程に進んだ。進学課程は図の「大学進学課程」の右横のドイツ語にあるように、3 年制高校または職業教育 1 年延長、2 年の拡大義務教育に拠った。大学進学率は低かった。多くの職業教育は 2 年間だが、職種により 1.5～4 年の幅があり、大学進学資格を取る場合や 8 年次卒業生は 1 年増えた（BMiB 1985:331）。1973 年には職業教育入学者 203236 人のうち 10 年次卒業生は 79%であった（DDR 統計年鑑 1981:291）。（出所）BMiB（1985:319）.

図 14 東独の人口と出生数の推移（1946-1989、千人）



（注）右端は 1989 年。（出所）DDR 統計年鑑 1965:516、1981:351、1990:403。

表 4 裁判なしの強制収容（人）

県	1973.7.23 まで			1973.7.23-28			1973.7.28-0804			合計		
	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c
Berlin	112	150	195	30	9	17	15	20	10	157	179	222
Cottbus	7	30	24	1	-	1	2	1	-	10	31	25
Dresden	16	43	27	6	2	7	1	2	-	23	47	34
Erfurt	42	70	34	1	-	-	-	2	-	43	72	34
Frankfurt	26	40	27	3	-	5	-	5	2	29	45	34
Gera	17	30	13	3	1	-	1	1	-	21	32	13
Halle	58	83	60	1	2	1	-	1	-	59	86	61
K-M-Stadt	24	81	47	2	2	22	18	-	-	44	83	49
Leipzig	14	132	771	-	2	-	3	2	3	17	136	774
Magdeburg	21	37	14	-	-	1	-	-	1	21	37	16
Neubrandenbg	10	24	15	-	1	-	2	4	2	12	29	17
Potsdam	89	46	52	9	2	1	9	8	2	107	56	55
Rostock	13	46	48	14	47	48	-	1	-	27	94	96
Schwerin	20	15	10	-	-	2	-	-	-	20	15	12
Suhl	14	32	31	-	2	-	-	2	-	14	36	31
合計	483	859	1,368	70	70	85	51	49	20	604	978	1,473
〔各期合計〕	2710			225			120			3055		
〔比率〕	89%			7%			4%			100%		

（注）a: 精神病院、b: 少年院, c: 特別養護施設。各期合計と比率は青木が追記。（出所）HA IX 5354:Bl.21.

表 5 宗教と無神論に対する態度

	無神論	信心深い	未決定	無神論	信心深い	未決定	無神論	信心深い	未決定
	見習い			労働者			学生		
1970	67	6	27	64	4	32	76	9	15
1975	69	11	20	70	9	21	77	9	14
1979	62	12	26	62	9	29	79	9	12
1984	63	10	27	65	7	28	79	10	11
1986	65	11	24	60	13	27	81	7	12
1988	64	16	20	64	16	20	81	9	10
1989	65	15	20				85	6	9

（出所）Friedrich 1990:27.

表 6 東独中央青年研究所（ライプチッヒ）の世論調査から（%）

社会主義は全世界で実現されると思う				自国を誇りに思う				SED との一体化			
	完全に	限定的	否・殆ど否		強い	限定付き	否・殆ど否		強い	限定付き	否・殆ど否
	見習い			見習い				見習い			
1970	46	36	18	1970	41	50	9	1970	24	53	23
1975	63	28	9	1975	57	38	5				
1979	50	35	15	1979	40	50	10				
1983	47	45	8	1983	46	45	9				
1984	50	42	8	1985	51	43	6				
				1986	48	46	6	1986	26	53	21
1988(5 月)	10	32	58	1988(5 月)	28	61	11				
1989(10 月)	3	27	70	1988(10 月)	18	54	28	1989	10	37	53
	青年労働者			青年労働者				青年労働者			
1970	35	41	24	1970	37	53	10	1970	23	52	25
1975	56	35	9	1975	53	42	5				
1979	39	43	18	1979	38	52	10				
1983	45	47	8	1983	55	38	7				

1984	44	46	10	1985	57	39	4				
				1986	46	49	5	1986	26	52	22
				1988(5 月)	32	61	7				
1988(10 月)	6	30	64	1988(10 月)	19	58	23				
								1989	21	35	44
	学生			学生				学生			
1970	65	27	8	1970	43	57	10	1970	32	48	20
1975	78	20	2	1975	66	32	2				
1979	66	28	2	1979	51	44	5				
1983	68	31	1	1983	70	29	1				
				1985	70	28	2				
				1986	68	30	2	1986	45	48	7
				1988(5 月)	52	45	3				
1989(5 月)	15	39	46	1989(2 月)	34	51	15	1989(4-5 月)	24	40	36

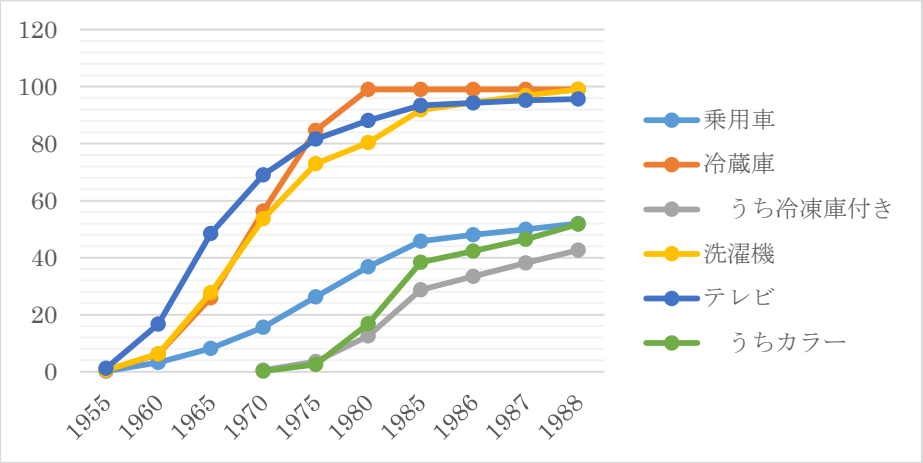
（注）「自国を誇りに思う」という項の設問は 1979 年までと 1983 年以後で異なる（本文参照）。原文では 3 つの統計が別々の収録であるが、比較の便宜のために統合した。（出所）Friedrich 1990:29f.（青木 1991:81-83 に訳載）。

表 8 耐久消費財普及率（100 世帯当たり）

	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1986	1987	1988
乗用車	0.2	3.2	8.2	15.6	26.2	36.8	45.8	48	49.9	52
冷蔵庫	0.4	6.1	25.9	56.4	84.7	99	99	99	99	99
うち冷凍庫付き				0.5	3.5	12.5	28.7	33.4	38.2	42.7
洗濯機	0.5	6.2	27.7	53.6	73	80.4	91.8	94.4	96.9	99
テレビ	1.2	16.7	48.5	69.1	81.6	88.1	93.4	94.3	95.2	95.7
うちカラー				0.2	2.5	16.8	38.4	42.3	46.5	51.8

（出所）DDR 統計年鑑 1989:291。

図 16 表 8 の図示



（出所） DDR 統計年鑑 1989:291。図は青木が作成。

略語

アレックス = Alex。ベルリンのアレキサンダー広場（Alexanderplatz）の略称。

シュタジ = Stasi. Staatssicherheit の略。東独国家保安省（MfS）またはその職員を指す。和文では「シュタージ」との表記が多いが、Staasi ではないのでシュタジとしている。

タカ = Sozialistische Jugend Deutschlands – Die Falken、ドイツ社会主義青年団タカ（西独、現ドイツ）

調整グループ = Koordinierungsgruppe X. Weltfestspiele、第 10 回世界祭典調整グループ（第 10 回世界青年学生祭典への西独からの参加団体のうち非共産主義系諸団体のグループ）

AEJ = Arbeitsgemeinschaft der Evangelischen Jugend、福音青年団活動共同体（西独、現ドイツ）

AGM = Arbeitsgruppe des Ministers、大臣活動グループ（シュタジ本部の動員作戦担当部署）

AKF = Arbeitskreis Festival、祭典活動グループ（第 10 回世界青年学生祭典への西独からの参加団体のうち共産主義系諸団体のグループ）

AS = Allgemeine Sachablage、（シュタジの）一般文書保管庫

BDKJ = Bund der Deutschen Katholischen Jugend、ドイツカトリック青年団連盟（西独、現ドイツ）

BND = Bundesnachrichtendienst、連邦情報局（西独、現ドイツ）

bpb = Bundeszentrale für politische Bildung、連邦政治教育センター（西独、現ドイツ）

BRD = Bundesrepublik Deutschland、ドイツ連邦共和国（西

独、現ドイツ）の略語

BStU = Die Bundesbeauftragte für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR、旧 DDR シュタジ文書連邦保管庁

CDU = Christlich-Demokratische Union Deutschlands、キリスト教民主同盟（当時西独野党、現ドイツ、東独にも同名の政党があった）

CSU = Christlich-Soziale Union in Bayern、 キリスト教社会同盟（バイエルン州の政党、CDU の姉妹党、西独、現ドイツ）

CSCE = Conference on Security and Cooperation in Europe、全欧安全保障協力会議

DA = *Deutschland Archiv*、西独・現ドイツの東独・ドイツ問題専門誌

DAG = Deutsche Angestellten-Gewerkschaft、ドイツ職員労組（西独、2001 年まで現ドイツ）

DDR = Deutsche Demokratische Republik、ドイツ民主共和国（東独）のドイツ語略称

DGB = Deutscher Gewerkschaftsbund、ドイツ労働組合連合（西独、現ドイツ）

DKP = Deutsche Kommunistische Partei、ドイツ共産党（東独支配党 SED と提携、西独）

DM = D-Mark = Deutsche Mark、ドイツマルク（西独およびユーロ導入までの統一ドイツの通貨）

DSF = Gesellschaft für Deutsch-Sowjetische Freundschaft、独ソ友好協会（東独）

FDGB = Freier Deutscher Gewerkschaftsbund、自由ドイツ労働組合同盟（東独労組全体を統合）

FDJ = Freie Deutsche Jugend、自由ドイツ青年団（東独支配党 SED 指導下の青年組織、いわば官製組織）

FDGB = Freier Deutscher Gewerkschaftsbund、自由ドイツ労働組合同盟（東独）

FDP = Freie Demokratische Partei、自由民主党（西独、現ドイツ）

GBl = Gesetzblatt der DDR、東独法律公報

GMS = Gesellschaftlicher Mitarbeiter für Sicherheit、シュタジの「社会的保安協力者」。情報収集などの治安協力では IM と同じだが、徴募されるのは世間の知名度も国家忠誠心も高い人物であり、IM の場合ほど陰謀的活動ではなかった。1989 年には約 3.3 万人（Engelmann 2016:108）（東独）

GST = Gesellschaft für Sport und Technik、スポーツ・技術協会（射撃をはじめ陸海空の軍事関連スポーツの団体で、「明日の兵士」を養成する準軍事組織、東独）

GVS = Geheime Verschlusssache、秘密事項

HA = Hauptabteilung、局、シュタジ大臣代理（複数）が直接管轄した。下記がその例

HA IX = Hauptabteilung IX、シュタジ第 IX 局（東独国家保安省本部の刑法による捜査部門）

HA PS = Hauptabteilung Personenschutz, 要人警護局（東独国家保安省本部の SED・国家施設、要人の警護部署）

HGW = häufig wechselnder Geschlechtsverkehr、頻繁に取り替える性交（東独、売春婦）

HV A = Hauptverwaltung A (Aufklärung, Auslandsspionage)、シュタジの対外諜報本部、長年「顔のないスパイ」マルクス・ヴォルフが指揮し成果を挙げたことで有名

IM = Inoffizieller Mitarbeiter、非公式協力者。多くはシュタジへの密告目的の部外協力者だが、「敵対的・否定的人物」の「処理」を指示されることもあった。また一部は他組織の仮面を付けたシュタジ職員であった。IM には色々な種類があったが、1989 年合計約 18.9 万人（Engelmann 2016:171）

IVK = Internationale Vorbereitungskomitee、第 10 回世界青年学生祭典の国際準備委員会（1972 年 1 月発足）

JU = Junge Union、若い同盟（キリスト教民主同盟・同社会同盟の青年組織、西独、現ドイツ）

Judo = Jungdemokraten、若い民主主義者（当時は FDP 系の青年組織、西独、現ドイツ）

Jusos = Jungsozialisten in der SPD、ドイツ社会民主党青年社会主義者（西独、現ドイツ）

K-M-Stadt = Karl-Marx-Stadt、カール・マルクス・シュタット（東独の都市名（旧・現ケムニッツ）かつ県名）

KPD = Kommunistische Partei Deutschlands、ドイツ共産党（戦前から存在したが、東独では同地域内のドイツ社会民主党と合併して 1946 年 SED に再編、西独では 1956 年非合法化。但しその後西独に DKP を批判する 2 つの KPD が存在し、1973 年時点ではともに毛沢東主義を支持した。東独でも末期に KPD が結成された）

LPG = Landwirtschaftliche Produktionsgenossenschaft、農業生産協同組合（東独、いわゆる農業集団化組織）

M = Mark der DDR、東独マルク（通貨）

MfS = Ministeriums für Staatssicherheit. 東独国家保安省

ND = *Neues Deutschland*、SED 中央機関紙

NFK = Nationale Festivalkomitee für die X.Weltfestspiele 1973、第 10 回世界祭典のための国家祭典委員会（1972 年 2 月 18 日発足、118 人、委員長ホーネッカー）

NVA = Nationale Volksarmee、国家人民軍（東独）

PLO = Palestine Liberation Organization、パレスチナ解放機構

SAPMO (-BArc) = Stiftung Archiv der Parteien und Massenorganisationen der DDR im Bundesarchiv、DDR 政党・大衆組織公文書財団（ベルリン・リヒターフェルデ）。ドイツ連邦公文書館内の独立の公法財団

SDAJ = Sozialistische Deutsche Arbeiterjugend、社会主義ドイツ労働者青年団（DKP 系、西独、現ドイツ）

SED = Sozialistische Einheitspartei Deutschlands、ドイツ社会主義統一党（東独支配党）

SPD = Sozialdemokratische Partei Deutschlands、ドイツ社会民主党（当時西独与党、現ドイツ）

Stasi = シュタジ= Staatssicherheit の略。MfS またはその職員

VDS = Verband Deutscher Studentenschaften、ドイツ学生連合（西独、現ドイツ）

VEB = Volkseigener Betrieb、人民所有企業（東独、国有企業）

VEG = Volkseigenes Gut、人民所有農場（東独、国有農場）

VM = Valutamark、外貨マルク（東独）

Vopo = Deutsche Volkspolizei、ドイツ人民警察（東独）

VP = Vopo

VVS = Vertrauliche Verschlusssache、機密事項

ZAIG = Zentrale Auswertungs- und Informationsgruppe、中央評価情報グループ（シュタジ本部の情報中枢）

ZDF = Zweites Deutsches Fernsehen、ドイツ第 2 テレビ放送（西独、現ドイツ）

ZMA = Zentrale Materialablage、（シュタジの）中央資料保管庫

ZOES = Zeitweilige operative Einsatzstab、臨時作戦投入参謀部」（シュタジが祭典作戦「旗」実施のために 1973.04.25～1973.08.10 に主要部局ほかに設置）

ZOS = Zentraler Operativstab、（シュタジの）中央作戦参謀部（東独）

引用文献

（注 1）本文記載の URL や Wikimedia Commons を除く。これらおよび以下の URL は特記しない限り本稿掲載時有効。本文中の〔〕の中は青木。引用の際の邦訳ページは「訳」を付して表記。

（注 2）雑誌 Kulturation はページ割りのないオンラインジャーナルのため引用時にページ記載不可。

青木國彦（1985）社会主義計画経済体制と私的営業、『研究年報経済学』（東北大学）46-4（http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/gsk.html 所収）
-----（1985a）社会主義における余剰・不足と私的営業、『研究年報経済学』（東北大学）156（上記 URL 所収）
-----（1991）『壁を開いたのは誰か』化学工業日報社
-----（1992）『体制転換』有斐閣
-----（2004）「プラハの春」の東独波及とポーランドからチェコへの連帯クーリエ（ヘルシンキ宣言からベルリンの壁開放へ）、『カオスとロゴス』26（2004.12）（上記 URL 所収）
-----（2009）東独出国運動の発生：逃亡の時は過ぎ、闘うべき時が来た、『研究年報経済学』（東北大学）70-2（上記 URL 所収）
----（2018）ケネディのベルリン演説（1963 年 6 月）再考：ブラント東方政策との比較、『研究年報経済学』（東北大学）76-1（上記 URL 所収）、『社会主義体制史研究』6（2019）にも転載
-----（2018a）元東独政治犯ガルテンシュレーガーの冒険：東独国境自動射撃装置 SM-70 奪取の意味と限界、『社会主義体制史研究』1（http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/ 所収）
-----（2018b）CSCE（全欧安保協力会議）ウィーン会議へのホーネッカーとシュタジの対応、『社会主義体制史研究』2（http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/ 所収）
----（2018c） ベルリンの壁最後の射殺ギュフロイ事件（1989 年 2 月）の詳細とその意味、『社会主義体制史研究』3（http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/ 所収）
-----（2019）東独通貨マルクの対外関係：最低交換義務、公式・ヤミレート、末期状況、『社会主義体制史研究』9
朝日新聞 2001.03.18「33 年ぶりソンミの再会：ベトナム戦争で虐殺から少年救った元米兵」
総務省統計局、「日本の長期統計 18-8 外国為替相場」、in: http://www.stat.go.jp/data/chouki/18.htm
野村修（1986）『ビーアマンは歌う』晶文社
山田晟（1982）『ドイツ民主共和国法概説』下、東京大学出版会
吉川元（1994）『ヨーロッパ安全保障協力会議（CSCE）』三嶺書房
Abt XII Di Nr. 9, Eröffnungsfeier der X. Weltfestspiele der Jugend und Studenten, in: BStU MfS.
Ackermann, Robert (2014.05.18) DDR-Jugendradio DT64: Pop und Propaganda, in: *SP Online*.
AGM 2065 (Bl.229-278) Befehl Nr. 13 /73 zur Sicherung der Vorbereitung und Durchführung der X. Weltfestspie-le der Jugend und Studenten 1973 in der Hauptstadt der DDR, in: BStU MfS. この文書について Ochs（2003）はシュタジ本部 ZOS 所蔵ファイル（MfS ZOS 1171）を使用。シュタジは多くの同一文書を複数の部署に保管したが、BStU は保管部署毎に別の分類番号を付与した。
Amt für Statistik Berlin-Brandenburg (2016) *Statistischer Bericht B III - j / 15: Studierende an Hochschulen in Berlin Wintersemester 2015/2016 Teil 2: Ausführliche Ergebnisse*.
Axen, Hermann (1973) Zwei Staaten - zwei Nationen: Deutsche Frage existiert nicht mehr, in：*DA*, H.4.〔この表題は DA によるもので、原題は「Die Festigung der internationalen Positionen der DDR」（in: *Horizont*, 12/ 1973）。〕
----- (2003a) *Zur Entwicklung der sozialistischen Nation in der DDR*, Dietz.
Bickelhaupt, Thomas (2013) Weltjugendfestspiele: Als die DDR sich weltoffen gab, in: *Die Welt*, 27.07.2013.
BMiB (Bundesministerium für innerdeutsche Beziehungen) (Hg.), H. Zimmermann (Wiss. Leitung:) (1985) *DDR Handbuch*, Band 1 A-L / Band 2 M-Z, 3., überarbeitete und erweiterte Auflage, Wissenschaft und Politik.（通しページなので、引用では巻数省略。）
bpb (2003) Weltfestspiele in Zahlen und Fakten, in: http://www.bpb.de/geschichte/deutsche-geschichte/weltfestspiele-73/65345/
----- (2004) Spezial Weltfestspiele 1973: Video-Interviews mit Zeitzeugen I, in: http://www.bpb.de/geschichte/deutsche-geschichte/weltfestspiele-73/65284/
----- (2004b) Spezial Weltfestspiele 1973: Video-Interviews mit Zeitzeugen II, in: http://www.bpb.de/geschichte/deutsche-geschichte/weltfestspiele-73/65319/
Breßlein, Erwin (1973) *Drushba! Freundschaft?: Von der Kommunistischen Jugendinternationale zu den Weltjugendfestspielen*, Fischer Taschenbuch.
----- (2003) Die organisatorischen Vorbereitungen in der DDR, in: http://www.bpb.de/apuz/25249/
----- (2003a) Rückblick auf die Weltfestspiele I bis VIII (1947-1962), in: http://www.bpb.de/apuz/25245/
----- (2003b) Das Festival - Alibi für die Ausnutzung der Jugend, in: http://www.bpb.de/apuz/25250/
Bundesbank, Deutsche (1999) *Die Zahlungsbilanz der ehemaligen DDR 1975 bis 1989*.
DDR 1989/90 (website), Ina Merkel, in: https://www.ddr89.de/personen/merkel.html
DDR 統計年鑑：Staatliche Zentralverwaltung für Statistik (Hg.) *Statistisches Jahrbuch der DDR*, Staatsverlag.
Deutsche Shell AG (1981) *Der große Shell Atlas 1981/82*, Mairs Geographischer.
Diedrich, Torsten, H. Ehlert u. R.Wenzke (Hg.) (1998) *Im Dienste der Partei: Handbuch der bewaffneten Organe der DDR*, 2., durchgesehene Auflage, Ch. Links.
Dietrich, Gerd (2003) Eine "weltoffene" Diktatur. Die DDR am Beginn der 70er Jahr, in: *Kulturation*, H.2.
Dokumentation (1973) Zum Tode Walter Ulbrichts, in: *DA*, H.9.
DY 30/J IV 2/2/2263, in: SAMPO-BArch.
Engelmann, Roger u.a. (Hg.) (2016) *Das MS-Lexikon*, 3., aktualisierte Auflage, Ch. Links
Forberg, Christian (2014) Die schwierige Nachbarschaft von Preußen und Sachsen, in: https://www.deutschlandfunk.de/schwerpunktthema-die-schwierige-nachbarschaft-von-preussen.1148.de.html?dram:article_id=288977
Förster, Peter; Günter Roski (1990) *DDR zwischen Wende und Wahl: Meinungsforscher analysieren den Umbruch*, LinksDruck.
Friedrich, Walter (1990) Mentalitätswandlungen der Jugend in der DDR, in: *Aus Politik und Zeitgeschichte*, B 16-17/90.
GBl = Gesetzblatt der DDR
HA IX 5354, in: BStU MfS, in: https://www.jugendopposition.de/themen/145451/
HA IX 5355:Bl.1-3, Auszug aus einem Bericht der Hauptabteilung Kriminalpolizei, in: BStU MfS, in: https://www.jugendopposition.de/themen/145451/
HA IX 16677:Bl.16-21, Konzeption für den Abschluß der operativen Bearbeitung Biermanns vom 12.4.1973, in: BStU MfS.
HA XX, Fo, 147 (1976) , Wolf Biermanns Wohnung, in: BStU MfS.
Helmberger, Peter (2008) *Blauhemd und Kugelkreuz: Konflikte zwischen der SED und den christlichen Kirchen um die Jugendlichen in der SBZ/DDR*, m press.
Honecker, Erich (1975) *Reden und Aufsätze*, Bd1, Dietz.
----- (1975a) *Reden und Aufsätze*, Bd2, Dietz.
----- (1980) *Aus meinem Leben*, Dietz. 安井栄一訳『私の歩んだ道』サイマル出版会 1981
Jahnke, Karl Heinz (Leiter) (1983) *Geschichte der Freien Deutschen Jugend*, 2., durchgesehene Auflage, Neues Leben.
jugendopposition.de: Es lebe der Beat!, in: https://www.jugendopposition.de/themen/145446/

----- (2019) Die X. Weltfestspiele 1973, letzte Änderung Januar 2019, in: https://www.jugendopposition.de/themen/145451/

Kaiser, Monika (1990) 1972: *Knockout für den Mittel-stand*, Dietz.

Kunze, Reiner (1976) *Die wunderbaren Jahre: Prosa*, S. Fischer, クンツェ、ライナー（大島かおり訳）（1982）『素晴らしい歳月』晶文社

----- (1990) *Deckname »Lyrik«: Eine Dokumentation von Reiner Kunze*, Fischer Taschenbuch, ライナー・クンツェ（山下公子訳）『暗号名「叙情詩」』草思社

Lippmann, Heinz (1973) X. Weltjugendfestspiele im Geist der Volksfrontpolitik, in:*DA*, H.8.

Mählert, Ulrich; G.-R. Stephan (1996) *Blaue Hemden - Rote Fahnen: Die Geschichte der Freien Deutschen Jugend*, Leske + Budrich.

Maeke, Lutz (2011) Wider die Vernunft, in: *DA*, H.4.

MDR (2018.08.03) Ein Hauch von Freiheit während der X. Weltfestspiele in der DDR, in: https://www.mdr.de/zeitreise/ddr/weltfestspiele-in-der-ddr100.html

Merkel, Ina (2003) Im Spiegel des Fremden: Die Weltfestspiele von 1973, in: *Kulturation*, H.2.

Mitter, Armin; Stefan Wolle (Hg.) (1990) *Ich liebe euch doch alle!: Befehle und Lageberichte des MfS Januar –November 1989*, BasisDruck.

Müller-Enbergs, Helmut u.a. (Hg.) (2010) *Wer war wer in der DDR?*, 5. aktualisierte und erweiterte Neuausgabe, Ch. Links.

Nawrocki, Joachim (1973) X. Weltfestspiele der Jugend und Studenten: "Jedes Bett ist Politik", in:*Die Zeit*, Nr.29 (20. Juli).

ND 1976.11.17, S.2, Angemessene Antwort auf feindseliges Auftreten gegen DDR von Dr. K., in: *Neues Deutschland*.

Neubert, Ehrhart (1998) *Geschichte der Oppositon in der DDR 1949-1989*, 2., durchgesehene und erweiterte Auflage, April 1998, Ch. Links.

Ochs, Christoph (2003) Aktion „Banner“: Operativer Einsatz, Taktik und Strategie des MfS während der X. Weltfestspiele 1973, in: *Kulturation*, H.2.

Ohse, Marc-Dietrich (2003) *Jugend nach dem Mauerbau: Anpassung, Protest und Eigensinn (DDR 1961-1974)*, Ch. Links.

Pick's Currency Yearbook, Pick's World Currency Report.

Rauhut, Michael (1993) *Beat in der Grauzone: DDR-Rock 1964 bis 1972 - Politik und Alltag*, Basis Druck.

Renft (2018), Legenden sterben nie: 1958 – 2018 // 60 Jahre RENFT, in: https://www.renft.de/band/

Rexin, Manfred (1973) Vor den X. Weltfestspielen, in: *DA*, H.6.

----- (1973a) Westdeutsche Jugendverbände bei den X. Weltfestspielen, in: *DA*, H.9.

Rodden, John (2002) *Repainting the Little Red School-house: A History of Eastern German Education, 1945-1995*, Oxford UP.

Rossow, Ina (1999) »Rote Ohren, roter Mohn, sommerhei-ße Diskussion«: Die X. Weltfestspiele der Jugend und Studenten 1973 als Möglichkeit für vielfältige Begegnungen, in: Dokumentationszentrum Alltagskultur der DDR (Hg.) (1999) *Fortschritt, Norm und Eigensinn: Erkundungen im Alltag der DDR*, Ch. Links, S.257ff.

Sommer, Stefan (2002) *Das Grosse Lexikon des DDR-Alltags*, Schwarzkopf & Schwarzkopf.

Spiegel (1964) Sonne, Sex und Sozialismus, in: *SP*, Nr. 22.

----- (1973) panorama: München-Angst in der DDR, in: *SP*, Nr. 29.

----- (1976) "Das Land ist still. Noch.": Wolf Biermann und die DDR, in: *SP*, Nr. 48.

----- (2006.10.09) Klaus Renft: DDR-Rocker gestorben, in: *SP Online*.

Steinmetz, Rüdiger u.a. (Hg.) (2008) *Deutsches Fernsehen Ost* (Video), Verlag für Berlin-Brandenburg, in: https://www.bpb.de/system/files/dokument_pdf/PuF_J_21_RockfuerdenFrieden.pdf

Suckut, Siegfried (Hg.)(1996) *Das Wörterbuch der Staatssicherheit: Definitionen zur »politisch-operativen Arbeit«*, Ch. Links

Tantzscher, Monika (1998) *Die verlängerte Mauer: Die Zusammenarbeit der Sicherheitsdienste der Warschauer-Pakt-Staaten bei der Verhinderung von "Republikflucht"*, BStU (Analysen und Berichte).

Taubert, Klaus (2008) *Generation Fussnote: Bekenntnisse eines Opportunisten*, Schwarzkopf + Schwarzkopf.

----- (2013) Walter Ulbrichts Ende: Gekränkt, gestorben, getilgt, in: *SP Online einestages*: http://www.spiegel.de/einestages/walter-ulbrichts-ende-gekraenkt-gestorben-getilgt-a-951393.html

VEB Tourist Verlag (Hg., 1980) *Buchplan Berlin: Hauptstadt der DDR*.

Wentker, Hermann (2007) *Außenpolitik in engen Grenzen: Die DDR im internationalen System 1949-1989*, R. Oldenbourg, ヴェントカー（岡田浩平訳）『東ドイツ外交史 1949-1989』三元社

Wesenberg, Denise (2003) X. Weltfestspiele der Jugend und Studenten 1973 in Ost-Berlin, in: *DA*, H.4.

Wolle, Stefan (2008) Weltjugendspiele in Ost-Berlin: Das Woodstock des Ostens, in: *SP Online*, 28.07.2008.（多くの写真も掲載）

----- (2013) *Die heile Welt der Diktatur: Herr-schaft und Alltag in der DDR 1971-1989*, 4. Auflage, Ch. Links.

----- (2013a) *Der große Plan: Alltag und Herrschaft in der DDR 1949-1961*, Ch. Links.

Zeit (1973) Biermanns Lied, in: *Die Zeit*, Nr.32 (10. Aug.)